

再・ロータリー随想

その周辺とともに

菅生浩三

2004年9月

行政組織でも営利団体でもない善意の団体が、
なぜ100年の歴史を超えて生きつづけるのか！
その秘密は、職業を通じて他者へサービス(奉仕)する
ロータリーの精神にあった！

再・ロータリー随想

その周辺とともに

菅生浩三

先般『新・ロータリー随想』を世に出してから五年の月日が経過し、最初に『ロータリー随想』を世に問うてからは一一年という時間が経過した。その間、二〇〇二年七月からは国際ロータリー理事に選出され、漸く二〇〇四年六月末日をもって曲がりなりにその任務を終えたが、国際的規模を含めて、国際ロータリーのハードとソフトの両面にわたり、マクロとミクロの見地から、色々と考察し検討する機会に恵まれた。なканずく、ロータリーの原点であるサービスの理念 The Ideal of Service と職業奉仕 Vocational Service を基本として、会員増強やロータリー財団とその活動のあり方などについて、思いを新たに自分の考えを各方面に発表する必要に迫られたので、それらをまとめて『再・ロータリー随想』として世に出すこととした。前書に引き続き、不覚にして未熟な試行錯誤の一里塚の域を出ないし、特にロータリー財団については、大幅な改正が行われているの

で必ずしも正確を期しがたいけれども、私に与えられた時代への模索の一こまとして、そのまま掲載することとした。

前書に引き続きご笑読のうえ、ご意見とご叱正を賜れば、望外の幸せである。

本書の出版に当たり、貴重なご指導やご助言を賜った多くの諸先輩と友人ロリータリアン各位のご厚情に深謝申し上げますとともに、前書同様万般のお世話を頂いた小倉淳平氏に心から感謝を申し上げます次第である。

二〇〇四年九月

菅生 浩三

目次

はしがき……1

ロータリー雑感……9

ロータリーあれこれ……22

二一世紀を目前にして、ロータリーの現状と将来を考える……30

ロータリー百年を目前に、その原点を見つめる……36

ロータリーの活動に関する一考察……39

サービスの理念と職業奉仕……43

今日における職業奉仕の重要性について……61

—二〇〇三年アナハイム国際協議会における講演に基づいて

現時におけるわが国の会員増強と退会防止について……72

ロータリーの拡大に伴う根本問題……79

会員増強に当たっての広報の役割……83

広報と会員基盤の強化について……88

青少年奉仕と家庭の価値……94

規定審議会の代表議員に望む……102

ガバナーの皆様に期待する……104

ロータリー財団のプログラムについて……108

ロータリー財団の課題について……113

ロータリー財団の機能について……117

ロータリー財団の素描……122

文化交流活動としてのGSEの現代的意義……134

財団学友会(PSC)活動について……137

近頃思うこと……………140

バイマーマンジンさんと「夕焼け小焼け」……………142

親睦と奉仕……………146

大阪北ロータリー・クラブ創立記念卓話……………148

―ロータリーのわが国への導入と大阪北ロータリー・クラブ創立の沿革について

マジイアベ会長の二〇〇三～〇四年度R Iテーマについて……………155

二〇〇二～〇三年度R I第三五二〇地区大会における

R I会長代理の挨拶……………161

二〇〇三～〇四年度R I第二六三〇地区大会における

R I会長代理の挨拶……………167

第三二回ロータリー・ゾーン研究会における招集者の挨拶……181

―二〇〇三〜〇四年度RIゾーン一、二、三、四(A)

感動と拍手につつまれた関西国際大会……184

―四万六千人を迎えて大成功を収めた四日間の報告

二〇〇三〜〇四年度RI現況報告……221

ロータリーを祝おう……235

会議前の祈りの言葉……242

国際ロータリー理事会における理事退任の挨拶……244

ロータリー雑感

国際ロータリーに思いをいたすとき、ポール・ハリス Paul P. Harris、アーサー・シェルドン Arthur F. Sheldon、チェスリー・ペリー Chesley R. Perry の三人と、アーチ・クランプ Arch C. Klumph の名を忘れることはできない。ポール・ハリスは、ザ・ファースト・ロータリアンとして、ロータリーに生命を与えた創始者である。シェルドンは、ロータリーにサービスの理念 The Ideal of Service というソフトを与えた人である。ペリーは、ロータリーにハードとしての組織を与えた人である。クランプは、ロータリーにロータリー財団という財政の基盤を与えた人である。この四人なくしては、今日のロータリーは存在しなかったわけである。

まず、ロータリーという組織は、ポール・ハリスの発想を現実化したものであ

るから、その性格が創始者ポールの思想と人柄や気質を離れて存在し得ないことは、いうまでもない。ところで、ポールが幼少期を過ごしたニューイングランド地方の自然の風物と、ポール・ハリスを慈しみ育てた祖父母の人柄は、ポールの人格形成に決定的な影響を与えた。ニューイングランドといえば、キリスト教社会の複雑な事情を背景に、メイフラワー号に乗って故国イングランドを逃れ、新しい土地を求めて新大陸に渡来した清教徒の集団によって開かれた地域であることは、周知のとおりである。清教徒といえば、スコットランドを中心に、聖書の原点に帰ることを徹底する改革を志向して、カトリックの伝統を残す国教会と鋭く対立したプロテスタントのカルヴァン派のグループであった。美しいグリーン山脈の「丘の上の灯台」である教会を中心に築かれ、ハーバード大学やボストン交響楽団などアメリカの歴史と文化を代表し、古きよきアメリカの気風を象徴する田園都市地域で、そこに生まれ住む人たちこそ、ヤンキーであった。高潔と名誉、自己犠牲と献身、真実と誠実、質朴、頑固、勤勉、寡黙、友情と寛容、それに子供たちに対する深い愛情は、ニューイングランドの典型的な家庭の真髄であ

った。ポールは、幼少期から少年期を過ごしたこのような生活環境から、美しい自然に恵まれ素朴な風習や人間同士の親しみに溢れた田舎の町の生活、ひたむきなプロテスタントの信仰と社会への献身、真実に基づく誠実な生活態度、友情と他人への愛情や思いやりに溢れた人間関係、宗教や政治の面での寛容などの貴さを、しっかりと身に沁みて教え込まれた。このようにして育ったポールは、友情を最高に大切にし、友人を裏切ることには絶対になかった。また、ポールは寛容であつた。人々の違いや欠点に目を付けるよりは、人々の共通点や長所を取り上げた。次に、仕事を大切にした。仕事の処理は、どこまでも誠実で、依頼人から絶大な信頼を勝ち取つた。また、常に夢を持ち、強い意志と熱意を持って事に当つた。さらに、謙虚であつた。常に自分は表に立たず、友人をたてていた。このようなポールの資質が、ポールをロータリーの創設に向かわせ、ロータリーの基底にしっかりとそのような志向を定着させたのである。

次にポールは、シカゴ・クラブにシエルドンという友人を入会させたが、このことが、ロータリーの創始者であり精神的指導者としてのポールの高い資質を実

証して余りあるものである。創設当初のロータリーは、ポールの人柄を反映して、真実を基本として、誠実な人間関係と他人への愛情や仲間への友情を大切にする真面目なクラブではあったが、結局において欧米社会に珍しくない異業種人士の集まりで、仲間同志の懇親と相互扶助を主な目的とするいわゆる平凡な社交クラブの域を出るものではなかった。Food (おいしい食事)、Fun (楽しみ)、Fellowship (仲間同志の友情) の頭文字を取った三Fクラブという命名が真剣に検討されたくらいであった。ところが、創設後三年経った一九〇八年に入会したシエルドンは、書籍のセールスマンであったが、利を貪るに手段を選ばない当時のシカゴの無法社会の実情の中で、果たしてロータリー・クラブにどれだけの存在意義があるのかと深い疑問を持った。そして、他人のために尽くす気持で商売をしている者が結局は最後の成功をかち得ている多くの実例を観察して、"The Profits Most Who Serves His Fellows Best" 「仲間にも最も良く奉仕する者は、最も多く報いられる。」との結論に達し、一九一〇年の全米ロータリー連合大会の晩餐会の席上でこの考え方を発表するとともに、この "Service" 「サービス」とい

う觀念の意義をポールに進言した。元來、社会への献身を志向する氣質を持つていたポールは、すぐにこのシエルドンの言を理解し、これをローターリーの存在意義とすることを決意した。かくて、シエルドンの言葉は、“His Fellows” [仲間] という閉鎖的な表現の部分を削除して、“He Profits Most Who Serves Best” [最も良くサービスをする者は、最も多く報いられる。]の表現となり、翌一九一一年のポートランドの全米ローターリー連合大会で、大会決議として満場一致で採択された。これが「サービス」の觀念がローターリーの世界に登場した最初であり、さらに翌一九一二年のデュールーズの国際大会で、定款の中の「綱領」の中心觀念として“The Ideal of Service” [サービスの理念] (「奉仕の理想」と邦訳) という表現で規定されて今日に至っていることは、周知のとおりである。シエルドンは、専ら事業家の立場で「サービス」を説いたが、シエルドンのサービスの觀念に刺激されたミネアポリス・ローターリー・クラブの会長のフランク・コリンズ B. Frank Collins は、弁護士という専門職務の立場からさらに徹底して、“Service, Not Self” [無私の奉仕] とこの言葉を提案したが、「無私」は極端であ

るとして「超我」と修正され、「Service Above Self」「超我の奉仕」として同様大会決議として採択された。この二人の言葉は、ロータリーの公式の標語 Motto とすれ、「Service Above Self, He Profits Most Who Serves Best」という表現は、長くロータリアンの人口に膾炙してロータリーの理解に計り知れない深い影響を与えていることも、周知のとおりである。ポールは、「牧師が宗教の世界に神の言葉を伝道する如く、シエルドンはロータリーの世界にサービスの精神を伝えた伝道師であった。」という言葉で、シエルドンを称えている。結局においてシエルドンは、ポール・ハリスが抱いていた主観的な人間愛に、自己制約を中心とする醇化された社会性を裏打ちとして賦与することにより、客観性を備えた高度のソフトとして完成させたのである。

さらにポールは、もう一人の友人ペリーを、シエルドンと同時期にシカゴ・クラブに入会させた。ペリーは、一九一〇年に一六クラブから成る全米ロータリー連合会を組織してその大会を成立させ、この組織を今日の国際ロータリーに発展させたわけである。その後ポールの逝去に伴い一九四二年に引退するまで三〇年

にわたり、引き続き事務総長の地位にあり、定款、細則の内容から、奉仕活動、各種の会合、クラブ、地区、国際ロータリーに至るまで、ロータリーの社会組織としての存在の確立と充実のために、その人生の大半を捧げた。ポールが播いた一粒のロータリーの種は、その後九四年、没後五二年を経て、全世界一五九の国に、総数一、一八八、八一六人のロータリアン、二九、一一七のクラブ、五二七の地区を数えるに至っているが、このようなロータリーの全世界にわたる驚異的な発展の現実的な基礎の確立は、ペリーの資質と努力に負うところが多大である。

また、国際ロータリーの第六代会長であったクランプは、一九一七年アトランタの国際大会に、「全世界の規模で慈善教育その他社会奉仕の分野で何かよいことをしよう。」として基金の設立を提案し、これがロータリー財団の誕生となった。一九四七年一月ロータリーの創始者ポールの逝去に当たり、その死を悼みその功績を称えて全世界のロータリアンから総額米貨一三〇万ドルに及ぶ寄付金が寄せられ、ここに財団は永年の夢であった財務の安定とその理想を叶えるための

プログラムの創設を現実のものとする事ができるとなった。大学院課程の学生を対象とした国際的な奨学金の教育的プログラムが実現し、世界七か国から選ばれた一八人の優秀な学生に奨学金が支給されて、最初のロータリー国際親善奨学生が誕生したのである。今日において、財団は、民間における世界最大の育英組織へと発展し、毎年約一、三〇〇人を超える学生を留学させているだけでなく、人道的プログラムと文化交流プログラムが加わり、人間社会の福祉を実現しようとする財団のプログラムが飛躍的な充実を見るに至っていることは、周知のとおりである。財団は、その正式の名称を「国際ロータリーのロータリー財団」といい、法律上は、アメリカ・イリノイ州の法令に基づいて一九八三年に設立された非営利財団法人で、ただ一人の法人会員である国際ロータリーによって構成されている。その組織と運営は、財団自体の定款と細則に基づいて行われているが、現実の運営は、国際ロータリー会長が国際ロータリー理事会の承認を得て任命する任期四年の一三人の管理委員によって処理され、国際ロータリーと財団の運営の整合性が制度上保障されている。ロータリー財団のプログラムには、教育

的、人道的、文化交流の三つがある。ロータリーは、人と社会の幸せの基本は人にあるとしているので、先ず教育作業の充実が要請される。また、人間社会は政治や行政によつては真の充足は不可能であるので、その理想を実現するためには、人々による社会への自発的奉仕、特に後進社会の人々や弱者に対する人道的支援が不可欠である。そして最終的には、人間社会の真の福祉は、国際間の人文の交流と相互理解によつて初めて実現される。財団に三つのプログラムが存する所以である。

結局において、ロータリーとは、ポールが提供した人間愛の素材と設計思想のもと、ペリーが構築した堅牢なハードと、克蘭フが提唱したロータリー財団という強固な財政的基盤に、シェルドンが提唱した人間社会普遍の原理「サービスの理念」をソフトとして盛り込んだ、国際社会における壮大で不滅の組織的な実験体であるともいふべきであろうか。ポールは、その逝去を目前に脱稿した自伝『ロータリーへの私の道』の巻末に、「神よ、人々や国々の欠点が目に入らなくなりませうように、長所だけが目につくようになりませうように。―地上に平和が

ありますように。」という辞世ともいふべき祈りの言葉を最後に書き残しているのも、ロータリーの存在と志向の本質を、一言に凝縮させたものといふべきであろう。国際ロータリーは、人間愛とサービスの理念を掲げ、これを実現する努力こそが、人間社会を数々の災厄から救い、その真の福祉を実現する所以であることを提言し続けて今日に至った。けだし、人間社会は、一方において、人間性の限りない開放を前提とする自由主義やその経済活動への適応である資本主義に固執し、他方においては、人間性の完全な外からの管理を前提とした社会主義やその経済活動への適応である共産主義に狂奔し、その双方が社会の病弊から私どもを救済するに全く無力であることを現認した。そこでさらに、中間的な形態で、外からの多様な制約を工夫することによる解決を試みて来たが、これも事態の根本的解決には殆ど無縁であることを自覚せざるを得ないこととなった。かくて、人々の内からの制約を提言するロータリーの存在意義は、時代と共にますます高まって来ているといふべきであらう。

思うに、二〇世紀は、先進の欧米の人々が、国際社会におけるその他の非欧米

の後進の人々を、意図的に指導し、また、結果的に啓蒙した時代と総括することができよう。わが国は、非欧米諸国の先達として、明治初年以來いち早く、脱亜入欧のスローガンのもとに、欧米諸国の自然科学と生産技術を取り入れただけでなく、社会科学とその成果を政治体制やあらゆる社会組織に取り入れたが、第二次世界大戦後は、大多数のアジア、アフリカその他の非欧米諸国においても、このような欧米追隨の努力が着手継続され、一応その成果を挙げつつあるといえよう。ところが来るべき二一世紀は、このような二〇世紀における国際社会の欧米化の成果を踏まえ、欧米の人々と非欧米の人々との間に真の対話が成功するかどうかを決定する世紀となるものと思われる。何故ならば、欧米文化には、人間社会に幸せを提供する資質に限界があるだけでなく、同時に人間社会に避けることのできない深刻な障害を与える体質を本質的に帶有しているし、非欧米の人々の側でも、それぞれ固有の歴史と文化を保持していて、単なる欧米化の波によって決して同化できない限界が厳存するからである。換言すれば、国際社会の単純な欧米化を安易に放置すれば、それだけで、幾多の混乱、紛議、衝突、係争等が

発生し、国際社会の全般的平和の実現は、半永久的に遠のき、殆ど期待できないことになろう。そこで、欧米の人々と非欧米の人々との間の対話による相互理解の努力によつてのみ、相互の平和共存のための方策の模索が成功することとなるものと思われる。わが国は、目下社会の構造的な変革と社会意識や価値観の根本的な検討を迫られ、物心ともに未曾有の混乱の中にあるが、このことをマクロに眺めれば、非欧米の民族の先達としていち早く社会の欧米化に着手して一応の成果に到達したものとして、欧米と非欧米の両文化の谷間にあつて、今後における人間社会のあり方を先んじて独自に模索するという、いわば産みの苦しみの中にあることを意味するのかもしれない。国際ロータリーが、国際間の理解と親善と平和の推進をその究極の目的としていることは、いうまでもない。私どもは、新しい二一世紀の到来を目前にして、欧米、非欧米双方の人々、世界の多くの民族の人々との間の対話と相互理解に努めようとする国際ロータリーの活動が、日一日とより身近なものとなり、その重要性を増していることの自覚を迫られている。さらに、二一世紀を迎え、社会意識の根本的な変革と科学技術の急激な開発に伴

い、社会の基盤自体の根源的な激変が予定される今日、従来どおり既存の社会基盤に安住してロータリー活動を展開するだけでは、ロータリーの存在意義は徐々に限りなく低下して行かざるを得ない。今後のロータリーは、社会基盤の構築自体に向けても企画し発言し実行しなければならぬ。このような見地から、私どもは、国際社会におけるロータリー活動の今後のあり方について、方策の策定とその実施に向けて、根本的な努力を重ねて行く責任を痛感する次第である。

(二〇〇〇年五月)

ロータリーあれこれ

「ロータリーあれこれ」の題名で、最近のロータリーが抱える多くの問題のうちから基本的な四つを選んで、考えてみたい。ロータリーの今日社会における存在意義、若い人たちを会員として確保することの大切さ、多くの民族間における対話の促進にロータリーが果たすべき役割、教育の改善にロータリーが果たすべき役割の四つについてである。これらは、一見別々の課題であるような外観を呈しているが、その底流と問題の本質は一つであると思われる。

先ず、ロータリーの今日社会における存在意義についてである。ロータリー精神の核心が、その綱領の中核であるサービスの理念 The Ideal of Service にあることは、いうまでもない。人は、他人の存在を前提として生きる精神的な存在である。従って、人は、自分だけで独自に生きるだけでなく、他人のために生きる

という側面が充足されない限り、決して真の幸せを手に入れることはできない。また、そのような人々で構成されない限り、幸せなよい社会は築かれないであろう。そのように生きることがサービスという理念に生きるということである。そして、私どもの社会にロータリーが存在する意義は、正にそこにある。ロータリーの創設後約一世紀が経過して、今日の社会状況は、ポール・ハリスが生きた時代とは大きく変わった。私どもの生活範囲も、小さな地域社会から地球全体の国際社会へと、最終の最大規模にまで拡大した。私どもの生活も、精神的な内容から物質的な内容に至るまで、文字どおり激変した。しかしながら、そこに生きている人間と人間が生きている社会の本質は、実は少しも変わっていない。容器の外見が変わっただけで、中味は全く変わっていない。従って、サービスの理念を保持して生きるというロータリーの存在意義も、全く変わっていないし、ただ、その生き方をどのような段取りで、どのような手法で実現して行くかという現象面での工夫が必要であり、その変化への対応の努力が求められているということであろう。私どもロータリアンは、今後人間の社会がどのように変わっても、ロー

タリーの存在意義が不変であることに確信を持ち、自信を持って生きるべきであると思う。

次に、若い人々を会員として確保することの大切さについてである。どのような団体であれ組織であれ、時間の経過とともに会員の高齢化が進み、新たに会員を補充しない限り、次第に会員は減少して、遂には消滅することとなることは、申すまでもない。そこで、社会に開かれた団体や組織の場合、会員の補充、なるべく若い会員の継続的な入会の確保が、その存続発展のために必要不可欠となる。ポール・ハリスが最初のロータリー・クラブ、後年のシカゴ・クラブを創設したときの年齢は、三六歳であった。しかるに、今日のわが国のロータリー・クラブの会員の平均年齢は、多くが六〇代で、しかもその後半といった現況であり、しかも若い人々に声を掛けても、なかなか入会しようとしめない傾向にあるのとことである。これは由々しい事態であり、わが国のロータリーの将来のため、まことに憂慮すべき状況といわねばならない。その原因として、ロータリーに魅力がないからだとか、不景気だからだとか、若い人々は大変忙しいからだとか、ロ

ロータリーは金がかかりすぎるからだとか、色々いわれている。私も、そのすべてが正しいと思う。しかし、いくら詳細に原因を論じてみても、それだけでは少しも解決に役立たない。若い人の入会は、増えない。では、どうすればよいのか。私は、先日京都のあるクラブに伺った。二〇〇人を超える大クラブであったが、例会場に入った途端、空気がワーンと鳴っているように感じた。活発なのである。そして、たまたま五人の新しい会員の入会式が行われた。それが皆三〇代後半から四〇代前半の人たちであった。紹介者も、全員が三〇代から四〇代であった。私は、正直びっくりした。今どきこんなクラブがあるのかと。やればできるのだなあと思った。一人や二人の若い人をポツンと入れるだけでは駄目で、できれば三人や五人と集団的に入れて行く。若い人たちは大変忙しいので、色々な活動はさておいて、せめて週一回の例会だけは、全部出席して貰うよう努力する。会費も、当分の間減額する。例会では、ロータリーでの理解を深めて貰うため、既存の会員が一丸となって努力する。これらの努力がサービスの理念というロータリーの存在意義の理解に及べば、今日における数々の社会的障害を乗り越えて、若

い会員の定着をはかることができる。そして、その若い会員たちが、次の若い人々たちを入会させて行くといった具合である。理論よりは実践であり、量が質に転化するということであろうか。

次は、多くの民族間における対話の促進にロータリーが果たすべき役割についてである。マクロにいつて、二〇世紀は、非欧米の人たちが欧米の人たちから考へ方や技術を学んだ世紀であった。わが国などはその先頭を切っていたわけで、優等生といわれていたことは、先刻ご承知のとおりである。そして、二〇世紀も終わりになると、その成果が実を結んで、非欧米の人たちの多くが自他の認識を深め、欧米の人たちに自らの権利とか意見を主張し始めただけでなく、非欧米の人々の間でも、相互に自己の権利や意見を主張するようになってきた。二一世紀は、地球規模の国際社会で、多くの民族の人たちの間で、円滑な対話と相互理解が期待される一方で、そのような対話や相互理解の不備不整、欠落や限界などによって、数々の紛議や係争の多発が憂慮される事態を迎えている。ロータリーの最終の使命は、サービスの理念を掲げて国際理解と親善と平和を推進することに

あるのであるから、二一世紀は、いよいよロータリーの本格的出番の世紀であるといわなければならない。その意味で、国際問題解決のためのロータリー・センターは、ロータリーにとって最終的な役割を果たすための最も重要なプログラムというべきである。そして、サービスの理念の実現を推進するために、センターの機能のさらに一段の充実と拡充をはかっていく努力は、ロータリーにとって正に今後における核心的な努力目標となるべきであろう。

最後に、教育の改善にロータリーが果たすべき役割についてである。例えば、多くの民族や人たちの相互理解を推進するといっても、理解の程度や態様は様々である。表面的で儀礼的な相互理解などは、殆ど意味がない。相互理解の名の下に、一部の民族や人たちの考え方や価値観を一方的に押しつけることは、却って有害である。知能に偏した判断による相互理解なども、大変危険である。真の相互理解とは、関係する多くの民族や人たちの総合的に開発された人間の資質に基づいた判断によってされるものでなければならぬ。それは、相互に対等で、客観的で、互換的なものでなければならぬ。そのためには、多くの民族や人たち

が知能に偏した教育を受けているだけでは駄目で、それでは却って誤った結果を招く。知能は人間の資質のほんの一部分で、人間には知能以外にも広く深い多くの貴重な資質がある。これらの資質全体を包括的に開発する教育、すなわち人間教育が必要である。このような教育を受けた人たちによって、初めて真の人間関係の構築から国際理解の実現が可能となるであろう。わが国の教育は、明治以来一貫して知能教育に偏して今日に至った。手本とした欧米の近代教育が、歴史的な沿革から人間教育を教会に委ねた結果、学校教育は、知能教育を主体とするものとなり、明治政府が鎖国による社会開発の遅れを急拠取り戻すために、欧米の教育体系を無批判に受け容れた結果、わが国民は、知能に偏し、人間としての完成を見ない未熟な状態で、今日に至っている。その間、無謀な開戦と当然の結果としての敗戦、無秩序な経済だけの発展とその崩壊、行方を見えない社会的混迷の継続なども、人間自体を教育することを怠った従前の欠陥教育の当然の結末であろう。ただ、教育が知能に偏している弊害や、特定のイデオロギーや宗教にとらわれない真の人間教育が微弱というかむしろ殆ど皆無といって過言でない状況

は、国際社会においても同様である。このことは、欧米流の知能教育がそのまま非欧米の人たちに無批判に受け容れられ、模倣されることによって、国際社会に全面的に波及して行っている結果でもあろう。しかしながら、その傾向は是正されなければならない。何故ならば、人間の資質の極く一部を不自然に開発するとは、決して人々や社会に真の幸せを齎す^{もたら}所以ではないからである。それどころか、そのような教育は、人々や社会に計り知れない災厄を齎すであろう。ロータリーは、真の国際理解を実現するためには、地域社会から国際社会に向けて、教育活動を単なる知能教育から全人間的な人間教育に改善して行く努力を着実に推進すべきであろう。サービスの理念は、人間のあり方を人々の内面から自発的に規律することを求める精神的努力というべきものであり、人間教育の核心的な理念として、またとない貴重な真理であるからである。

(二〇〇二年四月)

二二世紀を目前にして、ロータリーの現状と将来を考える

近時、ロータリー・クラブの会員数の継続的減少が指摘され、会員増強と退会防止対策の必要が声高く論ぜられていることは、周知のとおりである。現に、世界の会員数は、一九九七年の一、二二三、七四八人をピークとして、本年度は一、一八〇、五五〇人にまで減少し、わが国でも、一九九六年の一二九、八七五人をピークとして、本年度は一二〇、五四六人にまで減少している。会員の減少は、わが国の内外を問わず、一般の傾向にあることは否定できず、退会防止を含む会員増強が目下の急務とされる所以であろう。

問題は、なぜ会員が減少するかという原因である。多くの場合、経済的不況が主なものとして挙げられる。わが国の場合、確かにその考え方が妥当する向きも、否定できない。しかしながら、空前の好況に沸くアメリカでも、その会員数は、

一九九三年の四二一、九五三人をピークとして、本年度は三九二、六八六人にまで減少している。さらに、国際ロータリーの本拠エバンストンを含む第六四四〇地区では、一九九七年の三、〇〇八人をピークとして、現在二、六一二人にまで減少し、同地区七〇クラブのうち三一クラブが会員数三〇人以下という状態で、中核クラブであるエバンストン・クラブの会員数も、一九九六年の一〇三人が、本年度は八〇人にまで減少している。また、ロータリー・クラブ第一号であるシカゴ・クラブを含む第六四五〇地区では、一九九六年の二、五一〇人をピークとして、現在二、三一三人にまで減少し、六三クラブのうち四五クラブが会員数三〇人以下で、会員数一〇数人のクラブも多数存在し、かつては会員数八〇〇人を超える威容を誇っていたシカゴ・クラブが、現在会員数二四八人という惨状にある。これではどう考えても、経済的不況はその原因でないだけでなく、むしろ全く無関係で、他に重大な原因があると考えざるを得ない。

ロータリーの真価は、会員一人ひとりの心に宿るサービスの理念「The Ideal of Service」にある。人は自分のことを考えて生きることは当然であろうが、それだ

けであつてはならない。人間愛を基本として他人のことをよく考え、まず自分の職業活動を通じ、次いで色々な地域社会への活動や国際社会における活動を通じて、人のために尽くすことが人間本来の責務であり、その責務を果たすことによつて、初めて人は幸せになることができると信じて生きることであろう。そのようなロータリアンとその集団であるロータリー・クラブこそが、ロータリーの原点である。単なる親睦団体や社交団体はもちろんのこと、ボランティア団体や社会奉仕団体も、ロータリーではない。サービスの理念という精神の核をしっかりと保有していることが、ロータリー・クラブたる所以である。ロータリーの綱領、職業分類、区域限界、例会と出席その他の既存のロータリー・クラブの構成の基要素は、ロータリー・クラブのこのような独自の性格を形成し維持するためには絶対必要な要件であるとともに、ロータリー・クラブを他の団体と区別する厳正な指標である。来年開かれる規定審議会に、区域限界の廃止、職業分類の希薄化、例会回数や出席率の軽減などのほか、クラブの存立と運営の条件を会員が自由に定められる新世代によるロータリー・クラブの新モデルが試験的プロジェクトと

して提案されるなどの声を聞くが、このような試みは、単なる外形の変更だけでなくロータリーの最も根本的な存在意義を消滅させ、ロータリー自身の致命的な変質を齎すことによって、帰属意識を衰減させ、却って会員増強の意欲を削ぎ、退会防止の歯止めをなくすことになるのではないかと憂慮される。

いうまでもなく、ロータリーは草の根の団体である。ロータリアン一人ひとりとその集団であるロータリー・クラブにこそ、ロータリーの原点がある。ロータリー・クラブの国際的な連絡機関である国際ロータリーは、世界各地の意見を正確に反映して自主的に運営されることによって、その管理運営と連絡調整の機能が国際的に妥当する客観的なものとなり得るであろう。従って、例えば、上部機構としての国際ロータリーの存在が予定され、その方針と計画が世界各地のクラブとロータリアンを下部機構として下達されるようなことは、ロータリーの本質に逆行するのである。ロータリーは、ロータリアンの心をその最高の実質とする団体である。世界のあらゆる民族や地域の人々の心と人文によって運営されなければならない。欧米の人たちの価値観によって統一的に運営されるようなも

のであつてはならない。ロータリーの国際理解とは、欧米流の理解を非欧米の人たちに押しつけることであつてはならない。世界中のあらゆる民族と地域の人々の固有の心と人文とによる相互理解であるべきである。しかも、そのような力は、世界中のあらゆる民族と地域の人々に固有の言語によつて、初めて可能である。英語は、経済やビジネスの世界においては世界の共通語であろうが、ロータリーの世界では、共通語であつてはならないものである。このような見地からしても、国際ロータリー運営の現状には、数々の問題点が指摘されるであろう。

二一世紀の到来を目前に控え、国際社会は数々の困難な問題を抱えている。主要なものを取り上げてみても、社会基盤の根本的変革に対する対応とか、欧米の人たちと非欧米の人たちとの間の真の対話と相互理解の必要などが考えられる。前者についていえば、来るべき二一世紀には、科学技術をはじめとする社会基盤の根源的な変革が予定される。ロータリーは、既存の社会基盤に安住して活動すれば足りた二〇世紀と異なり、社会基盤の再構築自体についても検証と発言と行動にまで参加しなければ、その存在意義が限りなく低下して行くであろう。後者

についていえば、二〇世紀は欧米の人たちの主導による世紀であったが、来るべき二一世紀は、欧米の人文を吸収した非欧米の人たちの固有の発言と行動が増加し、両者の間の矛盾や紛議が続発することが予想される。ロータリーは、その性格と立場上、両者間の真の対話と相互理解が成立するよう橋渡しをする役割を果たすことが、厳しく期待されることとなろう。

ロータリーの綱領であるサービスの理念は、ロータリーだけの真理ではない。人間社会一般に共通の古今^{かわ}渝らない真理である。来るべき二一世紀において、ロータリーが果たすべき役割に思いをいたすとき、ロータリーは、徒らに物的な拡大と増強に憂き身をやつすことなく、その精神の中核であるサービスの理念を高め、この醇良な精神を、広くかつ深く人間の社会全域に着実に浸透させて行く努力を一步一步重ねていくことこそが急務であると思うのである。

(二〇〇〇年一月)

ロータリー百年を目前に、その原点を見つめる

ロータリーは、世界的な社会の変化に対する対応として、過去の数年度にわたり、専ら会員の量的な増強と拡大に注力してきたが、ビチャイ・ラタクル会長の年度から、大きくその軌道を修正した。ロータリーの原点に戻り、その質の向上と充実に努めることとなったのである。

人間は、社会に生きる精神的存在であることの当然の結果として、自らの物心の充足を求めるだけでなく、さらに他人のために誠実に尽くすことによって、初めて自らの真の心の幸せを得ることができるとはいうまでもない。このサービスの理念 The Ideal of Service の周知徹底こそが、私どもに課せられた当面の課題の基本である。ところで、社会は人々のニーズの集積であると同時に、これらを充足する職業の集積でもあるとの観点からすれば、他人のニーズを充たすため

の職業の活動は、社会において絶対的な評価を帯有するものであり、他人のために尽くす第一義的な奉仕活動である。職業奉仕活動がサービスの原点とされる所以である。通常、職業は人々が生きて行くための生活手段であると解されており、それ自体は一応自然な受け止め方かも知れないが、それは自分のための職業活動である。他人のニーズを充たすための職業活動、すなわち他人のための職業活動への意識の転換こそが、決定的な職業倫理の確立であろう。さらにロータリアン各自が、充実した職業奉仕活動の実践を前提としつつ、これを中核とする一般の奉仕活動に参加し実践してこれを体得することによって、初めてロータリアンの質を高め充実をはかることができるのであろう。ジョン・サン・B・マジニアべ会長の「手を貸そう」とのRIテーマも、このような背景のもとに、意義深く受け止められるものであろう。

なお、一言付言すると、ロータリーの将来は、若い会員諸君の活動の如何にかかっている。青少年を奉仕活動の対象として捉えることも大切であるが、ロータリー・クラブに若い会員を継続的に多数入会させ、ロータリーに対する真の理解

を育てて行くといふいわば世代継承の活動について、ロータリーは、綱領に比すべき重要性を持つものとの認識を深め、強力かつ具体的に実践を進めて行くよう努力しなければならないと思う。

最後に、本年度は来年五月二三日から同月二六日までの間、大阪を中心とした関西地区で国際大会が開催される。先二回の東京大会の後、刮目すべき発展を遂げた日本のロータリーが、独自の示唆を含めつつ、ロータリーの原点を踏まえた意義深い提言を世界に向けて発信する絶好の機会である。日本のロータリアン諸氏の一段のご理解とご協力をお願いする次第である。

(二〇〇三年六月)

ロータリーの活動に関する一考察

ロータリーの存在と活動は、人間社会が存続する限り永遠であり、かつ、基本において不変である。何故ならば、ロータリーは、サービスの理念 *The Ideal of Service* をその存在意義の大綱としているが、人は物心ともに社会にしか生きられない精神的な存在として、自己の充足だけではなく、他人に尽くすことによつて、初めて自己の幸せを手に入れることができるとするサービス理念は、人間社会の普遍的な真理であるからである。

このことから、ロータリーが継続して着実に実践すべき活動は、先ずは人間社会の平常な営みにおいて、人間存在の質を改善するために継続的に払うべき努力であり、人間社会にサービスの理念を普及させ浸透させて行く粘り強い努力である。個人の絶対と競争の自由の偏重、自己責任の放棄と全体への安易な依存、

人間の実態から遊離した知能と技術の独走、金銭による過度の社会支配など、人間社会の耐えがたい現今の病弊を是正するためには、サービスの理念による人間社会のあるべき質への自覚を高め、その実現に努める以外に、有効な方途はあり得ない。このような努力は、クラブの例会その他のクラブ活動や、インターアクト、ローターアクト、ライラ（ロータリー青少年指導者養成プログラム）、ロータリー地域共同体などの地域社会への奉仕プログラムや、国際親善奨学生などロータリー財団の教育的プログラムに集約されている。さらに、このようなサービスの理念の普及と実践に有効な方途の策定を進めるとともに、その成果の拡大をはかるためには、数多くの民族や国家が、その人文の個性を相互に交換し、検討し、理解し、尊重し、享受し合う努力を払うことが必要である。このような努力は、国際青少年交換や姉妹クラブなどの国際交流活動や、ロータリー財団の研究グループ交換の文化交流プログラムなどに集約されている。

次は、国際社会における異常な事態を緩和し、ないしは解消するために、早急かつ強力な対応をはかろうとする努力である。国際社会における異常な事態は数

多くあるが、過去幾多の政治的、経済的、社会的或いは思想的な努力にも拘わらず、一向に解決されていない。顕著なものを指摘すれば、次のようなものがある。貧困や飢餓などの極度に劣悪な生活条件の問題、ポリオ・プラスやエイズなどの深刻な疾病や不潔な飲料水と医療の不足などの保健上の障害にかかる問題、これらの諸問題の根底にある識字や計算の能力の欠落その他教育の不備による無知の問題、このような非識字や教育の欠落によって促進される環境の破壊や無制約な人口増加の問題、部族や国家などの集団の間で現実に発生し継続している具体的係争の問題、世界の何処かで絶え間なく発生している地震や風水害などの大規模災害の問題などである。ロータリーは、これらの異常な事態の緩和と解消にかかる課題について、世界社会奉仕など国際奉仕活動のほか、ロータリー財団の3日補助金、マッチング・グラント、地区補助金、個人向け補助金、災害救援補助金などの人道的プログラムや、国際問題解決のためのロータリー・センターのプログラムなどによって、対応に努めている。

ビチャイ・ラタクル会長の「慈愛の種を播きましよう」とのRIのテーマは、

どちらかといえば、人間社会の平常な状態におけるサービスの理念の普及と実践を志向されたものであり、ジョン・サン・B・マジニア会長の「手を貸そう」とのRIのテーマは、サービスの理念の周知と実践によって、主として人間社会の異常な事態の緩和と解消のための努力を払うことを意図されたものと受け止められる。そして、ロータリー活動のあり方にこのような解析を加えることは、私どもの活動の現状を厳しく認識し、将来に向けてのそのあり方を正しく把握する上で、有意義であるだけでなく必要不可欠であると考えられるものである。

(二〇〇三年八月)

サービスの理念と職業奉仕

人は自分で生きていくものではあるが、同時に他人のおかげで生きることが出来るものである。人は、物心ともに社会の中でしか生きられない存在で、しかも心を持った精神的な存在である。従って、人は自分のことだけでなく、他人のことを真剣に考え、他人のために誠実に尽くすことによつて、初めて自分の幸せを手に入れることができるのである。このサービスという考え方は、ロータリーだけの独占物ではない。人間社会の基本を流れる真理である。このことに気付かない人々も沢山いるし、気が付いていても実行できないでいる人々も沢山いる。そこで、ロータリーは、このサービスという考え方 The Ideal of Service を一生懸命に提唱して、その実行に努めている。ロータリーは、人間社会とともに永遠であり、その基本は不変であるといわれる所以である。

ところが、このサービスという考え方については、ロータリーの綱領、国際ロータリーの定款・細則、標準ロータリー・クラブ定款、推奨ロータリー・クラブ細則など公式文書の中には何らの説明もない。しかしこのことは、サービスという言葉が、先行して発表されたアーサー・シエルドンやフランク・コリンズのモットーの中から採用されたという沿革からすれば、むしろ当然のことかも知れない。周知のとおり、アーサー・シエルドンはかねてロータリー・クラブの社会的な存在意義について考察を重ねた結果、一九一〇年八月のシカゴの全米ロータリー連合大会で、「仲間に最も良く奉仕する者は、最も多く報いられる。」*The Profits Most Who Serves His Fellows Best.*とこう考え方を発表し、次いで翌一九一一年のポートランドの全米ロータリー連合大会で、表現を「最も良くサービスをやる者は、最も多く報いられる。」*The Profits Most Who Serves Best.*と修正発表して採択され、コリンズは、これに誘発された *Service, Not Self* とこう考え方を発表した。この表現は極端過ぎるとして超我の奉仕 *Service Above Self* と修正のうえ採択された。この二人の表現から、一九二二年のデュールーズの国際大

会で承認された模範ロータリー・クラブ定款及び細則と綱領の中で奉仕 Service という考え方が初めて登場し、一九一八年カンザスシティーの国際大会で採択されたロータリー・クラブ国際連合会の綱領の中で奉仕の理念 The Ideal of Service の表現が規定されることになったのである。従って、サービスという考え方はシエルドンとコリンズを思想を取り入れたもので、自分のことよりも他人のことを大切に考えるという思想はシエルドンとコリンズに共通であるし、それが自己の幸せを齎すという思想はシエルドンだけの思想である。もともと、シエルドンの Profit という表現は物的な成功だけを意味するもののように受け取られ易いが、ロータリーが物的繁栄のみに狂奔していたロータリー創設当時のシカゴの人士を納得させるためにとられた表現であり、シエルドンの真意は物心ともうの幸せの享受にあったものと思われる。いずれにせよ、シエルドンやコリンズの考え方が、ロータリーのモットーとして、ロータリーの精神的な核心であるサービスの理念を支え、ロータリーの存続する限り語り継がれるものであることは、いうまでもない。ただ、他人に対する奉仕の優越性をより簡潔明確に表現した点ではコリン

ズの表現が優るが、自分の幸せにまで言及した点においてはシエルドンの表現がより完全であるということができよう。

ところで、このサービスという考え方は、その意味を理解したり認識したりしただけでは不十分で、実行しなければならぬ。他人のことを真剣に考え、誠実に他人のために尽くすことを実行しなければならない。ポール・ハリスは、「社会に役立つ人間になる方法は色々あるが、最も身近で効果的な方法は、間違いない自分の職業の中にある。」と述べている。職業活動こそが、サービスの実行行為であるということである。しかし、なぜそうなるのであろうか。人は、物質的にもまた心理的にも、ニーズの固まりである。社会は、そこに住む人々のニーズの海である。人々のニーズは、自らで充たすものもあるが、その大部分は他人によって充たされるものであり、他人の職業活動によって充たされるのである。見方を逆にすれば、職業とは、他人のニーズを充たす活動である。従って、社会は職業の集積であるということになる。ロータリーは、社会をこのように見ているのである。しかも、人々のニーズは人間存在の根源であるから、職業が社会で占

める意味と価値は正に根源的なものである。そこで、職業活動こそが、他人のことを真剣に考え、誠実に他人のために尽くすサービスの実行の最初であり最後である。そして、このことをしっかりと理解するためには、先ず社会において職業が占める意義と価値が最高であることを認識し、次にその職業の質と充足度の水準をなるべく高く設定することに努め、最後に自己の具体的な職業活動が最善のものとなるように努めるといふ、三つの段階を理解しなければならない。これが、綱領の第一に職業奉仕として謳われているところである。従って、よく指摘されるように、職業奉仕は、社会に奉仕するいくつかの方法のうちの一つではなく、職業奉仕自体が社会に奉仕すること自体であるといふことである。しかも、職業活動は、直接の相手方だけでなく、顧客や従業員はもちろん、雇主、同僚、共同経営者その他の関係者や社会一般の人々との公正なあり方を正しく実現することによって、社会全体に奉仕することとなるのである。このことは、一九一五年の「道德律」"Code of Ethics"、これを継承した一九八九年の「ロータリアンの職業宣言」"Declaration for Rotarians in Business and Professions" (原案) や、一九五

四年、五五年度にR I会長を務めたハーバード・テイラーが一九三二年に創案した「四つのテスト」"Four-Way Test" (別添)などに詳しく表現され説明されている。テイラーは、一九三二年にクラブ・アルミナム社を再建する仕事を依頼された。この会社は、卸売業者に製品を大量に押し付ける強引な販売方法や、競合会社を理由なく非難する宣伝方法や、不当に相手より値段を下げて競争者を駆逐する方法など、当時広く容認されていた策略を用いながら、しかも自らが倒産寸前の窮地にあった。彼は、「四つのテスト」に従業員全員に頒布し、忠実に活用するように要請した。クラブ・アルミナム社は、短期間に誠実で公正であるとの評価を高め、急激に企業の収益性を回復することができた。以来この「四つのテスト」が、ロータリアン各自が自己の職業奉仕を自己評価する尺度として、決定的に重要な機能を果たして今日に至っていることは、いうまでもない。

社会のニーズは、地域社会によって色々と異なるものである。従って、クラブは、自己が存在する地域社会のニーズを絶えず調査して、正確に把握しておく必要がある。なぜならば、クラブは、会員の職業活動がクラブの地域社会のニーズ

を正確に充たすためには、クラブが地域社会のニーズを正確に認識して、会員の職業がそのニーズをなるべく完全に充たしている必要があるからである。そこで、職業分類という工夫がロータリーにとって不可欠である所以が理解される。クラブは、いわばその地域社会を表現する小宇宙のような機能を持つものでなければならぬというべきである。

一般の社会では、職業は、自分の生計のための手段、財産形成のための手段、社会的な地位や名誉を確立するための手段などと理解されている。このような考え方は、極めて常識的で、間違った考え方ではない。しかしながら、このような職業は、いわば自分のための職業である。であるから、その職業が社会的に正しい形で遂行されるようにするためには、色々な制約を設ける必要が出て来る。例えば、貪ってはならない、手を抜いてはならない、不正な手段を使ってはならないなどで、違反に対して罰則を設け、行政的な規制をし、最近では内部告発を制度化するなどの努力が重ねられている。しかしながら、これらの制約は外部的なもので、外側から人間を制約しようとするものであるから、その効果には限界があ

る。現に私どもは、世界の各地域における巨大な企業の衝撃的な不祥事や、社会の各層各面で絶え間なく発生している様々な人々の慢性的な非行に悩まされている。ところが、ロータリーのいう職業とは、他人のニーズを充たすものであるから、他人のための職業である。自分のための職業から他人のための職業への意識の転換こそが、職業倫理の第一歩といふべきであろう。他人のための職業であれば、自己のための職業に必要であつた多くの制約の大部分が不必要となるであろう。他人のための職業とは、私どもの心の内面の制約に基づくものであるからである。

このように、職業奉仕は、ロータリアンの個人的な責務としての捉え方が出発点である。しかし、クラブや地区も、職業奉仕の責務を負っている。一九八九年の理事会の「職業奉仕に関する声明」"Statement on Vocational Service" (別添)によれば、クラブや地区の職業奉仕の責務とは、職業奉仕を実践してみせること、クラブの行動に職業奉仕を生かすこと、模範となる実例を示すこと、会員の職業手腕を発揮できるプロジェクトを開発することとされている。職業奉仕を育むた

めにクラブにできることは数々あるが、先ずは職業奉仕に関する認識を高め、討論を推進することから始まる。「四つのテスト」をはじめ、「ロータリアンの職業宣言」、理事会の「職業奉仕に関する声明」などを週報に記載し、例会場やクラブ事務所に掲示し、新会員の選考や教育の場で職業奉仕を強調することなども重要である。クラブの職業奉仕活動のプログラムやプロジェクトの一部を例示すると、次のようなものが考えられる。

(1) 会員の職業意識を高めたり、職業活動を奨励する。

(2) 会員の職業に関する共同プロジェクトや青少年、障害者、高齢者などへの職業活動を共同実施する。

(3) 職業活動の広域化への情報を提供したり実現を支援する。

(4) 新たに地域社会に移動して来た人たちが、必要なものやサービスを得られるよう、力になる。

(5) 同業組合や労働組合が国や地方公共団体の政策に及ぼす影響について、会員の認識と注意を喚起する。

(6)就職相談、職業指導、職業情報、職業訓練、引退後の活動の充実、識字率の向上、職場の薬物濫用防止と治療、職業活動表彰の開発などについて、地元商工会議所その他の団体との共同プロジェクトを実施するための小委員会を設置して、実施する。

(7)会員の専門知識を活用して、青少年や障害者への職業指導、新しい職域の開拓、出所後の受刑者への職業相談などの機会を提供する。

(8)会員に、ロータリー・ボランティアになり、各自の才能や技術を、それらを切実に必要としている世界の地域に齎すよう、勧奨する。

職業活動は、その会員の地域社会で行われるのが通常の形態であろうが、それだけには限らないものである。他の地域社会や、場合によっては国際社会における職業活動も十分あり得る。また、職業奉仕の範囲は、会員とクラブの創意によって無限に広がるものである。会員がロータリー・ボランティアとして自己の才能や技術をそれらが必要としている世界の色々な地域に齎すことや、研究グループ交換などの多くの財団プログラムなども、職業奉仕を国際的に拡大する側面を

備えている。さらに双子クラブのプログラムも、ロータリアンの職業上の才能や技術による奉仕を、世界の他の地域に広める手段となるであろう。ロータリアンの活動の中でも特に感銘深いものは、自己の職業の技能を地域社会や国際的な奉仕のために用いたロータリアンの実話である。私たちは、生来備わった才能を基に職業を選ぶものであるから、各自の才能を他者への奉仕に用いることは、人生で最も豊かな経験の一つである。

今日の教育は知能教育の偏重や個人尊重の考え方への誤解が支配し、家庭や地域社会は教育の力を失い、事業や一般社会は倫理に背を向けた競争に狂奔し、私たちは共感や誠実さなどよい性格と総括する美德を培うことができない状況にある。近時世界の各地域で続発している巨大で衝撃的な不祥事はもちろん、社会の各層各面において絶え間なく日常的に発生している大小様々な慢性的な不祥事などを見れば、このような状況は一目瞭然である。そしてこのことは、一部の人々が他の人々の福利よりも自分自身の利益を優先していることを示しており、一部の人々の欲望と墮落が他の善良な人々の生活を破壊していることを示している。

これに対するロータリーの対応は、サービスの理念と職業奉仕の意義とその実現のための努力を再確認することである。なぜならば、私たちは、サービスの考え方と職業の価値の自覚によって、初めて個人の絶対の行き過ぎと競争偏重の非を自覚できるからである。ロータリーの努力は、人間の中からの自発的な力に訴えるところにあるからである。このような意味で、今日における人間社会の広範で深刻な非倫理化の潮流に対してロータリアンがとれる行動は、サービスと職業奉仕という考え方とその実行の伝統を取り戻して、これを強調する以外にはない。しかも、その努力は、自分自身だけでなく、自分の家族や地域社会から国際社会へと拡大し、自分の家庭から自分が関係する生活環境や経営環境から社会環境にまで、強気に働きかけて行かなければならない。サービスの理念と職業奉仕は大変古典的な問題であるが、同時に、日々新しい課題であることをしっかりと理解したいと思う。

ポール・ハリスの父方の先祖はスコットランド系の移民で、母方の先祖はアイランド系の移民で、ともに清教徒であり、カルヴァン派のプロテスタントであ

った。彼らが定住したニューイングランド地方の気風は、人間愛と友情を基本とし、家族や子供たちや仕事を大切にす素朴な生活を重んずるもので、幼年期からここで育ったポール・ハリスは、ロータリーにその気風の大部分をその血肉として注ぎ込んだ。ただ、そのような人間愛は、どちらかと言えば個人的な資質であつたので、シエルドンは、これに社会的な裏付けを加えるためにサービスという考え方を再構築したと思われる。ロータリーで愛や友情や他人への思いやりがしばしば重んぜられるのは、このような沿革に基づくものと思われる。いずれにせよ、私たちは、サービスという人間社会の底流の真理に基礎を置くロータリーという組織に身を置くことができたことに、心から感謝したいと思う。そして、ロータリーが、ロータリアンの一人ひとりの個人としての生活と社会における活動に、しっかりとした素晴らしい成果を結ぶことを期待する次第である。

(二〇〇三年一月)

(別添)

ロータリアンの職業宣言

事業または専門職務に携わるロータリアンとして、私は、以下の要請に応えんとするものである。

(1) 職業は奉仕の一つの機会なり、と心に銘せよ。

(2) 職業の倫理的規範、国の法律、地域社会の道德規準に対し、名実ともに忠実であれ。

(3) 職業の品位を保ち、自ら選んだ職業において、最高度の倫理的規準を推進すべく全力を尽くせ。

(4) 雇主、従業員、同僚、同業者、顧客、公衆、その他事業または専門職務上関係をもつすべての人々に対し、ひとしく公正なるべし。

(5) 社会に有用なすべての業務に対し、当然それに伴う名誉と敬意を表すべき

ことを知れ。

(6) 自己の職業上の手腕を捧げて、青少年に機会を開き、他人からの、格別の要請にも応え、地域社会の生活の質を高めよ。

(7) 広告に際し、また自己の事業または専門職務に関して、これを世に問うに当たっては、正直専一なるべし。

(8) 事業または専門職務上の関係において、普通には得られない便宜ないし特典を、同僚ロータリアンに求めず、また与うることなかれ。

(別添)

四つのテスト

言行はこれに照らしてから。

- (1) 真実かどうか。
- (2) みんなに公平か。
- (3) 好意と友情を深めるか。
- (4) みんなのためになるかどうか。

(別添)

職業奉仕に関する声明

職業奉仕とは、あらゆる職業に携わる中で、奉仕の理想を生かしていくことをロータリーが育成、支援する方法である。職業奉仕の理想に本来込められているものは次のものである。

- (1)あらゆる職業において最も高度の道徳的水準を守り、推進すること。その中には、雇主、従業員、同僚への誠実、忠実さ、また、この人たちや同業者、一般の人々、職業上の知己すべてへの公正な取り扱いも含まれる。
- (2)自己の職業またはロータリアンの携わる職業のみならず、あらゆる有用な職業の社会に対する価値を認めること。

- (3)自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てること。

職業奉仕は、ロータリー・クラブとクラブ会員両方の責務である。クラブ

の役割は、たびたび職業奉仕を実践してみせることによって、また、クラブ自身の行動に職業奉仕を生かすことによって、模範となる実例を示すことによって、さらにクラブ会員が自己の職業上の手腕を発揮できるようにプロジェクトを開発することによって、目標を実践、奨励することである。クラブ会員の役割は、ロータリーの原則に沿って、自らと自分の職業を律し、併せてクラブが開発したプロジェクトに応えることである。

今日における職業奉仕の重要性について

——二〇〇三年アナハイム国際協議会における講演に基づいて

ポール・ハリスは、「社会に役立つ人間になる方法は色々あるが、最も身近で効果的な方法は、間違いなく自分の職業の中にある。」と述べている。この職業という領域にこそ、ロータリーの奉仕の本質がある。職業奉仕がロータリーの生命であり、金看板であるといわれる所以である。ロータリーが他の奉仕団体と一線を画する根拠も、この職業奉仕にある。ところが、職業奉仕は複雑かつ難解であるという意見をよく耳にする。残念なことだが、このことを理由に、職業奉仕の活動を全く無視して、他の三つの奉仕部門の活動だけに取り組むロータリアンが、非常に多くいる。また、職業奉仕がロータリーの拡大や増強の妨げになつていくといった極端な意見すら、聞かれるようになった。

事實は、全く逆である。いつの時代にも増して、只今の世界ほどロータリーの職業奉仕を必要としている時代はない。今日の事業経営や職業では、人々は、競争の偏重や他人の犠牲をかえりみない増益の圧力や技術開発のともどもない進行と苦闘している。今日の教育機関や事業環境の多くは知能教育に偏し、共感や誠実さなど私たちが良い性格と総括する美德を培うことができない状況にある。このことは、近時世界の各地域で続発している衝動的な不祥事を見れば、一目瞭然である。次々に発生する不祥事は、世界有数の事業家たちが、社員や株主や顧客の福利よりも、自分個人の利益を優先していることを示している。少数の人間の欲望と墮落が、多くの人々の生活を破壊して来たのである。そして、こういった不祥事にかかわった経営者たちは、私たちの「四つのテスト」の第一の問いかけである「真実かどうか。」さえクリアすることはできないであろう。ジョナサン・B・マジリアベ会長が奨励されるように、職業奉仕に対する私たちの貢献を新たにしよう。そして、ロータリアンの活動に職業奉仕が如何に不可欠であるかについて理解を深めるために、敬遠されて来た職業奉仕の原点と重要性について、

注意深く検討を加えてみたいと思う。

サービス Service というロータリーの基本理念は、実に単純である。人は、自分のためだけではなく、他人のためになるように誠実に他人に尽くすことによつて、初めて自分の幸せを手に入れることができるということである。そして、そのような人々によつて、初めて幸せな良質の社会が築かれるであろう。しかも、このような考え方は、ロータリーだけの独占物ではない。本来的に文明社会の根底に横たわる基本的な真理である。ロータリーは、その真理を指摘し、そしてその実践を強調して来ただけなのである。例えば、ロータリーの綱領もそうであるし、アーサー・シエルドンの「最も良くサービスをする者は、最も多く報いられる。」や、フランク・コリンズの「超我の奉仕」などの公式のモットーもそうである。そして、ロータリーは、長年にわたり、率先して他者に奉仕することを提唱し、実践して来た。従つて、世界がどのように変化しても、時代を超えるロータリーの使命は、一〇〇年近くも変わることなく私たちを支えて来たのである。

ところで、社会は人々のニーズの集積であり、このニーズを充足する職業の集

積であるとすれば、職業こそが、社会における最高の価値を占めるものである。そこでロータリーは、創立当初から、このような職業の価値と社会の様々な需要に応えるための多様な職業の必要性を強調して来た。その大前提として、職業分類の原則がある。各ロータリー・クラブには、地元社会を機能させている多種多様な職業が反映されていなければならない。さらに、各ロータリー・クラブは社会全体の小宇宙であり、職業の道徳的水準を高め、業務を品位あらしめるという責任を担っている。従ってロータリアンにとって、職業奉仕とは、社会に奉仕するための一つの手段として職業を用いることだけを意味するのではない。もちろんそのことも重要であるが、職業を正しく遂行すること自体が、他者のニーズを充足し、他者に奉仕すること、すなわち社会に奉仕することを意味するということである。そして、顧客、雇主、従業員、共同経営者、同僚、同業者その他の職業の関係者や社会一般の人々との公正なあり方を正しく捉えることによって、社会全体に奉仕することを意味する。一般社会において職業とは、生計を得るための、或いは財産を形成し、社会的地位の充実向上をはかるための手段と解されて

おり、これはごく自然な受け止め方であるが、しかしながらその受け止め方は、自分のための職業である。そのような考え方では、数々の外部的な制約が必要となるであろう。例えば、貪らないように、手を抜かないように、不正な手段を用いないようになどと、行政の規制や司法的な刑罰や内部告発などという方法まで考えられている。しかし、ロータリーの職業は他者のための職業活動である。そのように考えれば、数多くの制約は不必要となるであろう。自己のための職業から他者のための職業への転換、これこそが職業倫理の基本であろう。

このような職業奉仕を実践する一助として、ロータリーでは具体的な表現手段が創案されている。一九八九年以来、前後八か条からなる「ロータリアンの職業宣言」は、職業奉仕についてのロータリーの見解を簡潔に説明し、ロータリアンの道標となって来た。さらに、私たちに最も馴染み深いものは、一九五四年と五五年度にR I会長を務めたハーバード・テイラーが一九三二年に創案した「四つのテスト」である。彼は、一九三二年にクラブ・アルミナム社を経営する仕事を引き受けた。この会社は、卸売業者に製品を大量に押し付ける強引な販売方法や、

競合会社を非難する宣伝方法や、相手より値段を下げて競争者を駆逐する方法など、当時広く容認されていた策略を用いながら、しかも倒産寸前の窮地にあった。彼は、「四つのテスト」に従業員全員に頒布し、忠実に活用するように要請した。クラブ・アルミナム社は、短期間に誠実で公正であるとの評価を高め、急激に企業の収益性を回復することができた。以来この「四つのテスト」が、ロータリアン各自が自己の職業奉仕を自己評価する尺度として、決定的に重要な機能を果たして今日に至っていることは、いうまでもない。

周知のように、職業奉仕は、ロータリアン個人の責務だけでなく、クラブや地区の責務である。一九八九年に採択された理事会の「職業奉仕に関する声明」によれば、クラブや地区の職業奉仕の責務とは、職業奉仕を実践してみせること、クラブの行動に職業奉仕を生かすこと、模範となる実例を示すこと、会員の職業手腕を発揮できるプロジェクトを開発することとされている。職業奉仕を育むためにクラブにできることは数々あるが、先ずは職業奉仕に関する認識を高め、討論を推進することから始まる。「四つのテスト」をはじめ、「ロータリアンの職業

「宣言」、理事会の「職業奉仕に関する声明」などを週報に記載し、例会場やクラブ事務所に掲示し、新会員の選考や教育の場で職業奉仕を強調することなども重要である。クラブの職業奉仕活動のプログラムやプロジェクトの一部を例示すると、次のようなものが考えられる。

- ・ 新たに地域社会に移動して来た人たちが、必要なものやサービスを得られるよう、力になる。
- ・ 同業組合や労働組合が国や地方公共団体の政策に及ぼす影響について、会員の認識と注意を喚起する。
- ・ 就職相談、職業指導、職業情報、職業訓練、引退後の活動の充実、識字率の向上、職場の薬物濫用防止と治療、職業活動表彰の開発などについて、地元商工会議所その他の団体との共同プロジェクトを実施するための小委員会を設置する。
- ・ 会員の専門知識を活用して、青少年や障害者への職業指導、新しい職域の開拓、出所後の受刑者への職業相談などの機会を提供する。

・会員に、ロータリー・ボランティアになり、各自の才能や技術を、それらを
切実に必要としている世界の地域に齎すよう、勧奨する。

職業奉仕の範囲は、会員とクラブの創意によって無限に広がるものである。自
分の職業の場で奉仕するだけでなく、職業を生かして地域社会や国際社会で奉仕
活動を行うことができる。ロータリー・ボランティア・プログラムや、研究グル
ープ交換など、多くの財団プログラムも、職業奉仕を国際的に拡大する側面を色
濃く備えている。さらに双子クラブのプログラムも、ロータリアンがその才能を
進んで提供し、専門技術による奉仕を世界の他の地域に広める手段となるであ
ろ

ロータリーのニュースの中でも特に感銘深いものは、自己の職業の技能を地域
社会や国際的な奉仕のために用いたロータリアンの実話である。私たちは、生来
備わった才能を基に職業を選ぶ。各自の才能を他者への奉仕に用いることは、私
たちの多くがすでに気づいているとおり、人生で最も豊かな経験の一つである。

・イタリアの医師チリノ・フィチェラ氏は、インドを始めアジアとアフリカの

九か国を訪れ、ロータリー財団を代表して大型医療プロジェクトの運営状況を確認するとともに、ナイジェリアとマダガスカルで初のポリオ全国予防接種活動を組織し、血液バンクを設置し、栄養プログラムを開始するなどの援助のために、医学分野での経験や専門知識を捧げた。

・タイのスリナカリンウィロット大学の教育学准教授であるサオワラク・ラッタナピッチ氏は、読み書きの教授法としてアジア、アフリカ、ラテンアメリカ、地中海地域で大成功を収めてきた集中言語能力助長プログラムCILEの地元社会での受け入れのために重要な役割を果たすとともに、地区では奨学金小委員会の委員長として、また、ゾーンでは識字・計算能力の向上グループのコーディネーターとして、奉仕された。

・カリフォルニア州に水ポンプ製造会社を所有するラリー・ビスタチオ氏は、太陽エネルギーで稼働する水ポンプを二年がかりで開発し、ドミニク共和国において同僚ロータリアンとともに電気の通っていない小さな村にこの発明品を整備した。ビスタチオ氏の働きのおかげで、この村には今では沢山の水

がある。

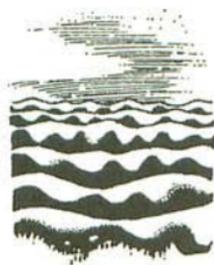
このように、多くのロータリアンは、ロータリアンが世界のあらゆる地域で職業奉仕の期待に応えるのに役立つている。

前述のとおり、企業の秩序は底辺にまで落ちた。社会の各層各面において絶え間なく発生している大小様々な慢性的な不祥事は枚挙に遑がない。個人の絶対と倫理に背を向けた苛酷な競争は、社会と企業の秩序の破壊を限りなく進行させている。これに対するロータリーの対応は、職業奉仕の価値を再構築することである。なぜなら、私たちは、職業奉仕によって、初めて自らの個人の絶対の行き過ぎや競争偏重の非を自覚できるからである。職業奉仕の努力は、会員自身に関する努力と外部に向けた努力とがあるが、そのいずれであるかを問わず、その努力の特質は、人間の中からの自発的な力に訴えるところにある。そしてロータリアンの外部に向けた努力は、地域社会からさらに国際社会へと拡大し、自分が関係する周囲の経営環境や生活環境に強力に働きかける力となるであろう。

今日における人間社会の広汎で深刻な非倫理化の潮流に対して、ロータリアン

がとれる行動は一つしかない。私たちの大切な伝統を取り戻そう。私たちの責務を、全面的に受け止めよう。貪欲と競争と自己中心の考え方に不賛成の意を表し、代わりに、自制と協力と超我の奉仕というより高い基準を尊ぶことに力を貸そう。職業奉仕は大変古典的な課題であるが、同時に、人間社会が存在する限り、永遠に日々新しい課題であることを、しっかりと理解したいと思うのである。

(二〇〇三年二月)



現時におけるわが国の会員増強と退会防止について

周知のように、世界的には会員数が下げ止まり、漸く僅かながら増加に転じる兆しも見受けられるようになったが、ひとりわが国のみが引き続き会員減少の傾向を解消できないようである。そこで、会員増強と退会防止の問題は、わが国のロータリーにとつて、一段とその重要性が明確になつて来ている。アメリカその他のキリスト教国においては、個人が他を観る基本的な視点が、程度の差はあれ宗教的な意識として一応一般に定着しているから、サービスの理念を核心とするロータリーは社会の中に自然態で存在し、比較的はその活動も評価されている。また、わが国以外の先進の先進諸国や途上国におけるロータリーは、最近漸く先進化を遂げた関係から、新しい意味での社会的な経済的なステータスとしての指導性を示している。このことが、わが国以外の諸国や諸地域で会員減少に歯止め

がかかっている極めて重要な素因であろうと思われる。

ところが、わが国は比較的早く先進国の仲間入りをした関係から、比較的古い型の社会的ステータスが発生し定着しかけたところにロータリーが導入されたために、わが国のロータリーは、比較的古い型の社会的ステータスのシンボルとしての役割を持たされることになった。戦後、社会経済の構造の大幅な変革にも拘わらず、このステータスは依然として社会の柱として維持され、奇跡的な経済発展とともにその層が拡大し、会員数の漸増とクラブの拡大が見られた。そして、やがて国際的なロータリーの会員の増強の趨勢に従い、中堅の事業経営者や専門職務者にまで会員増強やクラブ拡大がはかられ、会員数が爆発的に増加したが、これに伴い、ロータリーの旧来のステータス・シンボルとしての色彩も、漸次希薄化して来た。そこを不況が直撃し、退会者の続出と新会員獲得の動きの鈍化の現象が始まって今日に至っていると思われるのである。

そこで、このような状況を基本として、わが国のロータリーが帯有する欠陥を直視しその是正をはかることが、真の意味におけるわが国ロータリー会員の増強

と退会防止の方策と思うので、以下いくつかの点について考察を加えてみたいと思う。

(1)人は、社会的かつ精神的な存在であることに鑑み、自己の物心における充足だけでなく、他者に奉仕することによって、初めて自己の幸せを得ることができるとするサービスの考え方がロータリーの核心であり、他者のニーズの充足に努める職業奉仕活動を第一義とし、これに一般の地域社会や国際社会への奉仕活動を加えた奉仕活動をその実践活動とする団体であるが、わが国のロータリーにサービスや職業奉仕の考え方が必ずしも徹底しているとはいえない。この点が、ロータリーの存在意義の認識と、現実の四大奉仕活動の質量の低下を招き、会員の退会を防止できないだけでなく、クラブの地域社会における魅力と評価の低下を招き、会員、特に若い会員の勧誘の困難度を増加させている。

(2)世代継承の意識と方策が不十分である。この点は、わが国のロータリーだけではなく、ロータリー全般についていえることである。何故ならば、ロータリーのような社会に開かれた任意団体では、次々と若い世代を新会員として受け入

れ、適正な会員として育成していく視点と方策が万全でなければ、やがてその団体は会員数が減少し衰微し消滅に至ることは、理の当然である。従って、若い世代の入会とその育成は、社会奉仕や国際奉仕の対象として青少年を取り上げたり、クラブ奉仕の一項目として会員増強を唱えるだけでは不十分であり、むしろ綱領の本文中に規定すべき重要事項と考えられる。わが国のロータリーは、その導入の沿革からして、大規模事業活動の完成者を会員として予定しており、その途次にある若者や中小規模の事業の主宰者たる若者らは、殆ど会員として予定されていなかったという事情がある。このような性格の是正が不徹底であるために、社会経済の構造の变革に伴い、わが国のロータリーが社会的な適応力を失いつつあると評しても過言ではない。幸い現在は重大な社会構造の变革期にあり、新しい事業や職域と職種が続出している状況の変化を直視し、新しい比較的若年の事業主宰者を数多く取り込む好機である。若い者はさらに若い者を呼び、クラブの会員の増強と活性化が期待できるであろう。会員が減少するなかで、会員を増加させ、活力を高めている少数のクラブの実例が厳存

するが、殆どがこのようなケースであることを留意すべきである。

(3) 女性会員の増強が有効であると考える。国際的には女性会員は一〇%前後を占めているが、わが国では僅か二%前後に止まっている。しかし、日本の社会経済面における女性の活躍は、日を追って着実に増加している。社会の実相に鑑みると、わが国の女性会員数の現状は低過ぎる数字であり、増強の余地は十分にあると考える。男性は外で仕事に、女性は内で家事にという領分は、一応自然の摂理であろうが、人間社会の変化に応じ、この区分にできる限り柔軟に対応することが、私どもの幸せを増幅する所以であろう。また、職業に参画する女性に快く門戸を提供することに努めることが、時代の変化に的確に対応する所以であろう。

(4) 新会員に対する入会後の手厚い処遇が必要である。一九九八、九九年次のRI会長ジェームス・レイシー氏は、テネシー州のクックビル・ロータリー・クラブに入会し、六か月後に退会した。しかし、推薦者の熱心な勧誘により、再入会した。そして、イギリスに派遣されたGSE（研究グループ交換）の団長を

務めた経験を経て、初めて一会員から真のロータリアンになられたのである。新会員は、クラブの役職を務め、また真の奉仕活動に参加する体験を経て、はじめて会員として定着するのである。そのためには、クラブ自体が活力を有し、真の奉仕活動を実践していなければならない。一年後に一〇%前後、三年後に四〇〜五〇%という新会員の退会率を、このような努力によって改善しなければならぬ。また、このような努力は、クラブ自体の質の向上に連なるものである。

わが国のロータリーの社会的ステータスの劣化とこれに代わるべき真のロータリーとしての本質の不在という体質的な原因に、会員の高齢化と経済的不況の継続、若年層の社会に対する価値観の変貌等の原因の相乗的効果として、わが国のロータリーは会員増強と退会防止の面で重大な苦境にある。わが国民の近代化への適応が性急に過ぎた過誤が今日の不況の真因と考えられるが、わが国ロータリーの会員減少は、同様の原因に基づくものとも考えられる。質の向上こそが量の増加の大前提であると喝破している指導的な流通企業の経営者もいる。RIの退

会防止パイロット・プログラムを参考として、思い切って各地区に一つ宛のモデル・クラブを選定し、ガバナーと関係地区委員会協力のもとに、若年会員の勧誘と増強、既存会員と共にする親睦と教育の実施、明確な地域奉仕活動の実践などを、三年の期限を設けて試行してみるのも一つの方策かと思う。いずれにせよ、私どもは真因を直視して抜本的な対策を講じる必要に現に迫られていることを指摘し、併せて具体的方策について若干の私見を付加する次第である。

(二〇〇三年六月)

ロータリーの拡大に伴う根本問題

ロータリーは、アメリカの社会で誕生し、いわば欧米社会で成長の緒についた。従って、ロータリーが先ず欧米社会に拡大し、次いでこれと極めて親近性のあるラテンの社会に拡大したのは極めて自然であつて、問題なくその同質性を保持しながら拡大を続けたといふことができる。

ところが、ロータリーがさらにアジア、スラブ、アフリカ、アラブなどの社会に拡大しようとする場合は、社会意識、価値観、言語、宗教その他の人文の相違から、拡大は極めて根源的な問題を含むこととなるといわざるを得ない。ロータリーにとつて二一世紀は、正にそのような至難な拡大の局面を迎えているといふべきであろう。そして現在は、先ずアジアがそのような拡大の渦中にあるものと思われる。アジアにおける拡大の成否は、今後ロータリーのグローバルな真の拡

大が実現できるかどうかを占う極めて重大な局面を迎えているというべきであろう。わが国なども、アジアの一員でありながらいち早く社会の欧米化を表面的に達成した関係で、ロータリーの展開と拡大も表面的には一応成功した様相を呈しているが、依然としてアジアにおけるロータリーの拡大の一場面として、根本的な問題を解決しないまま推移しているというべきであろう。

問題は、欧米社会で発想されたサービス Service という考え方がそのまま非欧米の社会に通用するかどうかであろう。今期のピチャイ・ラタクル会長の提唱されるテーマ「慈愛の種を播きましよう」*Sow the Seeds of Love* は、一応サービスの考え方を象徴的に簡潔に表現した素晴らしいテーマと受け止められるが、その間には有意の微妙な感覚的なずれが指摘されるかも知れない。それに、アジア自身にも多くの国家と民族が存在し、その間には相当の個性差がある。わが国、韓国、台湾、中国、モンゴル、タイ、マレーシア、シンガポール、カンボジア、ラオス、ベトナム、インドネシア、フィリピン、インド、バングラデシュ、パキスタン、ネパールなどと列挙しただけでも、アジア自体が決して同質的に一体なも

のではないことが容易に判明する。スラブについては、問題は比較的容易であるかも知れないが、アフリカやアラブについては、さらに問題は深刻であろう。

このようなロータリーの非欧米圏への拡大に当たり、サービスの考え方を捨て去り、ロータリーの活動を社会の教育的ないし人道的な向上と表面的な交流を目指すだけの努力に限定すれば、問題は実に容易に解決する。しかしながら、それはロータリーが単なる奉仕団体となることであって、そのような本質を放棄する考え方を容れる余地はないし、また、あつてはならない。しかれば、非欧米の社会において、欧米社会におけるサービスと同質の観念を発掘し定立し得るであろうか。そもそも、国際ロータリーは、非欧米社会においては欧米社会におけるサービスと比較的に近似した観念で満足し、双方の穏やかな連帯をもって満足しなければならぬのかどうか。それとも、欧米社会におけるサービスの考え方自体に再検討を加え、ある程度の微調整を行う必要があるのかどうか。私どもは、このような問題に当面せざるを得ない。

従って、私どもロータリアンは、二一世紀を迎えてロータリーの拡大を推進す

るに当たり、単に質とか量とかをあげつらうだけではなく、ロータリーの根本理念であるサービスの考え方自身のあり方に、創設以来初めて鋭い解析を加える必要に迫られていることを自覚すべきであろう。

(二〇〇二年八月)



会員増強に当たつての広報の役割

目下の世界的な会員減少傾向に歯止めをかけ、ロータリー活動の活性化を促進するために、退会の防止を含む会員増強が、拡大の努力とともに、全世界のロータリー・クラブと私どもロータリアンに課せられた喫緊の重要作業となつてゐることは、いうまでもない。また、広報には、ロータリーの社会における存在意義を強調する目的とともに、退会防止と会員増強の効果的な推進に資する極めて重要な側面があることに注目しなければならない。そこで、この両者の関連について、以下若干の考察と検討を加えてみたい。

まず、広報は、会員のロータリーへの認識と自覚を深める意味で、退会の防止には直接役立つものである。広報には、ロータリアン自体に、ロータリーの綱領とプログラムや具体的な活動について十分な認識と理解を深めさせる機能が予定

されており、広報のクラブ内に向けてのこの機能が十分に効果を挙げていけば、退会の防止に大いに役立つことは、疑いが無い。通常、退会の理由として挙げられるのは、ロータリー自体の存在意義や例会の魅力の欠如、時間や出席や出費の負担の過重感、情報の不徹底や交流の不足と孤立感、在籍に伴うべき充実感の不足などのほか、極端な場合として、多数会員の高齢化による老害や派閥の形成などを原因とする硬直した暗いクラブの空気などが指摘され、これらの事情は、入会后五年未満の比較的若い会員に特に顕著に作用することである。このような事情も、クラブ会員に対する広報が徹底すれば、その大半について著しい改善が期待できる。綱領に示されているロータリー精神の核心がサービスの理念「The Ideal of Service」にあることはいうまでもないが、サービスとは、一口で平易に言えば、「人のために生きる。」ことは無理であるとしても、「人のことをよく考えて誠実に生きる。」ことは可能であり、このサービスの考え方を実践することによって、人と社会の真の幸せが初めて齎されると信じて生きることが、ロータリーアンに求められるのであろう。会員がこの考え方を十分に認識し理解した上で、

さらに進んで、他の会員やクラブ外の人たちにこの考え方を分ち合う喜びに目覚め、具体的な職業活動を手始めに、地域社会の活動や国際的な活動に参加して現実に体験を重ねて行けば、かつてない人間的な感動を味わい、クラブ内で他の会員たちとその感動を共有できるはずである。こうなれば、その会員がクラブからの退会を考える余地は、全く無くなるであろう。

次に、広報には、地域社会にロータリーの存在意義を強調する機能が予定されているが、実はこの広報の機能は、地域社会に会員増強の素地を作るだけで、直接には会員増強に役立たないかも知れない。広報を会員増強に結び付けるためには、単にロータリーの存在や活動を地域社会に現象面で表面的に広報するだけでなく、広報の根底に、有形無形にロータリーの考え方自体を地域社会に訴えて行くという視点が組み込まれていなければならない。何故ならば、「人は他人のことをよく考えて誠実に生きるべきものであり、そこに人と社会の幸せがある。」との考え方は、ロータリーの世界の真理であるだけでなく、もっと広く、人と人間社会一般に共通の普遍的な真理であるからである。社会への呼びかけが、しっ

かりとこの考え方に根付いていることが、ロータリーの存在と活動について徐々に地域社会の共感が醸成される素地となるであろう。そのような素地のうえに、さらなる具体的な努力が必要である。例えば、地域社会の人々の共感と参加意識を獲得できるだけの実質を備えたロータリー活動が必要であるし、粘り強い努力により、ロータリーが地域社会と深く共存している実態の形成が必要である。特に、地域社会のニーズを真剣に考えて、誠実に恒常的なロータリー活動を継続して実行していることが必要であろう。このような実績の積み重ねが、広報の機能により地域社会に豊かに的確に周知されることとなれば、ロータリーの存在は地域社会で十分な評価を獲得することができるであろうし、さらに進んで、地域社会の中から、ロータリアンの資質を持ちながらまだロータリアンになっていない地域社会の人々など、適切な会員候補者を多く発見できることとなるはずである。そして、クラブ会員に対する広報の成果として、ロータリーを分ち合うことにクラブ会員が喜びを感じていることと相俟って、会員増強の成果は、確たる基盤の上に、現実のものとして結実することとなるであろう。

さらに、ローターアクター、青少年交換学生、ライラ参加者、米山奨学生や、財団奨学生、GSE参加者などの財団学友を、ロータリアンの対象として広報を強化すれば、増強に即効的効果が期待できる。そのため、地区にこれらの次世代関係者による定常的な連絡協議の機会を設けて、増強への努力を推進すべきである。

最後に、インターネット、Eメール、ウェブサイトなどの情報機器の広報における活用のあり方を研究し、増強に果たす効果について検討を加えなければならぬ。また、コミュニティ・コンサーンズやメディア・リエゾン・システムを検討することにより、広報が増強に及ぼす効果と認識を深めるよう努めることも必要であろう。

(二〇〇〇年一〇月)

広報と会員基盤の強化について

周知のとおり、新しい二一世紀を目前にして、国際社会の質と規模の変化とそこに展開される人間社会の意識と価値観の変革に伴うロータリーの会員基盤の質には、行き届いた検討と慎重な配慮に基づく確な対応が求められる。従って、近時懸念されている会員基盤の弱体化に対する対応が徒らにその場限りの対症療法的なものでは、無意味どころか、長期的には却って有害である。そこで、会員基盤の強化に真に資する私どもの努力の一環として、広報の機能を取り上げてみたい。

会員の基盤が弱体化する原因が退会の増加と会員増強の消退にあることは、いうまでもない。退会の事由として通常挙げられるのは、▽ロータリーの原点であるサービスタと職業奉仕の基礎理念が忘れ去られていること▽ロータリーの精神や

存在意義が希薄となっていること▽例会が形骸化し魅力が欠如していること▽精神的な核を伴わない単なるボランティア団体や社会奉仕団体へ安易に傾斜していること▽性急で量的な拡大や会員増強による精神的資質の低下がマイナス要因として作用していること▽時間や出席や出費の負担の過重感が増幅していること▽情報の不徹底や交流の不足が孤立感を助長していること▽在籍に伴うべき充実感が不足していること▽若い世代の価値観が変化していること、などのほか、極端な場合として、多数会員の高齢化による老害や派閥の形成などが原因となつて、クラブの空気が硬直化し暗いものとなつていること、などが指摘されている。しかも悪いことに、これらの事情は、入会后五年未満の比較的若い会員に特に顕著に作用することである。このような事柄を重ねて述べるのは、その中に会員増強の障害ともなる事由も含まれており、会員の基盤の強化に必要な広報が備えらるべき重要な因子が含まれているからである。

そもそも広報は、二つの側面から解析することができる。第一は、ロータリーの内に向けての広報とロータリーの外に向けての広報という方向性の側面であ

る。第二は、精神面の広報と行動面の広報という内容の側面である。先ず精神面の広報とは、サービスの理念 The Ideal of Service の広報である。人は、自分のことを考えて生きるとは当然であるが、それだけであつてはならない。人間愛を基本として他人のことをよく考え、誠実に生きなければならぬ。なぜならば、人は自分で生きるものであるが、同時に他人のおかげによって生きるものであるからである。従つて、人はこの社会的な責任を果たさなければ、真に幸せに生きることができない存在であり、また、社会も幸せなものとはならない。このような考え方で生きることがサービスの理念を持つて生きることであるが、実は、このような考え方は、ロータリーだけの専売特許ではない。人間社会に共通の、古今渝らない不変の真理である。ただ、一般社会の人々は、その真理をある程度は予感しながら実行できないのであろうが、ロータリーは、その真理を深く認識して、少しでも多く行動によつてその成果を実現しようと努力しているという違いがあるだけである。従つて、ロータリーの内に向けて絶えずこの真理を語りかけ、会員のロータリーにかかる精神的基盤を確かなものとするとともに、

ロータリーの外に向けてもこの考え方を自信を持って訴えて行き、ロータリーの存在意義を社会の中に強調するだけでなく、社会の人たちの共感を育て、会員増強の精神的基盤を社会の中に構築することが、広報の極めて大切な機能というべきであろう。次に行動面の広報とは、会員が例えば自己の職業活動を醇良なものとして活性化し、さらに地域社会から国際社会に向けてのロータリーの活動に参加する体験を重ねて行き、しかもその活動は、ロータリーの側から一方的に考えた主観的で矮小化され定型化された活動ではあまり意味がなく、むしろ、社会の現実を直視してそのニーズを真剣に取り上げた活動、しかも社会の人たちとロータリアンとが共に参加して共通の基盤を確かめ合えるような活動を、継続的に積み重ねることである。その上で、そのような活動を社会の人たちによく認識して貰える努力を払うことである。このような行動面の広報がロータリーの内に向けて十分に実行されれば、会員は、ロータリーの活動への参加意識を高めて他の会員とその喜びを十分に分ち合えるであろうし、ロータリーの外に向けて十分に実行されれば、社会の人たちの側からもロータリーを眺める眼が徐々に変化し、単

にロータリーの社会的な存在意義を一方的に強調するだけでなく、社会の中からロータリー活動に参加しようという意欲を持った人たちも多数輩出することとなるであろう。

このように、ロータリーの内外に向けて、広報の精神面と行動面の機能を強化することによって、真の退会防止と会員増強の成果を挙げることにより、会員基盤の強化の実現が期待できると思うのである。

さらに、ローターアクター、青少年交換学生、ライラ参加者、米山奨学生や、財団奨学生、GSE参加者などの財団学友を対象として広報を強化すれば、会員の増強に即効的効果が期待できる。そのために、地区にこれらの次世代関係者による定常的な連絡協議の機会を設けて、会員増強への努力を推進すべきであろう。また、インターネット、Eメール、ウェブサイトなどの情報機器の広報における活用のあり方を研究し、増強に果たす効果について検討を加えなければならぬ。コミュニティ・コンサーンズやメディア・リエゾン・システムを推進することにより、広報が会員基盤の強化に及ぼす効果と認識を深めるよう努めることも必要

であろう。

最後に、マスメディアについて一言したい。従来ややもすれば、ロータリーはマスメディアの活用をはじめとする広報に消極的であったと批判されているし、確かにそのような傾向があったことは否定できない。しかし、商業主義の下に経営され、社会の興味を引かない記事を載せたがらないのがマスメディアの実態であることも事実である。これが、ロータリーの活動がマスメディアの紙上に載らない決定的な理由である。だからといって、ロータリーがマスメディアの商業主義に合わせるような活動をする必要は、毛頭ない。むしろ、サービスの理念に基づいて社会の刷新と再構築を意図するロータリーの真摯な活動をその紙面の一部を割いて社会に広報していくことこそが、マスメディアの社会的責任を果たす所以であることを粘り強く訴え続けることにより、その方針を徐々に変更させていくことが、ロータリーがその広報について果たすべき真の努力であるところというべきであろう。

青少年奉仕と家庭の価値

この課題は、ロータリーが新世代へのプログラム Rotary's Programs For New Generations を推進するに当たり、家庭 Home が帯有している価値をどのように理解し認識し活用していくかを論ずることにある。ここで、家庭とよく似た言葉に家族 Family という言葉がある。家族とは、夫婦、親子、兄弟などの近親集団をいう言葉であろうが、この家族という人間関係に、居住家室の状況や地域性などのハードと、生活習慣や気風の蓄積などのソフトなど、有形無形の要素を加味した観念が家庭というもので、地域社会の基盤を構成する根源的で基本的な単位とされているものであろう。

周知のとおり、ロータリーのかつての青少年奉仕プログラムは、主として年齢一四歳から三〇歳までの青少年を対象としていた。相当程度以上の認識とか判断

などの精神的能力を備えた年代層の青少年で、いわば青少年後期ともいうべき若者 Youth であり、そのような能力の存在を前提として、自覚と努力をうながすことにより、その健全な育成を企図したものである。インターアクト、ロータリーアクト、ライラ、文化研修や職業研修を含む国際親善奨学生などのロータリー財団の教育プログラム、GSE、財団学友、各種の青少年交換など、そのプログラムはまことに多種多様であるし、さらに目下、中学生の年代層の青少年を対象に、RYPEN（ライペン）のプログラムが進行中とのことである。

ところが、人はある日突然、社会に存在を始めるものではない。人は、先ず家庭において生まれ出るものである。このように、家庭において乳児期から出発するということは、人間にとって決定的に重要である。子供は、両親を中心とする家族に慈しまれながら、乳児期、幼児期、学童期などの青少年前期の子供 Child の時代を両親を中心とする家族に育まれながら過ごし、徐々にその精神的肉体的能力を高めて青少年後期の若者へと成長し、やがて成年に達したのち、一人前の社会人として、社会における活動を始めるのである。従って、学校における教育

や社会に出てからの教育はもちろんのこと、ロータリーが青少年後期の若者に予定しているプログラム自体すら、青少年前期の子供に対する薫育の成果がなければ、効果を挙げることは大変困難であり、場合によっては殆ど不可能であるかも知れない。北里大学の養老孟司先生も、教育は子供の問題ではなく、親の問題だと指摘されている。ここにおいて、ロータリーがその青少年奉仕プログラムを、一四歳までに限定せずに年齢三〇歳までの若い人のすべてのニーズを対象として拡張し、そのようなニーズとして、新世代の健康の確保、人間の価値の自覚の育成、教育の充実、自己開発の促進を取り上げていく所以も明らかになる。また、ロータリーの青少年奉仕活動において家庭が果たすべき価値のあり方も、自ら明らかになると思われるのである。

すなわち、青少年後期の若者を対象とするロータリーのプログラムは、若者自覚の自覚と努力を前提とするのであるから、若者たち自体が直接の対象となり、家庭の役割は、どちらかといえば理解者とか助言者といった補助的な立場となるべきである。青少年前期の子供のためのプログラムは、子供自体に自覚を強いる

ことは無理であるから、子供たち自体を直接の対象とするよりは、むしろ家庭の構成者である両親を中心とした家族を対象とするものとなるべきであろう。青年前期の子供が乳児期から青少年後期の若者に成長するまでの間、しっかりとその人格的基盤が成長するよう教育する責任が両親にあるわけで、両親にそのような自覚と努力を勧請することが、プログラムの主たる目的と態様となるべきものと思われる。換言すれば、家庭は、青年前期の子供たちに対しては教育の主体者であり、青少年後期の若者に対しては成長への助言者であるということである。ところが、両親その他の家族に、子供たちの教育の主体者として、また若者たちの成長への助言者としての自覚と能力が十分でない場合には、家庭にそのような自覚と能力を付与する努力、そしてこれを高めてゆく努力が必要となり、そのような努力がロータリーの青少年奉仕のプログラムの主要な部分にしっかりと取り入れられることが必須となろう。

しからば、どのような方針と内容で子供を教育し、若者に助言を与えるべきであろうか。明治初年以來、戦後を経て今日に至るまで、わが国の教育は、一貫し

て欧米流の物的な社会施設の整備開発とこれによって齎される物的繁栄に必要な科学技術の教育に特化して、人間不在の知識偏重の教育に陥っていた。いわば貧しさからの脱却をはかるだけの教育で、豊かさを手に入れてしまえばその目的を失い、混迷した価値観とか偏向した考え方とか無気力以外の何物も残らないということになる。現在のわが国とその家庭が、前期後期を問わずすべての青少年に対する教育について、その主体者として、また助言者としての自覚と能力を著しく欠く現状にある真の原因は、正にこの点にあると思われる。しかも、このような弊害は、わが国だけでなく、国際的な広がりの中でも、一般に認められるところである。

この弊害を抜本的に改めるためには、豊かな社会における教育は如何にあるべきか、との問いかけと発想が必要である。そのためには、家庭における教育に、人間の真の価値を直視する人間教育の理念を確立して導入することが急務である。そして、そのことは、ロータリー精神の中核であるサービスの理念 The Ideal of Service を教育の理念に注入することであろう。

人は、他人のことを考え、他人のために尽くすことによって、初めて自分の幸せが得られるとの本質に生きるものであるという考え方は、実はロータリーの独占物ではない。人間社会一般の普遍の真理である。言葉を換えれば、人間の存在の限界を正しく認識し、その制約に素直に耐えて生きるということである。このような考えで生きる人が一人でも多くなることが、社会の幸せを導き、そこに住む人の幸せを実現する唯一の方途であろう。ロータリーは、各種人文の国際的接触が進行する二一世紀を迎え、自信を持って、かつ自己の責任において、この行き方を推進すべきである。ロータリーがその新世代へのプログラムを年齢三〇歳までの若い人すべてを含む新世代のニーズに因應すべきものとしているのも、このような考え方を基盤とする場合に、初めてその成果を挙げ得るものと信じるものである。

ここで一言付言すると、かつての地域社会は、青少年にとって心の故郷であった。しかしながら、現今の地域社会は、そこに住む人たちの質の変化によって、その精神的な資質の大半を失ってしまったのではないか。それどころか、却って

教育上の大変な障害を豊かに青少年に提供し続けているのではないだろうか。なにかんづく、テレビなどのマスメディアの商業主義やインターネットや携帯電話その他の新たな情報機器の開発普及によって、一般社会の俗悪な情報が直接子供や若者を直撃して攪乱し、折角の家庭の努力を減殺したり無に帰させている実情にあることは明らかである。そこで、このような俗悪情報をはじめ、一般社会が提供する数々の教育上の障害を子供や若者から遮断するとか、或いは子供や若者にそのような障害から身を守る力を付けさせることに努力を払うことも、家庭の教育能力を維持し高めるために大変必要であろう。

因みに、このような青少年奉仕の一環として家庭における教育のあり方の是正と充実をはかる具体的方策としては、NPO（特定非営利活動法人）やRCC（ロータリー地域共同体）の活用、各地域の教育委員会への影響力の行使、各クラブのクラブ奉仕活動への家族の参加の勧請、ロータリアンの職場の青少年への開放、公私の学校の教育補助者たる社会人講師へのロータリアンの進出などが考えられる。そして、これらのすべてを通じて、DDF（地区財団活動資金）のC

AP（地域社会援助プログラム）への活用がはかられるべきであると考ええる。

（二〇〇〇年二月）



規定審議会の代表議員に望む

奉仕の第二世紀に移行するに当たり、ロータリーの世界は、ロータリーがより力強くより効果的に奉仕団体として行動できるよう、規定審議会が適切な行動をとるよう期待している。

規定審議会は、定款細則と標準ロータリー・クラブ定款から成り立っている R I の組織規程の変更、削除、補足を取り扱っているが、ロータリーの思想と哲学の多くの部分が、この組織規程の中に含まれている。従って、規定審議会は、単に立法案や決議案の是非を論ずるだけではなく、ロータリーのプログラムや活動を方向づける重要な機能を果たしているといふべきである。しかも、国際ロータリーは、数多くの文化、習慣、言語、人種、宗教、経済のレベルを含む人々から構成され、国際社会のあらゆる思想と哲学を代表している。従って、規定審議

会の代表議員は、国籍、性別、所属するロータリーの規模、奉仕経験の長短などの如何に拘わらず、寛容と善意によってお互いを尊重し合いながら、最も適切な決断を下すことに努めることが求められている。

規定審議会には、クラブ、地区、R Iの各レベルとロータリー財団のあらゆる事項が対象となる。そして、例会、出席、会員、プログラム、管理運営、役員、選挙、会費、人員分担金、寄付金、財務その他多様な種類の何百という立法案や決議案が提出される。理事会からも、管理運営、会員、プログラム、広報、国際会合、財務などに関する重要な立法案や決議案が提出される。

ところで、審議会の審議や決議の手法は、日本のロータリアンである私どもにとって、極めて不慣れで特異なものである。事前にその手続の実情に十分慣れておく必要がある。また、立法案や決議案の内容も、その背景事情を含めて、組織的に十分理解しておく必要がある。要するに、事前の準備に遺漏がないよう努めるべきである。

(二〇〇三年一月)

ガバナーの皆様へ期待する

ロータリーは、時代の変化に適應するために、その組織やプログラムを絶えず変化させている。私どもは、その変化のなかに埋没したり、その学習に狂奔したりして、ややもすればロータリーの本質を見失いがちである。そこで、私どもは、絶えずロータリーの原点を振り返って見る必要がある。

人は、自分で生きていくものであるが、同時に、他人のおかげで生きることができるものである。人は、物心ともに社会の中でしか生きられない存在で、しかも、心を持った精神的な存在である。従って、人は自分のことだけでなく、他人のことを真剣に考え、他人のために誠実に尽くすことによって、初めて自分の幸せを手に入れることができるのである。そして、このサービスという考え方は、ロータリーだけの独占物ではない。人間社会の基本を流れる真理である。このこ

とに気付いていない人々も沢山いるし、気が付いていても実行できないでいる人々も沢山いる。そこで、ロータリーは、このサービスという考え方を一生懸命に提唱して、その実行に努めている。ロータリーは人間社会と共に永遠であり、その基本は不変であるといわれる所以であろう。

ところが、このサービスという考え方は、その意味を理解したり認識したりしただけでは不十分で、実行しなければならぬ。ロータリーでは、職業活動こそがサービスの実行行為の基本であるとされている。しかし、なぜそうなるのであるろうか。人は物質的にも、また、心の側面でも、ニーズの固まりである。社会は、そこに住む人々のニーズの海である。人々のニーズは、自らで充たすものもあるが、大部分は他人によって、他人の職業活動によって充たされるのである。見方を逆にすれば、職業とは、他人のニーズを充たす活動である。従って、社会は職業の集積であることになる。しかも、人々のニーズは、人間存在の根源であるから、職業が社会で占め意義と価値は、正に根源的なものである。そこで、職業活動こそが、サービスの実行の最初であり最後であることとなるであろう。

一般の社会では、職業は、自分の生計のための手段、財産形成のための手段、社会的な地位や名誉を確立するための手段であると理解されている。このような考え方は極めて常識的で、間違った考え方ではない。ただ、このような職業は、いわば自分のための職業である。自分のための職業は、ややもすれば自己本位になり勝ちである。そこで、その正しいあり方を確保するためには、色々な制約を設けることが必要となつて来る。貪らないように、手を抜かないように、不正な手段を用いないように、などである。違反には、罰則で臨んだり、行政指導をしたり、最近では内部告発を制度化する試みなどがされている。しかし、これらの制約は人間の外部から加えるものであるから、限度がある。内外の大小さまざまな企業や組織の関係者の不祥事が後を絶たないことを見れば、明らかである。ところが、ロータリーのいう職業とは、他人のニーズを充たすものであるから、他人のための職業である。そこでは、自分のための職業に必要であつた制約の殆どが、不必要となるであろう。自分のための職業から、他人のための職業への意識の転換こそが、職業倫理の第一歩といふべきであろう。

職業奉仕はロータリアン個人の責務であるが、クラブや地区にもその責務がある。会員の職業奉仕の意識を高めたり、職業奉仕の実行を激励したり、他の組織や団体との職業に関する共同プロジェクトの実行や、青少年、障害者、高齢者などへの職業に関するプロジェクトの実施を奨励したり、職業奉仕を地域社会から国際社会へと広めて行くプロジェクトを推進する努力を尽くすことなどである。もちろん、職業奉仕以外のサービスの活動、例えば地域社会に対するサービスや国際社会に対するサービスも大切である。しかし、私どものサービス活動の基本のすべてが、職業活動にあるということである。

ガバナーは、地区のロータリアンのリーダーである。そこで地区のロータリアンに、このサービスという考え方と職業奉仕を基礎とするサービス活動のあり方について、しっかりとした認識と信念を持っていただくように、ご指導を重ねていただきたい。そして、この基礎ができ上がれば、後のことは自然と理解が深まり、実行が進んで行くのではないかと思われるのである。

(二〇〇三年一月)

ロータリー財団のプログラムについて

ロータリー財団は、アーチ・クランプの基金提唱以来八五年、教育的プログラムの本格的指導以来五五年の年月を経過し、ロータリーの世界だけではなく、広く国際社会前半に深く根を下ろしている。そして、国際ロータリーの究極の目的が、ロータリーの綱領と使命を遂行し、サービスの理念 *The Ideal of Service* によって結ばれたロータリアンの親交によって国際理解と平和で幸せな人間社会の実現を推進することにあることはいうまでもないが、財団の使命が、地域レベル、全国レベル、国際レベルの人道的、教育的、文化交流のプログラムを通じて、国際ロータリーの努力を支援することにあることも、またいうまでもないところである。

ところで、財団のプログラムには、必然的に組織的な位置づけがあることが注

目されねばならない。すなわち、プログラムのうち文化交流のプログラムこそが、財団の究極的なプログラムといふべきである。何故ならば、各民族の人文の個性を相互に交換し交流しようとするプログラムは、各民族間の対話と交流を促進することによって国際理解と親善を推進しようとする国際ロータリーの目的に直結するものであるからである。もつとも、各民族の文化の交流といつても、それは各民族の社会基盤が相当程度に確立されていることを前提とするものであろう。各民族の社会基盤には、物的側面と人的側面があり、換言すれば、社会基盤のハードとソフトの確立が文化交流プログラムの前提条件となる。ここで、社会基盤のハードの側面の不備ないし欠乏を補おうとするプログラムが人道的プログラムであり、社会基盤のソフトの側面の不備ないし欠乏を補おうとするプログラムが教育的プログラムであろう。前者は、例えば生活必需物資や保健の状況から人々の自立的資質の育成などの既存の人道的プログラムなどはもちろん、環境の保全や識字率の向上のプログラムなどもこの範疇に属するであろう。後者は、ややもすれば知能をはじめとする各種の人間資質の開発をいうものと誤解され易いが、

これらはむしろハードの範疇に属するものであり、ここでいうソフトとは、サービスの理念、すなわち他者のために生きることにより自己の幸せを見出すとして生きる者を一人でも多く育成することをいうものである。このことは、国際ロータリーの目的である国際理解と親善の推進が、サービスの理念を大前提として行われべきものであるとの綱領の定めによって明らかである。国際親善奨学生や新たに発足した国際問題研究のためのロータリー・センターなどの教育的プログラムは、このようなソフトの充足を目的とするものであると理解すべきものであり、サービスという考え方を色々な民族の社会の基盤を形成するソフトとして普及させることこそが、その社会の基盤をソフトの面からしっかりと確立することになるであろう。

このような財団のプログラムの目的とする事項は、本来であれば、各民族の政治や行政によって充足されるべきものであるかも知れないが、人間社会は政治や行政によってはその必要とする事柄の全部を到底充足し得ないものであり、結局的にはその社会の構成員の自助努力のみによってしか完全には充足できないもの

であることが人間社会の真実であることに鑑み、ロータリーの財団プログラムの存在意義も、正にこの点に存すると理解すべきであろう。

ただ、財団のプログラムについては、数多くの課題が存在する。例えば、原資たる寄付の確保と充実をどのようにすべきか、寄付の投資を、そのリスクをどのようにして回避しながら効果的なものとするか、原資を本部と地区の間でどのような方針に従って配分すべきか、原資が補助金として流れていく過程で公正で効率的な使用をどのようにして検証するか、プログラムを地域において実施しようとするときに当該地域における政治や行政との調整をどのようにするかなど枚挙に遑がない。

財団は、人道的プログラムと教育的プログラムの充実強化に鋭意努力して来たが、対象社会の存在の確立には未だ遠い現状にあり、原資の不足と相俟って、究極のプログラムである文化交流プログラムは、単に研究グループ交換の域に止まり、本格的な文化交流プログラムの展開は未だしの感が否めない。人道的、教育的プログラムの整理と重点処理の推進により、本格的な財団プログラムの活動が

一歩ずつ着実に進行するよう、さらに一段の努力と工夫を加えるべきであろう。

(二〇〇二年八月)



ロータリー財団の課題について

ロータリー財団の存在意義は、人頭分担金とは別に、プログラムの実施に必要な資金を、寄付金の形で確保したことにある。国際ロータリーの組織管理に必要な費用を人頭分担金の形で確保し、これとは別に、年次寄付や恒久基金などのロータリー財団の資金によって、国際ロータリーのプログラムを実施していくのに必要な仕組みを確立するという発想は、組織の管理とプログラムの遂行という二つの目的を矛盾なく同時に平行して効果的に実現するという、絶妙な工夫といふべきであろう。

このような財団の運営を行うに当たっては、資金の受け入れと支出という二つの相反する作業があることに、先ず注目しなければならない。資金の受け入れは寄付の増進であり、この作業が合理的にかつ効率的にサービス行為として強力に

実行されることは、資金の確保のため必要不可欠である。他方、資金の支出は、そのこと自体が直ちにサービスとしてのプロジェクトの実施に直結するものであり、その資金の利用がバランスよく社会の要求を充足する効果を挙げていることが必要である。さらに終局的には、そのことが、ロータリアン及びロータリーの質を高めること自体に寄与することとなるのである。何故ならば、ロータリアンは、現実にはプロジェクトに参加してサービスを実行することによって、初めてロータリアンとしての質を高めることができるからである。

資金を支出してプロジェクトを実施することについては、さらに二つの側面があると思われる。その一は一般社会における平常なサービス活動の支援であり、その二は国際社会における異常な事態を解決するためのサービス活動の支援である。前者は、一般の社会の人々にサービスの理念が人間社会の普遍的な真理であるとの認識を広め、この認識に基づく実行行為を社会に周知徹底していくためのプログラムである。このような日常の努力は、ロータリーの人間社会に対する粘り強いかけがえのないプログラムといふべきである。「慈愛の種を播きましよう」

というラタクル直前会長のテーマは、このような観点に立脚したものである。後者は、貧困、飢餓、疾病、非識字、紛争、災害その他の国際社会における異常な事態に、サービスをもって対応しようとするプログラムの支援である。政治、行政、思想、文化などの努力では解決できていない領域に、勇気を持って迫ろうとするもので、「手を貸そう」というマジリアベ会長のテーマは、このような狙いを持った呼びかけであろう。ただ、この種のプログラムは、ややもすれば外面的な成果主義に墮する危険があるので、絶えずサービスの実施としての本質の反芻すうが必要であろう。財団が取り上げているプログラムは、このいずれかに属するものである。現実のプログラムについて、そのいずれに属するかの自覚を確かめることは、的確な活動を実現するために極めて有効である。いずれにせよ、その目的、方法、効果などは随分と違いながら、そのいずれもがロータリーにとって必要不可欠なプログラムとしての意義を備えているというべきであろう。

財団のあり方にも、時代に関わりなく不変である部分と、時代と共に激しく移り変わっていく部分がある。このような財団のあり方に思いをいたし、その多様

な切り口に考察を深めつつ、効果的な作業の実現に努めて行きたいと思うのである。

(二〇〇三年一月)



ロータリー財団の機能について

ロータリー財団のプログラムは、絶えず改訂が加えられ、その現状の把握については、不断の研修が必要とされている。しかしながら、国際ロータリーとロータリー財団には、時代を超えて殆ど不変の課題が与えられており、その課題には、概ね二つの種類があるように思われる。一つは、国際社会における異常な事態を緩和し、ないしは解消するために、早急かつ強力な対応をはかろうとするものである。その二は、人間社会の平常な営みにおいて、人間生活の質を改善するために、継続的な努力を払おうとするものである。

国際社会における異常な事態は数多くあるが、顕著なものを指摘すれば、次のようなものがあろう。

(1) 先ずは、貧困や飢餓などの経済的に極度に劣悪な生活条件の問題である。世界

人口の実に四五%に当たる二八億人の人々が、一日米貨二ドル以下で生活し、毎年一、三〇〇万人以上の人々が餓死しているという現実である。

(2)次に、ポリオ・プラスやエイズなどの深刻な疾病や、不潔な飲料水など、保健上の障害という肉体の健康上の問題がある。ポリオは、国際ロータリーとWHOなどの共同作業によって、その制圧も間近い段階となっているが、そのプラスであるハシカ、ジフテリア、結核、百日咳、破傷風には、十分な対応がとられているとはいえない。エイズに至っては、世界で六、〇〇〇万人以上の人々が感染し、すでに二、二〇〇万人以上の人々が死亡している。世界人口の二〇%に当たる一二億人の人々がきれいな飲料水を得ることができず、毎年五〇〇万人以上の人々が汚れた水を飲んだために死亡している。さらに、一〇億人もの人々が、医療を受けられない状態にある。

(3)これらの深刻な諸問題の根底には、識字や計算の能力の欠落その他教育の不備による無知の問題がある。世界の成人人口の二六%に当たる一〇億人の人々が読み書きや簡単な計算ができず、自分の名前すら書けない状態にある。その三

分の二が女性であり、非識字の母親は、非識字の子供を増加させる一方である。このような非識字や教育の欠落は、貧困と飢餓や保健上の障害を増加させるだけでなく、毎年八、〇〇〇万人という無制約な人口の増加や、環境の破壊を促進する原因ともなっている。

(4)さらに、部族などの集団の間や民族国家の間で、現実には発生し継続している具体的な係争関係がある。これらの係争が地域社会や国際社会の人々の平和な生活と幸せを如何に阻害しているかは、論を俟たない。

(5)最後に、世界の何処かで絶え間なく発生している地震や洪水などの大規模災害がある。これらの災害の被害者に対する迅速的確な救援活動の必要性も、論を俟たないところである。

人間社会の平常な営みの中における人間生活の質の改善のための継続的努力には、次のようなものが挙げられるであろう。

(1)先ず、色々な民族や国家の個性や特性を相互に理解し尊重し合い、これらの活発な交流によって、相互の文化の内容を豊かにするという問題がある。

(2)次に、もつと根本的に、人間社会の質を改善して行くという問題がある。人は、社会に生きる精神的存在として、自己の充足だけではなく他人に尽くすことによつて、初めて自己の幸せを手に入れることができるという人間社会普遍の真理であるサービスの理念 The Ideal of Service を、着実に地域社会や国際社会に浸透させて行くための粘り強い努力が、基本的に必要であらう。

異常な事態の緩和解消にかかる課題は、世界社会奉仕など国際ロータリーの国際奉仕活動とともに、3H補助金、マッチング・グラント、地区補助金、個人向け補助金などの各種の補助金、災害救援などのロータリー財団の人道プログラムに集約されている。また、人間社会の平常な営みの中における人間生活の質の改善にかかる課題は、インターアクト、ロータリーアクト、ライラ、ロータリー地域共同体、国際青少年交換などの国際ロータリーの奉仕活動とともに、国際親善奨学生、世界平和奨学生、研究グループ交換、財団学友などのロータリー財団の教育的プログラムに集約されている。いずれにせよ、ロータリー財団に与えられた国際的な奉仕活動にかかる課題を右のような見地から眺め直してみることは、

現在のプログラムに対処すべき心構えと活動のあり方を自覚する上だけでなく、プログラムの将来に向けての強化発展を試考する上でも、相応の意味を持つものと考えるものである。

(二〇〇三年八月)



ロータリー財団の素描

周知のとおり、ロータリーは、その創設の初期において、四人の卓越したロータリアンによつて定礎された。先ずポール・ハリスによつて、プロテスタントとしての透徹した人間愛を原質として与えられた。次いでアーサー・シエルドンによつて、この人間愛に醇良な社会性を賦与したサービスの理念（奉仕の理想）*The Ideal of Service* をソフトとして与えられた。さらにチェスリー・ペリーによつて、クラブから国際ロータリーに至る強固で効率的な組織とその運営の方式をハードとして与えられた。そして最後に、アーチ・クランプによつて、その広汎で多様な活動にロータリー財団という巨大な財政的基盤を与えられたのである。従つて、ロータリー財団は、ロータリー活動の全体を支える基盤自体としての構造体であるといふべきであろう。

一九四七年一月ロータリーの創始者ポール・ハリスの逝去に当たり、その死を悼みその功績を称えて全世界のロータリアンから総額米貨一三〇万ドルに及ぶ寄付金が寄せられ、ここに財団は、永年の夢であった財務の安定とその目標と理想を叶えるためのプログラムの創設を現実のものとする事ができることとなった。大学院課程の学生を対象とした国際的な奨学金の教育的プログラムが実現し、世界七か国から選ばれた一人の優秀な学生に奨学金が支給されて、最初のロータリー国際親善奨学生が誕生したのである。今日において、財団は、民間における世界最大の育英組織へと発展し、毎年約一、三〇〇人を超える学生を留学させているだけでなく、人道的プログラムと文化交流プログラムが加わり、人類社会の福祉を実現しようとする財団のプログラムが飛躍的な充実を見るに至っていることは、周知のとおりである。

財団は、その正式の名称を「国際ロータリーのロータリー財団」といい、法律上は、アメリカ・イリノイ州の法令に基づいて一九八三年に設立された非営利財団法人で、ただ一人の法人会員である国際ロータリーによって構成されている。

その組織と運営は、財団自体の定款と細則に基づいて行われているが、現実の運営は、国際ロータリー会長が国際ロータリー理事会の承認を得て任命する任期四年の一三人の管理委員によって処理され、国際ロータリーと財団の運営の整合性が制度上保障されている。

ロータリー財団の現実のプログラムには、教育的、人道的、ポリオ・プラスの三つがある。ロータリーは、人と社会の幸せの基本は人にあるとしているので、先ず教育作業の充実が要請される。ただ、その理想が実現するまでは、後進地域の人々や社会の弱者に対する人道的支援が不可欠である。教育的、人道的の二大プログラムが存する所以である。そして最終的には、人間社会の真の福祉は、国際間の人文の相互交流によって初めて実現されるものであるから、ロータリー財団の使命として規定されているとおりの第三のプログラムとして文化交流が取り上げられなければならないが、目下のところ文化交流の性格を持つとされる研究グループ交換は教育的プログラムに組み込まれているので、文化交流は現実のプログラムとしては挙げられていない。その代わりに、第三のプログラムとしてポリ

オ・プラスが取り上げられている。けだし、本来は人道的プログラムの一つであるポリオ・プラスは、国際ロータリーが各国政府や各種国際機関と提携して、全世界からポリオを一掃する壮大な夢を実現しようとするプログラムで、今やそのゴール寸前にある息の長い巨大なプログラムであるからである。

まず、教育的プログラムには、国際親善奨学金、大学教員のための補助金、世界平和奨学金、研究グループ交換がある。国際親善奨学金は、多くの国の優秀な学生を他国に派遣して国際親善と理解を育成しようとするもので、すぐれた歴史の実績を持っており、一学年の奨学金、二年のマルチ・イヤー奨学金、文化研修のための奨学金、ジャパン国際親善奨学金がある。大学教員のための補助金は、自国以外の低所得国の大学で教鞭をとる優秀な大学教員のためのものである。世界平和奨学金は、紛争解決と平和に関する国際問題について研究するための奨学金で、各地区一人ずつ推薦された候補者から競争制で選定された七〇人の世界平和奨学生が、世界の八大学に設置された七か所のロータリー・センターで二年間、紛争の解決と平和の実現に必要な事項を勉強して、その成果を発表するというも

のである。八つの大学とは、国際基督教大学（日本）、パリ政治学院（フランス）、ブラッドフォード大学（英国）、デューク大学（米国）、ノースカロライナ大学チャペルヒル校（米国）、カリフォルニア大学バークレイ校（米国）、サルバドル大学（アルゼンチン）、クイーンズランド大学（オーストラリア）である。研究グループ交換は、二つの国の二つの地域が、ロータリアンのチームリーダーに引率された非ロータリアンの職業人チームを相互に交換するもので、互いに他国を観察し、異なる文化の中で自分の職業がどのように遂行されているのかを学ぶものである。

次に、人道的プログラムには、マッチング・グラント、個人向け補助金、地区補助金、保健・飢餓追放及び人間性尊重補助金（三H補助金）などがある。マッチング・グラントは、自国と他国のクラブや地区が一定のプロジェクトのため、現金を拠出すれば財団が半額を拠出し、DDFを拠出すれば財団が同額を拠出するというものである。国際奉仕部門の世界社会奉仕プロジェクトも、人道的プログラムを充たせばマッチング・グラントの対象となる。個人向け補助金は、

従前の世界社会奉仕助成金とボランティア補助金を統合したもので、海外でボランティア活動を実施するロータリアン、配偶者、ローターアクター、財団学友などの個人やグループに旅費や食費を支給するものである。地区補助金は、従前の地域社会援助プログラム（CAP）やヘルピング・グラントなどを統合したもので、ロータリー・クラブが地域社会または国内で奉仕プロジェクトを実施するときの補助金で、自国内の社会奉仕活動にもロータリー財団の補助金が使えるように、財団の方針を大きく転換させたものである。三Hプログラムは、人々の健康状態を改善し、人間的及び社会的な向上発展をはかるために、国際ロータリー創立七五周年を祝って設けられ、ロータリーの奉仕の水準を目ざましく充実させ向上させたプログラムであるが、目下、資金不足のため凍結されている。

最後に、ポリオ・プラス・プログラムには、ポリオ・プラスとポリオ・プラス・パートナーとがある。ポリオ・プラス・プログラムは、一九七九年にフィリピンの児童にポリオの予防接種をする三Hプログラムとして出発し、その後一八八五年に国際ロータリーがポリオに、ハシカ、ジフテリア、結核、百日咳、破傷

風の五つをプラスしてこれを世界から根絶するプログラムを策定し、二億四、〇〇〇万ドルを超える寄付を集め延べ一〇〇万人以上のロータリアンが参加して、一二二か国二〇億人以上に達する児童に予防接種及び経口ワクチンの投与を行い、開始当時一二五か国三五万症例の発生をみたポリオが現在では六か国年間八〇〇症例前後にまで減少したが、二〇〇〇年までにポリオを根絶して二〇〇五年までにその証明をするという方針を変更して、さらに八、〇〇〇万ドル以上の寄付を集め、二〇〇五年までにポリオをなくすとの方針で活動を継続することとして、現在に至っている。ポリオ・プラス・パートナーは、ポリオ予防のための医療周辺の活動、広報活動、ボランティア活動などのための費用を支えるものである。

財団に対する寄付金は、用途を指定しない無条件のものが推奨されており、年次寄付と恒久基金の二つに大別される。年次寄付は一般寄付ともいわれ、毎年クラブと地区が目標額を設定してこれを達成するために継続して行う寄付のことである。個人寄付、地区とクラブの特別行事に伴う寄付、特別寄付の三つがある。

現金だけでなく、不動産や証券その他の色々な資産も寄付の対象となる。年次寄付は、三年間据え置いたのち、その元金と運用益の全額が、五〇%を財団の活動資金（WF）として、五〇%を地区の活動資金（DDF）として、プログラムのために使用される。シェア・システムと呼ばれている。恒久基金は、寄付金の元金が永久に蓄積され運用益だけがプログラムのために使用されるもので、現在の額は米貨九、〇〇〇万ドルを超えて増加しているが、ロータリー創設一〇〇周年に当たる二〇〇五年までに米貨二億ドル、いずれは一〇億ドルとする目標が設定されている。恒久基金を充実させるために、米貨一万ドル以上の大口寄付が推奨されており、最低二五、〇〇〇ドル以上の大口寄付によって冠名基金を設置することができるし、大口寄付を達成するために、寄付者の生存中に合法的に財団に資産を贈与する計画寄付が推奨されている。例えば、遺贈、生涯年金の寄付、生命保険の贈与、生涯財産を留保した住居または農場の譲渡、収益譲渡寄付などがある。一万ドル以上の遺贈を約束すると、遺贈友の会のメンバーとなる。使途指定寄付は、あらかじめ使途を指定して寄付するもので、ポリオ・プラスなどが

その代表例である。

一、〇〇〇ドル以上の年次寄付をした者は、ポール・ハリス・フェローとして認証され、寄付額が一、〇〇〇ドルを超えることにマルチプル・ポール・ハリス・フェローとして認証される。また、年次プログラム基金に毎年一〇〇ドルずつ寄付する者を財団の友とし、クラブ会員全員が財団の友となると、一〇〇%財団の友クラブと呼ばれる。恒久基金に一、〇〇〇ドルを寄付すると、ベネファクターとして認証される。

財団は、元国際親善奨学生、研究グループ交換チームの元メンバーとチーム・リーダー、元ロータリー・ボランティア、世界社会奉仕助成金元受領者、大学教員のための補助金の元受領者などの財団プログラムへの参加者を財団学友として、学友が世界中のロータリアンや学友相互と継続的な関係を育てられるよう援助し、国際社会への献身及び国際理解と平和の推進に協力するよう努めている。ただし、財団プログラムに参加した体験を持つ財団学友は、ロータリーの精神とロータリーが人間社会に対して抱いている意図について十分な具体的理解を保有

しているので、彼らの生涯を通じてその成果の活用をはかるとともに、彼ら自身や彼らとロータリアンとの相互交流を充実することは、ロータリーの究極の目的である国際理解や親善の推進に極めて有用であるからである。

財団をめぐる問題は、いくつかの問題点がある。先ず、実務的なレベルの問題としては、▽税法上の優遇措置をすべての寄付に拡大する▽各ロータリー・クラブに対する財団情報のさらなる充実と徹底をはかる▽より優秀で適切な奨学生の発見と選択に努力する▽財団の将来を考えて恒久基金の充実を重視する▽国際社会の現状を考えて人道的プログラムを重視する▽財団の国際社会への寄与をより継続的で効果的なものとするために財団学友の制度のさらなる充実と強化に努力する▽識字率及び計算能力向上のプログラムを重点課題として取り上げる、などの諸点が論じられている。

また、古典的な問題として、アイ・サーブかウイ・サーブかの性格論がある。いずれをとるかによって、現実の活動への積極性に差を生じる。理念の段階では、我々ロータリアンの心掛けがアイ・サーブでなければならぬことはいうまでも

ないが、行動の段階では、アイ・サーブとウイ・サーブかの双方が同等に評価されるべきで、個人的なアイ・サーブの活動と平行して、ウイ・サーブの財団活動をより活発に展開することにより、世界理解と平和を推進するためのより効果的な成果の実現に努力すべきであることは、いうまでもない。ただ、外的な行動に没頭する余り、理念の面における内的なアイ・サーブの精神を忘却したり無視したりすることにならないよう、厳に戒心すべきであろう。さらに、二一世紀を迎えて社会の基盤自体の根源的な激変が予定される今日、従来どおり既存の社会基盤に安住してロータリー活動を展開するだけでは、ロータリーの存在意義は徐々に限りなく低下して行かざるを得ない。今後のロータリー活動は、社会基盤の構築自体に向けても、企画され発言され実行されなければならないという見地から、財団の活動についても、その原点からの抜本的な見直しを急ぐ必要があるものと思われる。

私も折角ロータリーに入会し、寄付までしている。財団のプログラムを理解することは、寄付の意義だけでなく、ロータリーの国際的活動の実情と目標へ

の理解自体を深めることを意味する。財団とその活動への認識と協力を一段と深めていただくことを期待する所以である。

(二〇〇四年三月)



文化交流活動としてのGSEの現代的意義

二〇世紀は、先進の欧米の人たちが、国際社会におけるその他の非欧米の後進の人々を意図的に指導し、また、結果的に啓蒙した時代と総括することができよう。わが国は、非欧米諸国の先達として、明治初年以來いち早く、脱亜入欧のスローガンのもとに、欧米諸国の自然科学と生産技術を取り入れただけでなく、社会科学とその成果を政治体制やあらゆる社会組織に取り入れた。そして、第二次世界大戦後は、大多数のアジア、アフリカその他の非欧米国諸国においても、このような欧米追隨の努力が着手継続され、現にその成果を挙げつつあるといえよう。

来るべき二一世紀は、このような二〇世紀における国際社会の欧米化の成果を踏まえ、欧米の人たちと非欧米の人たちとの間に真の対話が成功するかどうかを

決定する世紀となるものと思われる。何故ならば、欧米文化には、人間社会に幸せを提供する資質に限界があるだけでなく、同時に人間社会に避けることのできない深刻な障害を与える体質を本質的に帯有しているものであるからであるし、非欧米の人たちの側でも、それぞれ固有の歴史と文化を保持していて、単なる欧米化の波によつては決して同化できない限界が厳存すると思われるからである。換言すれば、国際社会の単純な欧米化を安易に放置すれば、それだけで、幾多の混乱、紛議、衝突、係争等が発生し、国際社会の全般的平和の実現は半永久的に遠のき、殆ど期待できないことになる。従つて、欧米の人々と非欧米の人々との間の対話による相互理解の努力によつてのみ、相互の平和共存のための方策の模索が成功することとなるものと思われる。

わが国は、目下、社会の構造的な変革と社会意識や価値観の根本的な検討を迫られ、物心ともに未曾有の混乱の中にある。このことは、マクロに眺めれば、非欧米の民族の先達としていち早く社会の欧米化に着手して一応の成果に到達した者として、欧米と非欧米の両文化の谷間にあって、今後の人間社会のあり方を先

んじて独自に模索するという、いわば産みの苦しみの中にあることを意味するの
かも知れない。

国際ロータリーが、国際間の理解と親善と平和の推進をその究極の目的として
いることは、いうまでもない。文化交流プログラムとしてのGSE活動は、二一
世紀を迎え、諸民族間の交流、なかんづく欧米と非欧米の双方の人たちの間の相
互理解の促進に資するものとして、その現代的意義がますます高まっていること
が強調されねばならないであろう。

(二〇〇〇年五月)

財団学友会(PSSC)活動について

周知のとおり、ロータリー財団は、国際親善奨学生、研究グループ交換チームのメンバーとチーム・リーダー、ロータリー・ボランティア、カール・ミラー助成金の受領者、大学教員のための補助金の受領者の各OB、OGを、財団学友Foundation Alumniとして、大切にしている。そして学友が、お互いはもちろん、世界中のロータリアンとも継続的な関係を維持し発展させることができるように援助し、国際社会への献身と国際理解と平和の推進に協力してくれるように期待している。財団プログラムに参加した貴重な国際体験を持つ学友は、ロータリーの精神のあり方とロータリーが人間社会に対して抱いている意図について、十分な具体的理解を保有しているからである。そして、生涯を通じて、学友相互やロータリアンとの相互交流を継続して充実するよう努めながら、その体験の成果の

活用をはかることは、ロータリーの究極の目的である国際理解や親善の推進に極めて有用であると考えているからである。奨学生が帰国しだい正式に迎えて名簿を作成し、学友を地区やクラブの行事に招待し、講演や投稿を依頼し、定期的な懇親会を開催し、新しい参加者へのオリエンテーションに参加を要請するだけでなく、学友を将来のロータリアンの有力な候補者とみなしているのも、このような理由からであろう。

国際親善奨学生のOB、OGは、人数はもちろん、在外体験の深さ、多様さ、長さなどからしても、学友の中で最も有力な人たちである。そのような国際親善奨学生のOB、OGの人たちが、当地区において財団学友会（PSC）を結成し、精力的に多角的な活動を展開していることは、注目に値することである。奨学生の候補者に対する留学情報の提供と交換、電子メールのメーリング・リストによる支援体制の飛躍的充実、学友相互の懇親と情報交換のための例会開催、ロータリー・クラブの卓話依頼への協力、新たな帰国奨学生の歓迎会開催など、どの一つをとってみても、立派な学友活動である。さらに、毎年一回「PSCだより」

を発行し、奨学生候補者の紹介、留学体験者の声、奨学生の帰国報告、例会と総会の記録その他の活動報告、顧問ロータリアンの意見をはじめ、詳細な留学マニュアルなどを掲載し、奨学生の留学体験の充実に努めるだけでなく、学友とその活動に関する情報をロータリーの内外にあまね遍く広報する努力を尽くしていることは、学友の存在とその機能を重視するロータリー財団の立場として、まことに慶ばしいことといわねばならない。本地区P S Cの益々の発展を祈念する所以である。

（二〇〇〇年一月）

近頃思うこと

只今のところ、世界中が滔々とうとうと欧米化の潮流に流されている。物的な施設や科学技術の成果などのハードの問題だけでなく、思潮や人文などのソフトの面までも、例外ではない。英語を国語にしてしまえ、といった極論さえも聞こえて来る。しかし、果たしてそのようなことでよいのだろうか。確かに欧米化は、ハードの面では、大小深淺のその影の部分は暫く措くとして、人間の福祉のため一応の成果を挙げているといえよう。ソフトの限られた一面でも、同様であろう。しかし、物心両面にわたる人間社会の全面的な欧米化が、真の意味で人間の福祉に役立つと安心していて大丈夫なのだろうか。人々の真の幸せは、色々な地域や国々の人たち固有の人文や言語などのソフトを、お互いに大切にして理解し合うことから始まるのではなからうか。

人は、まず自分のことを大切に生きるものである。しかし、それだけでいいわけではない。人は、他人を大切にし、他人のためにも誠実にしっかりと働かなければならない。そうでないと、その人に真の幸せは来ない。人は、他人の存在を絶対の前提として生きるものだからである。また、幸せとは、心の問題であるからである。このことは、いうまでもなく人間社会に普遍の原理であろうが、このことですら、欧米の人たちとそれ以外の非欧米の人たちとは、考え方や実行の仕方に微妙な違いがあるし、考え方によっては、決定的な差があるのかも知れない。

私たちは、これから先どのように考えて生きていけばよいのか、お先真つ暗なこの頃である。

(二〇〇一年五月)

バイマールヤンジンさんと「夕焼け小焼け」

バイマールヤンジンさんとは、一九九九年四月に、寝屋川クラブの三〇周年のお祝いの席で、初めてお目にかかった。チベットの女性は美しいなあと感嘆し、お名前をバイマールヤンジンと切れ目なく一気に読まなくてはいけないと教えられ、チベットの土地は富士山より高いとか、チベットの人は魚を全く食べないとか、面白い話を沢山承り、びっくりした。特に、チベットの子供は、貧しいけれども目が生き生きと輝いているが、日本の子供は、豊かであるのに目が死んでいる。日本の子供は、どこに行ってしまったのだろうかというお話に、聴く者一同肅然とした。そこで、さっそく地区の教育問題特別委員会に講師としてお招きして、委員全員でお話をお聞きして、大変参考にさせていただいた次第である。

「夕焼け小焼け」の歌は、日本人の心を唱ったただ一つの歌であるという学者

がおられる。東北大学や歴史民族博物館で教えられ、国際日本文化研究センターの教授をしておられる宗教学者の山折哲雄さんである。山折さんは、学士会会報の「伝統を考える」という文章の中で、要約次のように述べておられる。「人の生は限りなく続くものではない。哀しみと儂さの上に成り立っている。夕焼けは、このような落日信仰、浄土信仰の象徴である。人々に哀しみと儂さを教えるこの落日信仰、浄土信仰こそが、日本人が生きることの底を流れる心の支えである。仏教は、日本に入って千年以上になり、日本人の心の深層に、その落日信仰と無常観を与え続けてきた。この歌は、小学校や女学校の先生をしていた中村雨紅という人が大正年間に作った歌で、彼はこの童謡一つだけを残した人だが、このような日本人の心は、この歌一つに表されているといっている。「夕焼け小焼けで日が暮れて」―広い世界で日本人だけが、絶えず夕焼けを振り仰ぐ心を持っているのである。「山のお寺の鐘が鳴る」―比叡山や高野山などの山から発した日本仏教のお寺の鐘は、一日中日本人の耳に聞こえていて、祇園精舎ではないが、その鐘の音が日本人の生活と心に落日信仰を沁み込ませて来たのである。「お手で

つないで皆帰ろう」——夕方となれば、一人で家に帰るのではない、皆で手をつないで帰るのだ、しかも、帰るのは子供だけでなく、帰りなんいざと帰去来の辞よろしく、人は皆心の故郷に帰るのである。「鳥といっしょに帰りましょう」——帰るのは人間だけではない、鳥や動物と共に、自然に帰るのである。中村雨紅は、浄土信仰を意識してこの童謡を書いたのではない。しかし、いみじくも、生きる哀しみを自然と共感する日本人の心を、ぴたりと言い当てている。日本人は、無宗教だとか、宗教的に無節操だとか言われるが、そのようなことはない。心の深奥に、しっかりとした宗教の資質を定着させている。このことは、韓国の宗教学者の老大家から、日本人には仏教の教えがよく行き届いているのが羨ましいと、日本の外から指摘されたところである。』と。

二一世紀を迎えて、アメリカ流の科学技術も大切であるし、個人の絶対や競争の自由もよいであろう。キリストやモハメットや孔子の教えも貴重である。けれども、日本に入って独自に花開き、日本人の心の奥深く根付いた仏教の落日信仰や無常観、人の生の哀しみと儚さを自然と共に共感するその考え方や感じ方こそ

が、人の生の価値の質を着実に高めていることを、私どもは今一度あらためて再認識すべきではないかと思う。そのことが、ロータリー精神の真の国際化へ向けて、私ども日本のロータリアンの果たすべき最も大事な貢献になると思うのである。

チベットは、今や中国との問題で大変だと思うが、そのチベットで小学校の建設に力を尽くしておられるバイマーヤンジンさんのご労苦に、心から声援を送りたいと思う。大体チベットは、仏教の先進国であり、日本から見て正に西方浄土の国である。その西方浄土から見えたバイマーヤンジンさんに、日本の西方浄土の心を象徴する歌「夕焼け小焼け」を歌っていただくことは、まことに時宜を得た不思議なご縁といえよう。

(二〇〇〇年三月)

親睦と奉仕

ロータリーにとって、親睦と奉仕が基本であるといわれる。親睦と奉仕は車の両輪であるともいわれる。このこと自体は間違っていない。ただ、その表現をどのように理解するかについては、若干の問題があるかと思われる。例えば、ロータリーには、親睦に関する部分と奉仕に関する部分が別々に存在して、両者が程よくバランスを持って機能しておればよろしいという趣旨と解するのであれば、問題がある。何故ならば、親睦と奉仕とは、載然と区別して捉えるべきものではないと思われるからである。

親睦とは、友情を持って他人に接することであり、人間愛を基本とする人間関係である。奉仕とは、他人によって自分が存在するという本質を自覚し、誠実に他人のことを考え、他人のために尽くすことである。従って、両者は、人間愛を

前提とする意味で、基盤を共通にするものである。

このような見地に立てば、親睦が親睦だけで終わってはロータリーではない。親睦という人間関係に立脚して、他人を思い他人のために尽くす奉仕の段階に進まなければならない。また、奉仕も、親睦を伴わない奉仕では、その意味の大半が失われる。奉仕を行う者自身が親睦という人間関係に立脚して奉仕を行うべきであるし、共に奉仕を行う者同志の間や、奉仕の相手方との間でも、親睦という人間関係が前提とならなければ、奉仕は十分な機能を発揮することができない。ロータリーのいう親睦と奉仕とは、渾然として一体となった有機体であるといべきである。

(二〇〇四年六月)

大阪北ロータリー・クラブ創立記念卓話

——ロータリーのわが国への導入と大阪北ロータリー・クラブ創立の沿革について

私どもロータリアンにとって大切なことは、先ずはロータリー自体を正しく理解すること、次に自分のクラブの過去をよく知ること、最後に自分のクラブの現状を正確に認識して将来を慮おもんばかることの三つだと思ふ。一人ひとりのロータリアンと一つひとつのクラブこそが、ロータリー自体であるからである。その意味から、わが大阪北ロータリー・クラブの沿革を、簡単に振り返ってみたいと思ふ。

周知のとおり、わが国にロータリーが導入されたのは一九二〇年（大正九年）一〇月の東京ロータリー・クラブの創立である。これに先立ち一九一八年（大正七年）に、三井銀行の米山梅吉氏がアメリカ・テキサス州ダラス・ロータリー・クラブに在籍していた三井物産の福島喜二次氏を訪ねてロータリーのことを話し

合い、福島氏が帰国した後に、米山氏と福島氏の二人が中心となって東京ロータリー・クラブを創立することとなった。さらに福島氏が大阪転勤となったので、福島氏が星野行則氏と話し合い、この二人が中心となって、一九二二年（大正十一年）一月に大阪ロータリー・クラブが創立された。東京ロータリー・クラブは、世界の一流のロータリー・クラブと肩を並べるように会員やその組織を強化することに主眼を置いたが、大阪ロータリー・クラブは、ロータリーの精神や組織を日本の社会の状況に調和させることに努力し、この二つの潮流は、その後の日本のロータリーの発展に深い影響を与えた。

一九三八年（昭和十三年）以来、台湾、朝鮮、満州を含め、日本全国が第七〇地区の一地区で、一九三九年（昭和十四年）当時、四八クラブ、会員数二、七〇〇人を数えるに至っていたが、この地区を、第七〇地区（東日本）、第七一地区（西日本、台湾）、第七二地区（朝鮮、満州）の三地区に分割して、RIの黙認のもとに日滿ロータリー連合会を組織し、米山梅吉氏が会長となった。その後第二次世界大戦に伴い、軍部の弾圧により解散のやむなきに立ち至り、多くのクラブ

が事実上別個の名義で団体を継続した。終戦後の一九四九年（昭和二十四年）に、東京、大阪、京都、名古屋、神戸、福岡、札幌の各クラブが相次いで復活して国際ロータリーに復帰し、日本全国で第六〇地区を形成することになった。その際、従来の事実上の団体を解散すること、RIの定款細則を遵守すること、RIへの義務を完全に履行すること、各クラブが地区を通じてRIに直属することなどの条件がつけられた。一九五〇年（昭和二十五年）七月には、東京北と東京南の両アディショナル・クラブが設立された。一九五〇年度（昭和二十五年）は、復活と新設のクラブが合計二六。一九五一年度（昭和二十六年）は合計二八と、日本のロータリーが始まって以来の拡大が続いた。一九五二年（昭和二十七年）七月からは第六〇地区を東西の二地区に分割し、東日本の三八クラブを第六〇地区、西日本の二八クラブを第六一地区とすることになった。

第六一地区の初代のガバナーは京都大学の鳥養利三郎氏で、大阪には大阪クラブ一クラブだけであったが、一九五二年（昭和二十七年）の一二月に大阪クラブのアディショナル・クラブとして、大阪北と大阪南の両クラブが創立されることと

なった。西日本では最初の、日本では第二番目のアデিশヨナル・クラブで、その後生まれ出た多くのアデিশヨナル・クラブの導火線となった。大阪の商業の中心地である北の梅田と南の難波に、二つの双子のクラブを創立したわけである。鳥養ガバナールは、大阪ロータリー・クラブの渡辺忠雄氏（三和銀行）を特別代表に任命し、大阪ロータリー・クラブの栗本順三、露口四郎、工藤友恵、中橋武一の諸氏が世話役となり、キーマンとしては、西宮ロータリー・クラブの野田誠三（阪神電鉄）、中村鼎（関西電力）の両氏に、室賀國威（敷島紡績）、清水雅（阪急百貨店）、芦田泰三（住友生命）の諸氏を中心に、会長を野田誠三氏とし、幹事に西宮ロータリー・クラブから森下泰氏（森下仁丹）を迎えて、一二月一六日に阪急百貨店特別食堂において創立総会が開催された。チャーター・メンバー四人で、わが国第九二番目のクラブが誕生したのである。チャーター・ナイトは、南クラブと合同で翌一九五三年（昭和二八年）五月三〇日に宝塚大劇場や植物園で挙行されたが、九〇〇人に垂なんとする会員家族と内外の参加者の出席を得、規模と華やかな内容は正に空前絶後のチャーター・ナイトと評された。

その後クラブは、初期のクラブ例会で、誰かが大きな声でロータリー・ソング「我らの生業」の歌詞を「奉仕の理想」の節で歌い出し、全員が最後まで誰一人として疑いをさしはさむ者なく気持ち良く歌い終わり、その後も誰も文句を言わなかったということが、当クラブの一〇年史に記載されている。小生がRIでその話をしたところ、それこそ理想のロータリー・クラブであると絶賛を浴びた。このようにして当クラブはこの五〇年間に非常な発展を遂げ、日本の代表的なクラブに、また、世界でも知られるクラブへと発展した。会員数も、一九五六年（昭和三二年）に五〇人を、一九六〇年（昭和三五年）に一〇〇人を、一九六八年（昭和四三年）に一五〇人を、一九八六年（昭和六一年）に二〇〇人をそれぞれ超え、一九八七年（昭和六二年）度の末には、たまたま小生が会長を仰せつかっていたが、二〇九人を数えるに至った。この会員数は、東京、大阪、名古屋、京都に次いで当時日本で第五位であった。その後残念ながら阪神・淡路大震災と長引く不況と会員の高齢化が原因となり、会員数が一七〇人前後となって今日に至っていることは、周知のとおりである。当クラブがスポンサー・クラブとなっ

た子クラブは、大阪東、大阪西、大阪淀川、大阪西北、大阪大淀、大阪梅田、大阪中央、大阪ちややまちと多数に上り、孫クラブに至っては第二六六〇地区の過半を占めるといふ盛況である。国際ロータリーの理事は、原田秀雄会員と小生の二名が拝命し、地区ガバナーは、原田秀雄会員、小生の兄菅生謙三、小生と宮田宏章会員（土井正裕会員も拝命したが、エレクト当時惜しまれつつ急逝）の四人で、一クラブから理事二人、ガバナー四人が選出されるというのは、世界的にも珍しい。IGF（都市連合フォーラム）やIM（都市連合会）のホストは、五回務めている。地区大会のホストも、四回務めている。大阪北ロータリーアクト・クラブを事実上日本の第一号クラブとして創立して、その増強に努めている。地域の社会奉仕活動に努め、クリーン梅田キャンペーンが意義ある業績賞を受賞したほか、阪神・淡路大震災における奉仕活動も素晴らしいものであった。プレストン、南ソウル、台北北の三クラブとの姉妹提携で、国際交流活動も充実している。青少年交換、世界社会奉仕などの国際奉仕活動、米山記念奨学会活動等も、極めて充実した形で推移している。さらに、同好会活動も、ゴルフ、北卓会、宝

塚、茶道、邦楽、囲碁などの各同好会があるほか、夏冬の制服と隊歌まで持つ素朴な男性合唱団唱歌隊の存在は、全国的にも極めてユニークで、わが国ロータリーの誇りというべきである。

当クラブに対する一般的な評価としては、会員の文化レベルが高く個性的で個人志向の傾向が強いが、一旦課題が生じたときには忽ち一致団結して実力を発揮すると、友好派と奉仕派の派閥、行動派と理論派の派閥が絶妙なバランスで存在するなどの評価を得ているようである。欲を言えば、サービスの考え方とその実行としての職業活動の志向をさらに深めることであろう。また、日本の社会の現況を直視して、権威主義で始まったわが国のロータリーの伝統を修正して、若い会員と女性会員の入会を促進し、新しい時代に適応したロータリーを先取りするように努めていただきたいと思っている。いずれにせよ、当クラブの一年史は素晴らしい記録で、良きにつけ悪しきにつけ、クラブの原点がしっかりと認められているので、新しく入会された方々は是非一読していただきたいと思う。

マジイアベ会長の二〇〇三〜〇四年度RIテーマについて

ジョナサン・B・マジイアベ会長は、ナイジェリアのカノ・ロータリー・クラブの会員で、ロンドン大学に法律を学び、英国とナイジェリアの大変有力な弁護士である。弱者を見る眼が温かい人間味溢れる人柄の知性派で、アフリカの良識を代表する一人であろう。決断が早く、合理的精神に溢れ、理事会などでも、周囲の意見を気かけずに粘り強く自己主張をし、他を説得するタイプである。最近、片腕として大変期待されていたアデ夫人を亡くされたことは、惜しんでも余りあることである。

マジイアベ会長のRIテーマ「手を貸そう」は、他者のために尽くすということとであるから、基本的にロータリーの核心であるサービスそのものだと思う。前年のラタクル会長のテーマ「慈愛の種を播きましよう」もサービスそのものであ

ったので、表現は違うけれど内容は全く同一である。ラタクル会長が、本年二月のアナハイム国際協議会で、「慈愛をもつて手を貸そう」とか「手を貸して、慈愛の種を播こう」と言われたのも、むべなるかなである。

マジリアベ会長のテーマには、その背景にアフリカなどが抱えている深刻な貧困を始めとする劣悪な生活条件の問題があると思われる。会長は、国際協議会の挨拶の中で、「苦境にある人を援助したいという単純な願望は、万人の心にあると私は信じています。」と指摘されている。そしてさらに、「哀れみの心は私たちの組織のエンジンを動かす燃料であり、この燃料は決して切れることはないし、使えば使うほど沸いて来るが、これはロータリーを著名にしている崇高な目標を追求するために、全面的に必要なものである。崇高な目標とは、飢える者に食糧を与え、裸の者に衣類を与え、家のない者に簡易住宅を与え、病人を慰め、高齢者の世話をすること、すなわち、人間同士として援助と慰めをもって、他者に近づくことである。」と指摘されている。会長は、家族、識字、貧困、保健を二〇〇四年度の強調事項とされ、それぞれを担当する実行グループを設けられた。口

イタリアン家族への心遣いの奨励、識字及び教育の推進、保健問題への対応の四つである。このことから、会長の心意の所在を理解することができると思う。

世界人口の四五%に当たる二八億人が一日二米ドル未満で生活する極貧状態で、毎年一、三〇〇万人以上が餓死している。世界人口の二〇%に当たる一二億人がきれいな水を得られない状態で、毎年五〇〇万人以上が汚れた水を飲んで死亡している。また、世界人口は毎年八、〇〇〇万人ずつ増加しているが、それは世界で最も貧しい地域の出来事である。ポリオ以外にも、六、〇〇〇万人以上の人々がエイズ・ウイルスに感染し、既に二、二〇〇万人以上が死亡した。サハラ砂漠以南のアフリカでは、エイズが死因の第一位である。マラリヤ、糸状虫病、狂犬病もある。保健とは、優れた栄養を確保できること、予防接種、歯科治療、現代的な先端外科手術を始めとする医療を受けることである。世界の多くの人々がこのような保健の世界から取り残されている。貧困や劣悪な生活条件を原因とするこのような事態を解決するため、会長は識字率の向上を始めとする教育を抜本的な対策として取り上げている。ところが、世界人口の一〇億人（世界成人人

口の二六%)が非識字で、その三分の二が女性である。貧困と非識字の悪循環で、生活条件の悪化はますます進むので、識字率を解決することが貧困緩和の絶対条件である。このような問題の解決のためには、世界社会奉仕やロータリー財団の人的補助金を活用して、国境を越えて仕事をしなければならぬ。双子クラブの活用で、このような努力を強化することができる。婦人や子供の自立のための一〇〇米ドル程度の小口融資プロジェクトも、非常に役に立つものである。劣悪な生活条件は、人類にとって災害であるが、その根源的な原因は貧困にある。ところが、貧困は絶望を生み、絶望は、戦争や紛争その他平和への重大な障害を生み出すのである。

会長のテーマとその強調事項の背景には、アフリカ出身の会長であるという点⁶が極めて強く反映されている。会長は、アフリカ人として世界の貧困地域にいる人の緊急な養成に⁷応えられるよう、ロータリアンの意識を喚起したいと望んでおられるが、一方で全世界のRI会長としての立場で仕事をしているという意識も明確であり、世界の特定地域だけにスポットを当ててはならないことも十分自覚

しておられる。また、会長は、ナイジェリアのカノ英国教会のチャンセラーとしての経験から、心に悩みのある人に電話でカウンセリングをする英国のボランティア団体サマリタnzの一員として、利他の精神で人を助けた体験が豊富で、この点も、会長の大きな思想的背景となつていられると思われ。

ロータリアンの努力を充実させるためには、ロータリーの組織の力を強化しなければならぬ。そのためには、会員の増強と退会防止が重大な方策であるが、これを実現するためには、ロータリーは家族であるというソフトを強調することが最も大切であると、会長は考えておられる。ロータリアン同志、ロータリアンの配偶者と子供、亡くなったロータリアンの遺族、ロータリー活動に参加したインターアクター、ローターアクター、ロータリー地域共同体、GSE、ライラなどの参加者、国際親善奨学生、財団学友、平和奨学生はもちろんのこと、広く言えば地域社会、大きく言えば人類全部がロータリーの家族であるというソフトを明確にすることが大切であるとされる。

会長は、職業奉仕を強調されている。ロータリーのサービスを単なる一般社会

にとどめず、絶大な生活条件の格差を解決するために勇敢にサービスの実践を迫る一方で、ロータリーの足元を固めるために職業奉仕を強調されるのであろう。けだし、良質な職業活動によって人々の幸せとよい社会を実現することこそが、ロータリーの果たすべきすべての活動の出発点であるからである。また、会長はロータリーをドリーム・チームと呼び、人間は夢を見るものであると指摘されている。職業奉仕の基本を確かめつつ、政治経済や思想文化その他の社会活動によって達成できずにいる生活条件の絶大な格差の解消に、ロータリーのサービスの実践をもって挑戦することは、ロータリアンの夢であると指摘されるのである。

(二〇〇三年六月)

二〇〇二～〇三年度 R I 第三五二〇地区大会における

R I 会長代理の挨拶

私は、R I 会長ビチャイ・ラタクル氏から、当地区の地区大会に R I 会長代理として出席するように要請されて参りました。私は、かねて日本と深い関係にある韓国のこの土地に伺うことができたことを、大変嬉しく存じております。

さて、当地区のロータリアンの皆様方におかれましては、多数のご来賓とご招待者及び地区内外のロータリアンとご家族の皆様ご出席のもと、このように盛大な地区大会をお迎えになられました。私は、まず、ラタクル会長がこの盛大な地区大会に寄せられました祝意を会長代理として皆様にお伝え申し上げますとともに、私自身も心から皆様に祝意を申し述べたいと思います。

皆様よくご存じのように、ラタクル会長は、タイ国の方でございます。香港の

私立学校で学ばれましたが第二次大戦で中断し、父の関係する薬品会社に勤務されました。彼の最初の仕事は、床掃除でありました。このことを、彼は感謝されています。彼の草の根哲学の原点となったからです。一九四五年にチャロイ夫と結婚され、二人の息子と一人の娘と五人の孫に恵まれました。その後彼は、木材伐採搬出会社のマネージャーを経て父親の事業に戻り、その社長兼会長となりました。そして父のすすめで、一九五八年に三一歳でタイで二番目のトンブリRCの創立会員になりました。しかし、当時彼は形だけのロータリアンで、ロータリーは彼の心に入っていなかったと述懐されています。

ところが、ある日クラブ会長の懇請で、父親のいない子供たちを海辺に連れて行くクラブの活動に参加せざるを得ない羽目になりました。彼にとっては、自分で自由に過ごす土曜日の時間の方がずっと価値があったのです。最初は、彼にまとわりついていた小さな男の子が煩わしかったのですが、時間が経つにつれてその子が彼を必要としていることに気付き、その子供に心が惹かれて行きました。そして遂に別れる時に、その子が彼に抱きつき、「おじさんが僕のパパだったら

いいのに。」とささやいたとき、彼の目は涙に溢れました。ロータリーの強い影響力を悟り、その瞬間から彼は真のロータリアンに変身されたのでした。

一九六九年から、彼は政治の舞台に立ちました。国会議員を九期つとめ、その間に国会議長、外務大臣、副首相を歴任されました。彼の知人や友人たちは、「彼は真に誠実で謙虚な人柄であり、その国際的視野と外交手腕は、不安定な国際情勢と低迷する経済状況下のロータリーを、真に貴重な資質で指導することになるであろう。」と指摘しています。

彼は、「組織の充実は、トップ・ダウン（上意下達）ではなく、ボトム・アップ（草の根レベルからの立ち上がり）によって、実現される。」と指摘しています。彼は、真のロータリーは、草の根のロータリアンとロータリー・クラブによって形成されると確信しておられます。

そして彼は、二〇〇二～〇三年度の R I のテーマとして、「慈愛の種を播きましよう」と私たちに語りかけます。そして、慈愛の種を播くとは、他者のことをまず考え、他者のために何ができるかという側面から自分のことを考えることで

あると指摘されます。慈愛とは、ロータリーの核心であるサービスの原動力となる心のことでしょう。慈愛の種を播くとは、そのような慈愛の心を他人の心の中に播いていくことです。先に述べたタイの小さな男の子の話は、クラブ会長によって、その男の子を媒体として、ラタクル会員の心に慈愛の種が播かれたということです。

ロータリーは、過去一〇年間、上意下達で多くの新しいプログラムと目標を示され、私たちの活動は多岐にわたり過ぎましたが、今後は、貧困問題を本格的に解決しようとする識字率の向上と、ゴール寸前であるポリオ・プラスを重点的な扱いとするほかは、新しいプログラムや目標は一切出さない。そして、他人のためにサービスするという原点に立ち帰り、職業奉仕を中心に、四つのサービス部門の価値と重要性の再認識に努めることによって、内面の充実に努力することが、彼の方針であります。そして、彼は、二〇〇二〜〇三年度に、各ロータリアンが直接活動を体験することによって、奉仕の喜びと慈愛の心を自らの心の中に育てることを期待しておられます。そして、貴方のクラブや、職域や、地域社会や、

国際社会に、しっかりと慈愛の種を播いてほしいと期待しておられます。

ここで、若干の私見を付加させていただきます。二〇世紀は、どちらかといえば、非欧米の人たちが欧米の人たちに学んだ世紀であったと要約できましょう。二〇世紀を終えるにあたり、非欧米の人たちは、欧米の人たちの生き方を基本として自らを検討し、認識するようになりました。さらに、非欧米の人たちの間でも、相互に自らを主張し合う世紀となって参りました。そこで、相互理解に基づく円滑な対話も実現しております。しかしながら、対話の不足や誤解により、数々の紛議や係争も発生してきております。国際社会のグローバル化の最終局面を迎えた今日、まさにロータリーは、国際理解を中核とした国際奉仕活動の真価を問われております。世界のすべての人たちの相互理解と幸せな共同社会を実現できるかどうか、その真価を問われているのです。ただその場合、懸念されることがあります。それは、現在の人間社会の教育活動が知能教育だけに偏していることです。元来欧米の教育活動は知能教育が主体でした。非欧米の人々は、それをそのまま模倣し受け継いでおります。かくて、教育活動の知能化は、国際社会

の主流となつていられると思われまゝ。しかしながら、知能は人間の貴重な資質であります。実は資質のごく一部にすぎません。人間は、もっと包括的な多様で貴重な資質に恵まれてゐるものであります。教育活動は、良き人間を育成し、良き社会を構築する人間の社会的な活動であります。ところが、従来の教育は、人間の資質を全体として育成するという視点が希薄で、むしろそのような視点が欠落してゐたと思ひます。このようなことでは、多くの人たちの真の人間関係も期待できませんし、相互理解も到底実現できないのではないのでしょうか。私は、教育活動の再構築こそが、今世紀のロータリーに課せられた非常に重要な基本的な責務であらうと思ひてゐる次第であります。

以上、国際ロータリー九二代ラタクル会長のお考えを紹介し、併せて私自身の若干の考えを付加して、ご挨拶と致します。

(二〇〇三年三月)

二〇〇三～〇四年度RI第二六三〇地区大会における

RI会長代理の挨拶

私は、RI会長ジョナサン・B・マジニアベ氏から、当地区の地区大会にRI会長代理として出席するように要請されて参りました。私は、伊達ガバナーのお誘いを受け、かねてご縁の深い当地区に伺い、ガバナー始め地区の皆様と親しくお目にかかれましたことを、大変嬉しく存じております。

さて、当地区のロータリアンの皆様方におかれましては、多数のご来賓とご招待者及び地区内外のロータリアンとご家族の皆様ご出席のもと、このように盛大な地区大会をお迎えになられました。私は、まず、マジニアベ会長がこの地区大会に寄せられました祝意を会長代理として皆様にお伝え申し上げますとともに、私自身も心から皆様に祝意を申し述べたいと思います。

それでは、先ず最初に R I 会長メッセージをご紹介申し上げ、次にガバナーのご要請にお応えして、サービスと職業奉仕についての若干の所見を述べて、R I 会長代理としてのご挨拶を申し上げたいと存じます。

ジョンサン・B・マジアベ会長は、ナイジェリアのカノ・ロータリー・クラブの会員で、ロンドン大学に法律を学び、英国とナイジェリアの大変有力な弁護士です。弱者を見る眼が温かい人間味溢れる人柄の知性派で、アフリカの良識を代表する一人でしょう。決断が早く、合理的精神に溢れ、理事会などでも、周囲の意見を気にかげずに粘り強く自己の主張をし、他を説得するタイプです。最近、片腕として大変期待されていたアデ夫人を亡くされたことは、惜しんでも余りあることであります。因みに、ナイジェリア連邦共和国は西アフリカの大国で、面積はわが国の約二・五倍、人口は約一億三千万人で、わが国とほぼ同一です。

マジアベ会長の R I テーマ「手を貸そう」は、他者のために尽くすということですから、基本的にロータリーの核心であるサービスそのものだと思います。前年のラタクル会長のテーマ「慈愛の種を播きましよう」もサービスそのもので

ありましたので、表現は違いますが内容は全く同一です。ラタクル会長が、本年二月のアナハイム国際協議会で、「慈愛をもって手を貸そう」とか、「手を貸して、慈愛の種を播こう」と呼びかけられましたのも、むべなるかなであります。

マジィアベ会長のテーマには、その背景にアフリカなどが抱えている深刻な貧困を始めとする劣悪な生活条件の問題があると思われれます。会長は、国際協議会の挨拶の中で、「苦境にある人を援助したいという単純な願望は、万人の心にあると私は信じています。」と指摘されています。そしてさらに、「哀れみの心は私たちの組織のエンジンを動かす燃料であり、この燃料は決して切れることはありませんし、使えば使うほど沸いて来ますが、これはロータリーを著名にしている崇高な目標を追求するために、全面的に必要なものであります。崇高な目標とは、飢える者に食糧を与え、裸の者に衣類を与え、家のない者に簡易住宅を与え、病人を慰め、高齢者の世話をすること、すなわち、人間同士として援助と慰めをもって、他者に近づくことであります。」と指摘されています。会長は、家族、識字、貧困、保健を二〇〇四年度の強調事項とされ、それぞれを担当する実行グル

ープを設けられました。ロータリアン家族への心遣いの奨励、識字及び教育の推進、貧困緩和の推進、保健問題への対応の四つであります。このことから、会長の心意の所在を理解することができると思います。

世界人口の四五%に当たる二八億人が一日二米ドル未満で生活し、その半分は一日一米ドル未満で生活する極貧状態です。毎年一、三〇〇万人以上が餓死しています。世界人口の二〇%に当たる一二億人がきれいな水を得られない状態で、毎年五〇〇万人以上が汚れた水を飲んで死亡しています。深刻な疾病ポリオが漸く制圧できる状況となりましたが、ポリオ以外にも、六、〇〇〇万人以上の人々がエイズ・ウイルスに感染し、既に二、二〇〇万人以上が死亡しました。サハラ砂漠以南のアフリカでは、エイズが死因の第一位であります。マラリヤ、糸状虫病、狂犬病もあります。保健とは、優れた栄養を確保できること、予防接種、歯科医療、先端外科手術を始めとする近代医療を受けられることです。また、貧困や劣悪な生活条件を原因とするこのような事態を解決するため、識字率の向上を始めとする教育の裏付けが必要ですが、世界成人人口の二六%に当たる一〇億人

が非識字で、その三分の二が女性であります。貧困と非識字の悪循環で、生活条件の悪化はますます進みます。貧困と非識字は、安易な環境破壊と人口増加を促します。毎年八、〇〇〇万人の人口増加は、このような実態の下に進んでいます。このような劣悪な生活状況は人類にとって災害であります。その根源的な原因は貧困にあります。ところが、貧困は絶望を生み、絶望は紛争や国際テロ行為その他戦争など平和への重大な障害を生み出すのです。

会長のテーマとその強調事項の背景には、アフリカ出身の会長であるという点
が極めて強く反映されています。会長は、アフリカ人として世界の貧困地域にい
る人の緊急な要請に応えられるよう、ロータリアンの意識を喚起したいと望んで
おられますが、一方で全世界の R I 会長としての立場で仕事をしているという意
識も明確であり、世界の特定地域だけにスポットを当ててはならないことも十分
自覚しておられます。また、会長は、ナイジェリアのカノ英国教会のチャンセラ
ーとしての経験から、心に悩みのある人に電話でカウンセリングをする英国のボ
ランティア団体サマリタnzの一員として、利他の精神で人を助けた体験が豊富

で、この点も、会長の大きな思想的背景となつていふと思われまゝ。

このような事態の解決に向けてのロータリーの努力を充実させるためには、ロータリーの会員組織の力を強化しなければなりません。そのためには、ロータリーは家族であるというソフトを強調することが最も大切であると会長は考えておられます。ロータリアン同志、ロータリアンの配偶者と子供たち、亡くなったロータリアンの遺族、ロータリー活動に参加したローターアクター、インターアクター、ロータリー地域共同体、GSE、ライラなどの参加者、国際親善奨学生、財団学友、平和奨学生はもちろんのこと、広く言えば地域社会、大きく言えば人類全部がロータリーの家族であるというソフトを明確にすることが大切であるとされています。

また、会長は、職業奉仕を強調されています。ロータリーのサービスを単なる一般社会だけでなく、勇気を持って、生活条件の絶大な格差を解決する実践にまで及ぼすために、ロータリーの足元である職業奉仕を強調されるのでしよう。ただし、良質な職業活動によって人々の幸せとよい社会を実現することこそが、口

ロータリーの果たすべきすべての活動の出発点であるからであります。また、会長はロータリーをドリム・チームと呼び、人間は夢を見るものであると指摘されています。職業奉仕の基本を確かめつつ、政治経済や思想文化その他の社会活動によって達成できずにいる生活条件の絶大な格差の解消に、ロータリーのサービスの実践をもつて挑戦することは、ロータリアンの夢であると指摘されるのであります。

人は自分で生きていくものではありませんが、同時に他人のおかげで生きることが出来るのであります。人は物心ともに社会の中でしか生きられない存在で、しかも心を持った精神的な存在であります。従って、人は、自分のことだけでなく、他人のことを真剣に考え、他人のために誠実に尽くすことによって、初めて自分の幸せを手に入れることができます。このサービスという考え方は、ロータリーだけの独占物ではありません。人間社会の基本を流れる真理であります。このことに気付かない人々も沢山いますし、気が付いていても実行できないでいる人々も沢山います。そこで、ロータリーは、このサービスという考え

方を一生懸命に提唱して、その実行に努めております。ロータリーは、人間社会とともに永遠であり、その基本は不変であるといわれる所以であります。シエルドンの「最も良くサービスをする者は、最も多く報いられる」や、コリンズの「超私の奉仕」などのモットーは、このサービスの本質を指摘する至言であります。

ところが、このサービスという考え方は、その意味を理解したり認識したりしただけでは不十分で、実行しなければなりません。他人のことを真剣に考え、誠実に他人のために尽くすことを実行しなければなりません。ポール・ハリスは、「社会に役立つ人間になる方法は色々あるが、最も身近で効果的な方法は、間違いなく自分の職業の中にある。」と述べています。職業活動こそが、サービスの実行行為であるということです。しかし、なぜそうなるのでしょうか。人は物質的にも、また、心理の面でも、ニーズの固まりであります。社会は、そこに住む人々のニーズの海であります。人々のニーズは、自らで充たすものもありますが、その大部分は、他人によって充たされるものであり、他人の職業活動によって充

たされるのであります。見方を逆にすれば、職業とは、他人のニーズを充たす活動であります。従って、社会は職業の集積であるということになります。ロータリーは、社会をこのように見ているのです。しかも、人々のニーズは、人間存在の根源でありますから、職業が社会で占める意味と価値は、正に根源的なものであります。そこで、職業の活動こそが、他人のことを真剣に考え、誠実に他人のために尽くすサービスの実行の最初であり最後であります。そして、このことをしっかりと理解するためには、先ず社会において職業が占める価値が最高であることを認識し、次にその職業の水準をなるべく高く設定することに努め、最後に自己の具体的な職業活動が最善のものとなるように努めることという、三つの段階を理解しなければなりません。これが綱領の第一に職業奉仕として謳われているところであります。このことは、一九八九年の「ロータリアンの職業宣言」や、一九三二年の「四つのテスト」などに、詳しく表現され説明されております。よく指摘されますように、職業奉仕は、社会に奉仕するいくつかの方法のうちの一つではなく、職業奉仕自体が社会に奉仕すること自体であるということでありま

す。

ところで、社会のニーズは、地域社会によって色々と異なるものです。従って、クラブは自己が存在する地域社会のニーズを絶えず調査して、正確に把握する必要があるとあります。なぜならば、クラブ会員の職業活動がクラブの地域社会のニーズを正確に充たすためには、クラブが地域社会のニーズの実態を正確に認識して、会員の職業がそのニーズをなるべく完全に充たしている必要があるからです。そこで、職業分類という工夫がロータリーにとって不可欠である所以が理解されません。クラブは、いわばその地域社会を表現する小宇宙のような機能を持つものでなければならぬといふべきでしょう。

一般の社会では、職業は、自分の生計のための手段、財産形成のための手段、社会的な地位や名誉を確立するための手段などと理解されております。このような考え方は、極めて常識的で、間違った考え方ではありません。しかしながら、このような職業は、いわば自分のための職業です。ですから、その職業が社会的に正しい形で遂行されるようにするためには、色々な制約を設ける必要が出て来

ます。例えば、貪ってはならない、手を抜いてはならない、不正な手段を使ってはならないなどで、違反に対して罰則を設け、行政的な規制をし、最近では内部告発を制度化するなどの努力が重ねられております。しかしながら、これらの制約は外部的なもので、外側から人間を制約しようとするものですから、その効果に限界があります。現に私どもは、世界の各地域における巨大な企業の衝撃的な不祥事や、社会の各層各面で絶え間なく発生している様々な慢性的な不祥事に悩まされております。ところが、ロータリーのいう職業とは、他人のニーズを充たすためのものですから、他人のための職業であります。自分のための職業から他人のための職業への意識の転換こそが、職業倫理の第一歩というべきでしょう。他人のための職業であれば、自己のための職業に必要なであつた多くの制約の大部分が不要となるでしょう。他人のための職業とは、私どもの心の内面の制約に基づくものであるからです。

このように、職業奉仕は、ロータリアンの個人的な責務としての捉え方が出発点であります。しかし、クラブや地区も、職業奉仕の責務を負っております。一

九八九年の理事会の「職業奉仕に関する声明」に、そのことがはっきりと指摘されており。職業活動は、その会員の地域社会で行われるのが通常の形態でしょうが、それだけには限らないものです。他の地域社会や場合によっては国際社会における職業活動も十分あり得ます。クラブは、会員の職業に関する認識を高めたり、その実行に協力したり、他の団体との職業に関する共同プロジェクトや青少年、障害者、高齢者、受刑者などへの職業活動を企画実施したり、職業活動の広域化への情報を提供して実現を支援したりなど、多くのすべきことがあります。また、職業奉仕の範囲は、会員とクラブの創意によって無限に広がるものがあります。ロータリー・ボランティアとして、自己の才能や技術を、それらを必要としている世界の色々な地域に齎すことや、研究グループ交換などの多くの財団プログラムなども、職業奉仕を国際的に拡大する側面を備えています。さらに双子クラブも、ロータリアンの職業上の才能や技術による奉仕を、世界の他の地域に広める手段となるでしょう。

個人の絶対と倫理に背を向けた苛酷な競争は、社会と企業の秩序の破壊を限り

なく進行させています。これに対するロータリーの対応は、職業奉仕の価値を再構築することにあります。なぜならば、私たちは職業奉仕の自覚によって、個人の絶対の行き過ぎと競争偏重の非を自覚できるからであります。職業奉仕の努力は、人間の中からの自発的な力に訴えるところであるからであります。今日における人間社会の広範で深刻な非倫理化の潮流に対し、ロータリアンがとれる行動は、サービスと職業奉仕という大切な考え方の伝統を取り戻して、これを強調する以外にありません。職業奉仕は大変古典的な問題であります。同時に、人間社会が存在する限り永遠に日々新しい課題であることをしっかりと理解したいと思っております。

ポール・ハリスの父方の先祖はスコットランド系の移民で、母方の先祖はアイランド系の移民で、ともに清教徒であり、カルヴァン派のプロテスタントでありました。彼らが定住したニューイングランド地方の気風は、人間愛と友情を基本とし、家族や子供たちや仕事を大切にする素朴な生活を重んずるもので、幼年期からここで育ったポール・ハリスは、ロータリーにその気風の大部分をその血

肉として注ぎ込みました。ただ、そのような人間愛は、どちらかと言えば個人的な資質でありましたので、シエルドンは、これに社会的な裏付けを加えるためにサービスという考え方を再構築したものと思われます。ロータリーで愛や友情や他人への思いやりがしばしば重んぜられるのは、このような沿革に基づくものと思われます。いずれにせよ、私たちはこのような人間社会の底流に基礎を置くロータリーという組織に身を置くことができることに、心から感謝したいと思ひます。そして、ロータリーが、この地区の皆様のお一人おひとりの個人としての生活と社会におけるご活動にしっかりとした素晴らしい成果を結んでいただくことを心からご期待申し上げて、私のお話を終わらせていただきます。ご静聴有難うございました。

(二〇〇三年一月)

第三二回ロータリー・ゾーン研究会における招集者の挨拶

—二〇〇三〇四年度RIゾーン一、二、三、四(A)

国際ロータリーは、この百年間で正に驚異的な発展を遂げました。公共団体ならいざ知らず、奉仕団体が百年間も生命を持続し、その間、会員が四人から百二十万余に拡大したただけでなく、次の百年を目指してさらなる会員の増強と活動の充実をはかっているという実績は、歴史に特筆される奇跡であります。これを可能としましたのは、先ずはソフトの面であります。サービスと職業という人間社会基本の理念と構成要素にしっかりと立脚しながら、親睦と奉仕を絶妙に組み合わせた会員集団構築の工夫を現実のものとしたことであります。次はハードの面であります。極めて合理的な人の組織と資金の裏付けを確立しただけでなく、絶え間ないその更新発展を可能とする指導者の効果的な育成と強力な資金調達の方

法を開発したことによるものであります。本研究会の制度も、正にロータリーの発展に資するこのような極めて有効な適応手段の一つといふべきであります。

ところで、目下のロータリーは、激しく流動する人間社会の情勢に刻々と厳しい対応を迫られています。本研究会では、これに必要な課題を網羅的に呈示させていただきました。例えば、報告案件として、国際ロータリーとロータリー財団の近況、二〇〇五～〇六年度R I会長指名委員会、ポリオ撲滅募金キャンペーン日本委員会、ロータリー日本財団、国際問題研究のためのロータリー・センター、ロータリー米山記念奨学会、保健問題、退会防止と会員増強、ロータリー・クラブ新モデルの試験的プロジェクト、二〇〇四年関西国際大会、二〇〇四年シカゴ規定審議会、ロータリー百年史、ロータリー百年祭を取り上げております。また、解説及びワークショップの論題として、職業奉仕、長期計画を含むロータリーの未来のビジョン、ポリオ撲滅活動、識字と計算の能力向上を含む貧困の緩和問題、ロータリー家族、国際問題研究のためのロータリー・センターを取り上げております。

どうぞご出席のシニア・リーダーの皆様におかれましては、研究会の全期間を通じて、全ての課題に十分なご検討とご理解を賜りますことをお願い申し上げます。招集者の挨拶といたします。

(二〇〇三年一月)



感動と拍手につつまれた関西国際大会

— 四万六千人を迎えて大成功を収めた四日間の報告

ロータリーの創設九九周年にあたる二〇〇四年（平成一六年）の国際大会（関西）は、二〇〇四年五月二三日から大阪を中心とした関西地区で開催された。その具体的内容と経過は、次のとおりであった。なお、この国際大会は、RIでは大阪国際大会と呼ばれている。

一、会期と会場

大会の会期は、五月二三日（日）から二六日（水）までの四日間であった。なお、大会に先立ち五月二〇日（木）から二二日（土）まで、プレ・コンベンションとしての青少年交換役員会議（YEO）と、国際研究会が開催された。また、

大会は、大阪ドームと大阪国際会議場の全館と、リーガロイヤルホテルの三階を、それぞれ会場として借り切って行われた。大阪ドームでは、開会式と閉会式を含む本会議が行われた。大阪国際会議場では、大会の登録、諸会議、ワークショップと、国際研究会、YEOが行われた。リーガロイヤルホテルでは、友愛の家と各種展示が行われたほか、会長及び会長エレクトの執務室とスタッフの事務局が置かれた。

二、主催者

主催者は、ジョナサン・B・マジニアベRI会長と、RIのコンベンション委員会であった。委員会は、委員長が京都の千玄室元理事、副委員長が神戸の今井鎮雄元理事で、委員が韓国、ナイジェリア、フィリピン、米国から一人ずつ出た。また、アドバイザーがインド、オーストラリア、米国、日本から一人ずつ出た。日本のアドバイザーは、ホスト組織実行委員長の近藤雅臣パスト・ガバナーであった。

三、ホスト地区とホスト組織実行委員会

大会のホスト地区は、第二六六〇地区（大阪府北部）を中心として、第二六五〇地区（京都府、滋賀県、奈良県、福井県）、第二六四〇地区（大阪府南部、和歌山県）、第二六八〇地区（兵庫県）の四地区であった。また、ホスト側として具体的事項についてRIに全面的な協力を提供するホスト組織実行委員会は、実行委員長が近藤雅臣、事務総長が吉川謹司、財務長が井上暎夫の各パスト・ガバナードで、一五の部会と三つの委員会が置かれた。部会は、登録と受付、歓迎と案内、友愛の家と日本文化の紹介、青少年、交通と輸送、プログラム、アトラクション、設営と装飾、PRと報道、宿泊と観光とホーム・ホスピタリティ、翻訳と記録、医療、VIP接遇、プレ・コンベンションと国際研究会、協賛の一五が設けられ、委員会は、インターネット、危機管理、前夜祭と京都デー実行の三つが設けられ、それぞれに部会長、副部会長と委員長、副委員長が置かれた。なお、会場の整理や参加者の案内などは、板橋敏雄夫妻チーフSAAをはじめ、三九人のシニアSAAと約四〇〇人にのぼるボランティアSAAによって処理された。

四、登録費用と登録者数

ロータリアン夫妻（二人）は四〇〇ドル、ロータリアン一人は三〇〇ドル、ローターアクター、財団奨学生、財団学友は六〇ドル、インターアクター、青少年交換学生は二〇ドル、ゲストは一九歳以上が三〇〇ドルで、一九歳未満が二〇ドルであった。これは一月一五日までに登録した場合で、その後三月一五日までに登録した場合は、それぞれ四五〇ドル、三三五ドル、八〇ドル、三〇ドルと高くなり、当日登録分は、それぞれ五〇〇ドル、三五〇ドル、一〇〇ドル、四〇ドルとさらに高くなっていた。また、登録者総数は、一二か国から四五、五九五人で、百人以上の登録国は、わが国三五、四九一人、米国三、五六三人、韓国一、八五八人、台湾一、六一四人、フィリピン三四八人、カナダ二七四人、オーストラリア二〇四人、香港一八八人、インド一六四人、ナイジェリア一三七人、英国一二九人、バングラデシュ一〇八人などであった。なお、この登録者数は、一九七八年の第二回東京大会の三九、八三四人を抜き、過去最高の記録となった。

五、開会式（二三日一五時一五分～一八時）

アロージャズオーケストラ、木下伸市氏の津軽三味線、キム・ヨンジャ氏の歌唱、池宮正信氏とNYラグタイムオーケストラ、金剛流能楽演奏のあと、千玄室大会委員長の開会宣言と挨拶、大会プログラムの採択、太田房江大阪府知事と関淳一大阪市長の歓迎の辞、全ロータリー加盟国国旗の入場、日本とナイジェリアの国歌及び国際ロータリーの歌の斉唱、ジョンサン・B・マジリアベRI会長による元RI会長の紹介と開会のスピーチが行われた。千委員長は、「ロータリアンは、最も奉仕の精神を多く持っている善意の人々で、この地球上で苦しみ悲しんでいる不幸な人たちを愛する心と手と身体を持っている人たちである。」と指摘され、マジリアベ会長は「私どもが共有する四季には、国境がない。春の息吹、夏の暑さ、秋の美しさ、冬の寒さから、私どもは色々な教訓を得ることができ。四季には、ロータリーの教訓と挑戦が反映されている。」と述べられた。このあと、横沢和也氏の着物ショー、日本と世界を結ぶ音楽のオーケストラ、佐藤しのぶ氏のソプラノと市原多朗氏のテナーの各独唱があり、さらにインターナショナル

ルパーカッションとして、日本、アフリカ、ブラジルの各太鼓の素晴らしい演奏とその合同演奏が披露された。

六、本会議（二四日九時三〇分～一六時三〇分、二五日九時三〇分～一八時、二六日九時三〇分～一二時）

二四日の本会議の前には小林東雲氏の水墨画と和太鼓飛龍の演奏があり、二五日の本会議の前には日本車椅子ダンススポーツ連盟の車椅子ダンスとジャズバンドの演奏が披露され、二六日の本会議の前にはYBPストリングスと二胡の演奏があった。

(1)百周年プレゼンテーション

クリフォード・ダクターマン百周年記念運営委員長は、百周年記念行事に参加する具体的方法として、クラブの社会奉仕プロジェクトの完成、ツインクラブの設置、ボランティアア月間の計画、百周年に関する話し合い、展示、会員の増強と財団の寄付の二つの目標、ロータリーのイメージの高揚、諸行事への出席、シカ

ゴ大会への出席、祝賀方法の考案の一〇の方法を提案され、チャールズ・C・ケラー百周年ロータリー史委員長は、ロータリー百周年記念誌「奉仕の一世紀」国際ロータリーのお話」を披露されて、ともにロータリー百周年に向けてロータリーアンを動機づけて激励された。

(2) R I 会長及び R I 会長エレクトのご家族の紹介

(3) 現職と次期の理事とロータリー財団管理委員の紹介

(4) ロータリー国際理解と平和賞の贈呈式と受賞者のスピーチ

受賞者であるコリン・パリー氏は、英国ワリントンのショッピングセンターで一九九三年に敢行されたアイルランド共和党軍の爆弾攻撃で殺された一二歳の息子と三歳の男児を記念し、その名を冠した子供のためのザ・タイム・パリー・ジヨナサン・ボール・トラストを創設して、二〇〇〇年三月以来、紛争の解決を助長する技能と関係を発展させるための平和教育の援助に当たった人である。パリー氏は、「トラストの創設後、さらに七、〇〇〇人の子供が使用できるピースセンター」という施設を設立し、三歳から五歳、一〇歳から一一歳、一四歳から学生

の子供たちに学習や遊びを通じて平和の大切さを教え、ティム・パリー奨学金制度や、タイムキャラスカラシーという人間養成プログラムを実践しているが、共通点は、子供の時から非暴力の生活ができるよう適切な種を植え付けることである。」と話された。

(5)基調講演

ポール・ロジャース・ブラッドフォード大学平和研究学部教授は、「一九四五年から二〇〇〇年の間に一二〇もの戦争があり、一億人もの人が殺戮されたり、命を落とし、世界各地で手に負えない紛争と対立や、新たな形の係争が発生している。ロータリーは、緊急支援やポリオ・プラスなどの長期的援助と相互理解を推進するためのGSEや国際親善奨学生制度の充実に努力しているが、日本のロータリアンが多くの資金を注いでいる世界平和奨学生プログラムも、重要である。このプログラムは、将来への投資に寄与するというロータリーのビジョンを持った素晴らしいプログラムである。」と指摘され、ジョナサン・B・マジリアベRI会長は、「総額約二七万ドルに及ぶ女性と児童の教育のためのアデ希望基

金への寄付に感謝し、ロータリー家族が非常に多くの愛で満たされていて、その愛は世界全体を一つに包むものである。」と指摘され、ジェームス・レイシー・ロータリー財団管理委員長は、「子供たちこそ私どもの将来である。すべての子供たちに、自分たちの能力を発揮でき、空腹を感じずに眠りにつけ、医薬品を得ることができ、読み書きができ、身を置く場や身を包む暖かい服があり、靴を履いていて、心に掛けてくれる大人の愛を知ることができ、恐怖や絶望を知らずに快適な生活が与えられる希望を持つていけるような世界を与えよう。夢に従うことがいかに苦しかろうとも、世界がよくなるように世界中のロータリアンが全力で勇気を出せば、必ず実現できる。」と指摘され、緒方貞子アフガニスタン支援首相特別代表、元ロータリー奨学生は、「只今の世界では、グローバルな連帯があつて初めて政治的な意思を動かし、すべての安全保障を促すことができる。従つて、開発支援が成功してこそ人道支援も効果を挙げることができる。そのためには、人々の能力を開発する教育が非常に大切である。特に、各レベルでの連結の大切さを踏まえ、社会、政治、経済、または開発に関連する機関を活用してい

かなければならない。」と指摘され、グレン・E・エステスRII会長エレクトは、「ビチャイ元会長とジョンサン会長と私とは、友愛、奉仕、世界貢献の深遠で結び付いている。ロータリー家族、保健医療、識字率強化を引き継ぎ、これに水管理を加える。また、百周年のゴールを目指し、ポリオの撲滅、会員の増強と特に退会防止、財団寄付に努める。毎日のシンプルな行動と高い倫理的規律こそが奉仕の本質である。歴史的転換の時、百周年の場にいられることを大変誇りに思う。」と述べられた。

(6) 講演

サプー元会長夫人のウシャ・サプーさんは、「私は、ロータリーのボランテイアとして、アフリカやカンボジアで働いた。私たちは、技術はなく言葉はなくても、心を差し伸べることができる。耳を澄まし愛情を持てば、必ず心が伝わる。私たちは、よい世界を作るためこの世に生まれてきた。私たちは世界に必要とされている。」と述べられ、ヴィクトリア・イシラメン元親善奨学生、国連ユニセフの職員は、「私は、ロータリアンのおかげで国際親善奨学生となり、ホストフ

アメリカやカウンセラーの方々のおかげで素晴らしい日々を過ごすことができた。これらの人々のホスピタリティと慈愛の種を播く心によってユニセフの職員となり、自然保護と参加の委員となってナイジェリアのカドゥナに行き、子供や女性を保護する法律を作り、エイズ検査の参加活動に従事した。そして、社会のすべての階層の人々と交流したが、すべての人が愛情と思いやりを持っていることが分かった。RIとロータリー財団は、賞賛すべき指導力を持ち、世界中の人々に慈愛の種を播き、手を貸しているということである。」と説かれ、中田武仁国連ボランティア名誉大使は、「私の息子で元国際親善奨学生の中田厚仁は、一九九三年国連ボランティアとしてカンボジアで奉仕活動に従事中に殺害された。この地球上に住むすべての人々には、人間としての尊厳を持って豊かに健康やかに生きる権利があるが、その権利を暴力によって奪われようとした時に、たった一つのかけがえのない自分の生命を捧げてこれを守ろうとした一人のよき世界市民がいた。その市民をロータリーが啓発し育てたということを、誇らしく心に留めてほしい。」と述べられた。

(7) 討論ワークショップ (大阪国際会議場、一番目は議長、他はパネリスト、以下同じ)

テーマ関連議題として、次期クラブ会長の職責 (ジョン・F・ジャーム R I 理事、上野孝指導力開発および研修委員、キエール・アケ・アケツソン二〇〇四年 R I 研修リーダー、マイケル・ウェブ同リーダー)、小口融資 (ジヨスリン・ボランテ・ロータリー家族への心づかい奨励グループ・コーディネーター、ラクハ・シェティー失明救済顧問、ウイリアム・B・P・キャドワランダー・ジュニア識字および教育推進グループ・コーディネーター、ネルソン・カワルヤ R I 会員組織コーディネーター)、高齢者への奉仕 (ローレンス・マルゴリス・ロータリー家族コーディネーター、サミュエル・A・オクゼト R I 理事、ブランチエ・スローン二〇〇四年大阪大会委員、中島治一郎監査運営副委員長)、保健問題 / 失明救済 (グラント・ウイルキンス保健問題対応グループ・コーディネーター、ケネス・E・コリンズ大阪大会委員会顧問、アユハン・オズデミール保健問題対応グループ・コーディネーター、ユスフ・コドワヴワラ・ロータリー家族へ

の心づかい奨励グループ・コーディネーター)、日本語討論(神崎正陳・パスト・ガバナー、加納泉(同)、田巻明男(同))、標準中国語(ミクロ・S・C・リン・パスト・ガバナー、ジュニファー・メイ・ジェン・チャン(同)、ガンボ・イ・シエン・カン(同)、トニー・マウン・ジェン・チェン(同))

財団関連議題として、ポリオ・プラス(ウイリアム・T・サージェント・ポリオ・プラス国際委員長、アンブロイズ・チムバランガ・カソング・アフリカ地域ポリオ・プラス委員長、アデデヒン・E・アデフェソ・ポリオ・プラス・ナイジエリア委員長、M・K・パンドウランガ・セテイ南アジア地域ポリオ・プラス副委員長)、人道的補助金プログラム(ジョン・ケニー・ロータリー財団管理委員、ノラセス・パトマナンドRI理事ノミニー、オットー・アウステル・パスト・ガバナー、キャロリン・シューツ(同)、黒田正宏会員組織コーディネーター、ウイルフリド・J・ウイルキンソン二〇〇五年シカゴ大会委員長)、識字率向上および教育(P・C・トーマス識字および教育推進グループ・コーディネーター補佐、ステイブ・R・ブラウン識字および教育推進グループ・コーディネーター

ー、ロバート・A・スチュアート・ジュニア・ロータリー財団地域コーディネーター、オルシリック・バルカン識字および教育推進グループ・コーディネーター)、教育プログラム(レイ・クリンギンスミス・ロータリー財団管理委員、ヴィクトリア・イシラメン国際親善奨学生学友、ポール・ロジャース・ブラッドフォード大学国際問題研究のためのロータリー・センター元所長、G・ケネス・モーガン R I理事エレクト、マイケル・アブラ・パスト・ガバナー)、日本語(岩井敏パスト・ガバナー、亀岡弘(同)、宮崎茂和(同)、中山義之(同)、標準中国語(グリーンナー・M・H・ハン・パスト・ガバナー、ライト・チャン・シェン・ライ(同)、カーボン・シュエーリエン・ホン(同)、ミラー・シェン・チェン・チャン(同))

(8)ロータリー財団年次プログラム基金目標の発表

カルロ・ラビツァ・ロータリー財団副委員長から、年次寄付一億ドルの目標を達成するため、「毎年あなたも百ドルを」Every Rotarian, Every Yearの目標を達成するよう、要請がされた。

(9) ローターリー財団最新情報の提供

ジェームス・レイシー・ロータリー財団管理委員長を議長とし、カルロ・ラヴェッツァ・ロータリー財団管理副委員長、レイ・クリンギンスミス、ルイス・ピンセント・ジアイ両ロータリー財団管理委員をパネリストとするパネルディスカッションを通じて、ロータリー財団に関する最新情報が提供された。

(10) 事務総長と財務長による報告

エド・フタ事務総長から国際ロータリーの事務処理全般について、ジェンナーロ・カルディナーレ財務長から国際ロータリーの財務状況について、それぞれ報告がされた。

(11) ローターアクト・プロジェクトの発表

マジイアベRI会長とレイシー・ロータリー財団管理委員長は、六つの地域の六つのローターアクト・クラブのプロジェクトに地域賞を与えることを発表された。マンティンパ・ピースメーカー（フィリピン）、アジア太平洋）、アビジャン（コートジボアール、アフリカ）、バアーサ・オスマンガジイ（トルコ、ヨー

ロッパ)、エル・プログレッソ(ホンデユラス、ラテンアメリカ)、イン・バードラ(インド、南アジア)、シカゴ(米国、米国・カナダ及びカリブ海)の六つのローターアクト・クラブで、違法薬物乱用反対の教育、エイズ孤児の救済、視覚障害学生の援助、手術後の低所得者患者の社会復帰の支援、巡礼者の無料手荷物預かり所の提供、医療供給品の病院必着の努力の六つが、対象プロジェクトであった。

(12)理事ノミニー、ガバナー・ノミニーの選挙

あらかじめ理事ノミニーとガバナー・ノミニーに指名された候補者が、正式に理事ノミニーとガバナー・ノミニーとして選挙された。

(13)RI会長ノミニーの選挙

あらかじめRI会長ノミニーとして指名されたスウェーデンのゲートボルグ・ロータリー・クラブのカール・ヴィルヘルム・ステンハマー氏が、二〇〇五〇六年度のRI会長ノミニーとして正式に選挙され、同氏は、「二〇〇五〇六年は新たな世紀の始まりである。ロータリーには、持続性が重要で、私はエステス

氏の方針を引き継いで行く。また、国連やその機関と共に活動する方針も継続する。指名を受けて感激している。ロータリーの会長として働くことは、素晴らしいことである。」と述べて、指名を受諾された。

七、閉会式（二六日一九時三〇分～二二時三〇分）

冒頭マジアベRI会長から千大会委員長と近藤実行委員長はじめ実行委員会の表彰があり、これを受けて千大会委員長と近藤実行委員長の受賞挨拶があった。さらに、大会中における実行委員会の活動の映像による紹介があった後、本大会の棹尾を飾る素晴らしいエンターテインメントが提供された。関西フィルハーモニーの「新世界より」、東儀秀樹氏の雅楽、新垣勉・島田歌穂両氏の歌唱とデュエット、東儀秀樹氏のライブの後、桜の花びらが激しく天井から舞い降りる中、「さくらさくら」と日本のロータリーアンセム「手に手つないで」が演奏され、四日にわたる大会のダイジェスト・ビデオの映像の放映と、参加者全員の「蛍の光」の大合唱の後、最後にマジアベ会長の「大会のモチーフは春、日本の春は

桜、桜の花の下では誰もが見知らぬ人はなく、皆友人である。我々は何よりも人々が互いに尊敬し合って生きて行く平和な世界を求めるとのジョン・F・ケネディの言葉、夢の美しさを信じる人にだけ将来があるというエレノア・ルーズベルトの言葉に、心を打たれる。今こそ新しいひらめきの時であり、何事も可能な生まれ変わりの時期である。世界を驚きと喜びを持って見つめよう。それでは、皆様、それぞれの国に気を付けてお帰り下さい。」との閉会の辞をもって、四日間の大会の幕が閉じられた。

八、大会関連公式行事

(1) 役員来日歓迎晩餐会 (Welcome to Japan Dinner 二二日一八時～二二時)

RI会長、会長エレクトははじめ理事夫妻全員が来日される機会に日本流の歓迎会を持ちたいと考え、田中作次理事と小生夫妻が、リーガロイヤルホテル二階ダイヤモンドルームに、マジニアべ会長、エステス会長エレクトはじめ現理事夫妻全員、エド・フタ事務総長とスタッフのうち大変お世話になったアリス・ペー

ラー、ベティ・ロザンスキー、通訳の寺尾栄子の三氏をご招待した。「男女七歳にして席を同じうせず」の日本の古い社会の規律に従い男女別の席とし、小生の司会のもとに会は進行した。マジリアベ会長の挨拶、田中理事の英語による乾杯の後、全員楽しく車海老の天ぷらと神戸牛のしゃぶしゃぶを中心としたホテルシエフご苦心の日本料理を賞味し、京都上七軒お茶屋「中里」のおかあさん引率の三人の舞妓さんの踊りと接待を受けつつ、三時間にわたる晩餐を楽しんでいた。最後にエステス会長エレクトの閉会の辞で終了した。なお、南園義一理事エレクトご夫妻は、同日同時刻に、大阪市中央区のオ・セイリュウに同期の理事エレクト夫妻全員を招待して、歓を尽くされた。

(2) 全宗教合同礼拝 (二三日一〇時～一一時、大阪国際会議場五階メインホール)
ジョン・マイケル・ピンソン R I 理事を議長とし、テヨティマ・パスマナンド (理事ノミニニーの配偶者、仏教)、フレデリック・W・ハーン・ジュニア (ポリオ・プラス・パートナー・グループ委員長補佐、キリスト教)、ビノタ・バネルジー (ロータリー財団管理委員の配偶者、ヒンズー教)、アブドゥルラーマン・

オラドウンジ・フンシヨ（識字および教育推進グループ・コーディネーター、イ
スラム教）、イリーネ・ルーウィット（パスト・ガバナー、ユダヤ教）を各朗読
者として礼拝が行われ、さらに、元理事及び管理委員（フランク・C・コリン
ズ・ジュニアRI理事）、パスト・ガバナー（デイビッド・D・モーガンRI理
事）、元役員の配偶者（ゲイ・ブラックバーン・マロニーRI会長補佐の配偶者）
の各メモリアルが行われた。

(3) RI会長歓迎晩餐会（二三日一九時～二一時一五分、帝国ホテル大阪、前夜祭）
千玄室大会委員長と近藤雅臣実行委員長は、内外のRIの現役員及び元役員約
二〇〇人参加のもとに、RI会長歓迎晩餐会を開催された。冒頭、西川流日本舞
踊家西川としみ氏（大阪フレンド・ロータリー・クラブ会員）の日本舞踊「高砂」
と、「藤娘」の一部である「藤音頭」の演技があり、次いでわが国が世界に誇る
四歳児から十四歳まで九人の子供のマリンバ・アンサンブル、マリンバ・ポニー
ズの素晴らしい演奏があった。マリンバ・ポニーズは、「世界の子供たちに愛と
夢を」「美しい音楽で、美しい心を」の理念のもとで設立され、そのリズムミカル

で明るく美しい音楽は世界中で愛され、ニューヨーク・カーネギーホール、アポロ・シアター、ウイーン・ムジークフェライン大ホール等で大喝采を得、音楽教育振興賞、国際育児賞、外務大臣賞等を受賞している。子供のための組曲「付けし」のギャロップ他七曲の素晴らしい演奏は、参加者に深い感銘を与え、万雷の拍手をもって讃えられた。晩餐会は、吉川事務総長の開会の辞、千委員長とマジイアベ会長の挨拶の後、フタ事務総長の乾杯の発声により始まり、最後に、近藤実行委員長の閉会の辞によって終了した。

(4)昼食会(一三時～一四時三〇分、大阪国際会議場三階イベントホール)

ポール・ハリス・フェロー(二三日)、会長主催表彰(二四日)、会長エレクト主催リーダーシップ(二五日)、RI元役員及び配偶者同窓(二六日)の各昼食会が開催された。

(5)ロータリー財団次期クラブ会長レセプション(二四日一六時三〇分～一七時三〇分、大阪国際会議場三階イベントホール)

(6)第一一回メジャー・ドナー晩餐会(二四日一九時～二一時三〇分、ホテル・ニ

ユーオータニ大阪

(7) ローターリー財団学友セミナーとレセプション (二二日一五時～一七時、大阪国際会議場)

(8) 遺贈友の会レセプション (二二日一七時三〇分～一八時三〇分、大阪国際会議場)

(9) 百年史サイン会 (二四日一五時～一六時三〇分、大阪国際会議場一階プラザ)

九、友愛の家

友愛の家は、国際理解と親善のための交流の場として、国際大会において、極めて重要な地位を占めるものであるが、大会の友愛の家の概要は次のようなもので、終始内外多数の出席者で充ちあふれる盛況であった。

(1) 物販ブース (リーガロイヤルホテル三階)

免許業者のブースのほか、書道作品、骨髄バンク、和紙の手作り製品、陶器、各種グッズ、真珠製品、宝石類、携帯電話、漆器、観光、和菓子、外国人向け土

産品、ブランド衣料品、小物、手拭いなどのブースが設けられていた。

(2) 展示ブース（リーガロイヤルホテル二階）

フェローシップの展示として、スキー、野鳥観察、環境、旅行案内、ロータリー誌のインターネット化計画、多発性硬化症への意識向上、エイズ撲滅、マラソン及びフィットネス、ボーイ（ガール）スカウト活動、エスペラント語、眼科医、カーリング、獣医学、ロータリーの歴史と伝統、人口及び開発問題、飛行ロータリアン、インターネット・コンピュータ・ユーザー、アマチュア無線、旅行と歓待、ヨット、切手収集、ジェネラル・ブース、フラワーデザイナー、音楽、囲碁とブリッジゲームなどがあつた。また、クラブ及び地区の展示としては、家族計画、健康とエイズ教育、インナーホイル、子供の養育と救済、双子クラブと子供の絵画、島のファミリー、着物と伝統文化、エイズ・ウェブ、RI二六六〇地区GSE、リーダーシップ・フェロー、犬ぞりレース、ローターアクト・イン・ジャパン、三四五〇地区百周年大会、シングルマザーのための小口融資、太陽熱調理器、テンブル太陽熱、日本熊保存のための再造林化、マッチメーカー、シエ

ルターボックス、太陽熱利用の補聴器、生活ギフト、R.M.O.C.—すべての子供たちを癒そう、国際ロータプラスト、三二〇〇地区のIDEA活動、シヨートストーリー・オブ・ライフ、ザ・プラス・パーキンソン患者のためのプログラム、ロス・アルトスRCのエイズプロジェクト、マインシーカー財団、二五八〇地区のカンボジアにおける土壤改良、地雷援助、ポリオ撲滅キャンペーン・鉄の肺などがあつた。そのほか、ロータリー財団、ロータリー・センター、米山記念奨学会、百周年記念事業、シカゴ大会プロモーション、マルモ／コペンハーゲン大会プロモーション、国連人口基金、公式大会写真展などのブースも設けられた。

(3) 飲食コーナー

裏千家第一五代家元である千委員長のご配慮により大会期間中リーガロイヤルホテル一階メインロビーで英語通訳付きの伝統的な日本の呈茶席が設けられたほか、同ホテル三階には、食いだおれ大阪を象徴する多様多彩な飲食コーナーが設けられ、大変な繁盛ぶりであつた。

(4) イベントコーナー（リーガロイヤルホテル三階と国際会議場一階プラザ）

イベントコーナーでは、世界のロータリアンとの触れ合いと友好を目的に、先ず日本の伝統芸能文化に親しんでいただき、次いで、同僚ロータリアンのウエルカム・ステージを楽しんでいただき、さらに財団学友の皆様の演奏を楽しむ目的で開催された。

ヘリーガロイヤルホテル三階のステージへ

一般の演奏として、グループ心音の琴、大阪伝統芸能の大阪八景、鶯声吟詠会の吟詠、一絃須磨琴保存会の一絃琴、藤野カヨ氏のソプラノ、装道きもの学院と成安造形大学合同出演「帯で結び造る花の世界」着物ショー、ポリオ撲滅寸劇、宮津踊り、観世流宗家観世清和氏の能楽、西川流西川充氏の日本舞踊、江州音頭、京舞、大蔵流茂山狂言会の狂言、桐竹勘十郎氏ほかの文楽、韓国舞踊とサムルノリ、姜丹鳳氏による中国と日本の歌唱、正調串本節による串本節、権兵衛太鼓、クリステイー・カズヨ氏とフロッグハウスのジャズ演奏、内藤栄子氏と飛弾峰代氏カルテットのシャンソン、SONG-AID JADE (ジェイド) の歌などが演奏された。また、財団学友の演奏として、井上光代氏のピアノ・ボーカル、石田美紀子

氏と田中やす子氏のビオラとピアノのデュエット、井播万友美氏のチェンバロ、高木美保子氏と坂本千尋氏のピアノデュオ、川中紀子氏のピアノ、佐々由佳里氏のピアノ、岸・西村・余田各氏のソプラノ・バイオリン・ピアノ、古山浩也氏のテノールとピアノ、中川知保氏のピアノ、上野順子氏のピアノ、渡邊美智子氏のソプラノなどが演奏された。

〈大阪国際会議場一階プラザのステージ〉

吹奏楽、ジャズ、ジュニアダンス、チャリデーイングなど若者や学生の躍動感溢れるパワフルでエネルギーギッシュな演技が、世界のロータリアンと交流したステージである。ガールズ・バンド「HONEY SAC」のライブ、「リトルキャット」のジュニアダンス、関西大学吹奏学部のたそがれコンサート、和太鼓集団「広陵金明太鼓」、神戸華僑総会舞獅隊の獅子舞、「Jazz」のジャズ、「COMBIGBAND Osaka」のジャズ・ビッグバンド、阿波踊り振興協会の阿波踊り、彦根鉄砲隊の彦根城武者行列、伊賀流忍者集団・黒党の忍者ショー、赤穂美紀氏とDiez Puntos のラテンポーカー、大阪経済大学吹奏学部のたそがれコンサートと

ブラスバンド・パレード、ザ・ベリーグッドマンズのロータリアンバンド、箕面自由学園高校 Golden Bears のチアリーディングなどが披露された。

一〇、ホスト・ホスピタリティ

ホスト組織実行委員会は、大会期間中に、次の五つの催し物を企画して参加者に提供した。

(1) 京都デー（二二日八時～二三時）

二、〇〇〇人に及ぶ内外のロータリアンが、一二〇〇年の古都京都の風雅と文化を、一日コース、半日コース、観光なしコースなどバスで有名社寺や名所旧跡を巡り、夕景から明治時代の代表的な日本庭園である平安神宮庭園で舞妓さんとの撮影や呈茶など雅をテーマとしたもてなしを受けた後、ステージでの日本芸能観賞のほか京都の舞妓や芸妓総揚げの接待を受けて、都メッセの懇親会を楽しんだ。

(2) ウェルカム・コンサート（二二日一六時～二〇時）

NHK大阪ホールで、一六時から一七時三〇分まで司葉子氏のポリオ・ドネーションのプレ・イベントと同志社女子大学名誉教授有賀のゆり氏によるチェンバロ演奏の後、一八時から二〇時までNHK交響楽団の演奏があった。指揮はユツカ・ペッカ・サラステ、ピアノはオリ・ムストネン、曲目はストラヴィンスキーのピアノと管楽器のための協奏曲とカプリッツィオ、チャイコフスキーの交響曲第四番へ短調作品三六。一、一〇〇人を超える出席者は、日本の音楽文化のレベルの高さに口々の称賛を惜しまなかったし、また、この音楽会の模様は、同日のNHKニュースの中で大きく報道された。

(3)道頓堀ナイト(二四日一七時～二一時)

大阪ミナミの湊町リバープレイスで、大阪の食を屋台で提供し、大阪の祭りやパフォーマンスをステージで提供し、大阪を体感して好きになってもらうイベントとして開催された。阿波踊りと、マジリアベRI会長と近藤委員長の挨拶、鏡開き、千委員長の乾杯の後、和楽器(琴・三味線・笛・太鼓の演奏)、武者行列と鉄砲隊、五月家―若社中、ひまわりの会、伊賀流忍者・黒党、ESCOLA DE

SAMBATIMEの催物を楽しみ、吉川事務総長の閉会の辞で終了したが、約五、〇〇〇人の内外ロータリアンの出席者は、たこ焼き、お好み焼き、焼きそば、サンドウィッチ、柿の葉ずし、昆布、あられ、かき氷、きつねうどん、いなり寿司、中華点心、わらびもち、串焼きなど有名ブランド品に舌鼓みを打ちながら、大阪の夜を身近に満喫して、国際交流の実を実感していた。

(4)神戸ナイトクルーズ(二四日一八時～二二時)

八〇〇人に近い内外のロータリアンがクルーズ船「ルミナス神戸二」に乗船して大阪港天保山を出発し、夜景を楽しみながら世界最長の明石海峡大橋から神戸港中突堤に到着。船内五会場とメリケン波止場で鏡開き、矢田神戸市長歓迎あいさつ、神戸消防音楽隊、太鼓隊、バンドの演奏などを交えて交流を楽しみ、神戸チーズや神戸ワイン、神戸ビーフなどを賞味して、神戸の夜を楽しみ、バス一四台を連ねて大阪に帰着した。

(5)パーク・フェスタ(二五日一七時～二一時)

三、七〇〇人を超える内外のロータリアンが、ユニバーサル・スタジオ・ジャ

パンを九七台の貸切バスで訪れ、食事をとりながら各種イベント、特に三回にわたるウォーターワールドの特別貸切ショーを楽しみ、夜の更けるのを忘れた。

一、大会関連非公式行事

ノースランド、アジアン・パシフィック、サウスランド、オール・アフリカ、ハート・オブ・アメリカ、南アジア、ノーディック、ロータリー・リーダーシップ研究会年次大会の各朝食会、一九九一〜九二年度、一九九五〜九七年度、二〇〇〇〜〇一年度の各元R I役員同窓会、ロータリー親睦AGM、エイズとの闘い、飛行、国際旅行及び宿泊、ヨット、人口問題および開発、人道的奉仕のための資源、多発性硬化症の各フェローシップの会合、ゾーン二二ノーザンライト、第五九六〇地区、第二七七〇地区、第七九五〇地区、ハムデン・ロータリー、二一世紀ガバナー、大阪天満橋ロータリー・クラブの各レセプション、王者の鷺同窓会、日本ロータリーアクト会議、台中ロータリー・ティーパーティーなどが開催された。

一二、観光

観光は、主として海外のロータリアンを対象として、英語によるオプションツアーとプレ・ポストツアーとが企画された。

(1) オプションツアーは、料理、黒門市場ショッピング、大阪港エリア、京都の歴史、高野山の仏閣、奈良の仏閣、飛鳥ハイキング、産業ツアー、忍者ツアー、比叡の歴史ロマンス、大阪南部、兵庫の昔と今、古代と現代の工芸、鳴門、着物の着付け、日本文化、神戸、和歌山、和歌山産業ツアー、能楽、国宝姫路城の二行程であった。

(2) プレ・ポストツアーは、金沢と福井三泊四日、京都と広島二泊三日、東京と横浜三泊四日、京都と奈良二泊三日の四行程であった。

一三、青少年関係行事

青少年関係行事は、青少年交換役員会議 (YEO) とロータリー青少年指導者養成プログラム (RYLA)、ローターアクトの三つであるが、そのうち、YE

Oだけがプレ・コンベンションとして企画され、他は大会中のワークショップとして企画された。

(1) Y E O

大阪国際会議場において、五月二〇日から二二日までの間、世界中から五四〇人に及ぶ青少年交換指導者の参加を得て開催された。

二〇日には全日本ROTEX会議、リーダー打合せ会、出席者歓迎レセプションが行われ、翌二一日には開会式に引き続き二二日にかけて一三のワークショップが開催された。基本原則、学生ビザ、年齢制限、年次報告、カウンセラーの教育、ホスト・ペアレンツの教育、新世代交換、良き先輩指導者（ROTEX）、学生保険、オリエンテーション、クラブへの浸透、リスク・マネジメントと法的責任、虐待への対処である。この間、二一日夕には公式晩餐会が開催され、翌二二日には閉会式のうち京都アフタヌーンツアーが持たれた。

また、大会中、二四日一四時から一六時三〇分の間、YEOの危機管理に関する討論ワークショップ（議長／コンスタント・A・G・M・テンペラーSR I理

事、パネリスト／ジョン・ウェットティング・セントラル・ステイツ青少年交換他
地区委員長、ジョン・ウエイクフィールドRI青少年交換委員長、クリス・グー
ルド英国ア・ボン&ソマーセット警察指導監督主任）が行われた。

(2) RYLA 討論ワークショップ

二四日、大阪国際会議場において、RYLA 討論ワークショップ（議長／フリ
オ・ソルジュスRYLA 委員会副委員長、パネリスト／米谷収RYLA 委員会委
員、ジョン・G・ソーンRI 理事、アーピング・J・「サニー」・ブラウン・ロ
ーター財団管理委員）が行われた。

(3) ローターアクト・ワークショップ

国際会議場において、二五日一五時から一八時の間に、ローターアクト・ワー
クショップ（議長／ブライアン・ストイエルRIBI 会長、パネリスト／ステフ
アノ・メレンダ・ローターアクト、ジェリー・W・フランクリン識字および教
育推進グループ・コーディネーター、岩津陽介大阪大会ローターアクト委員長、
西田昌弘大阪北ローターアクト）が行われた。

一四、国際研究会

国際研究会は、二〇日から二二日までの間、大阪国際会議場で開催された。開会、閉会の本会議とその間四回の本会議が開催され、議長小谷隆一元理事の開会の辞に始まり、マジニアベRI会長の「手を貸そう」、エステスRI会長エレクトの「創立百周年の見識」という各講話、レイシー・ロータリー財団管理委員長らの財団に関する講演、ステンハマーRI会長ノミニーの「ロータリーの百周年を超えて」との講話があり、それぞれ出席者との公開討論フォーラムが行われた。また、長期計画の概要・進捗及び討論に関するパネル討論（モデレーター／伊藤義郎長期計画委員会委員、パネリスト／クリフォード・ダクターマン元RI会長、ビル・ハントレー元RI会長、フリオ・ソルフスRYLA副委員長）が行われたほか、一〇回にわたるグループ討論が行われた。「手を貸そう―成功活動例」（ドナルド・ディーン・ウォーカー国際研究会委員、デビッド・グローナー・パス・ト・ガバナー、カリン・ジークラー・ガバナー・ノミニー）、「ロータリーの精神―ロータリアンであることはどういうことか、何を意味するか」（ノエル・A・

バジャト国際研究会委員、ジエームス・フランシス・ブラッドショー・パスト・ガバナー、ゲイリー・C・K・ホアンR I元理事)、「規定審議会の議題」(ジョージ・J・マール三世国際研究会委員、ウイリアム・T・サージェント国際ポリオ・プラス委員長、ブランチェ・スローンR I二〇〇四年大阪大会委員)、「職業奉仕」(アルフレッド・J・スラガート国際研究会委員、チャールズ・E・クレモンズ・パスト・ガバナー、ルビー・T・イワマサ・ガバナー・エレクト)、「標号を見直そう(日本語による)」(橋本讓国際研究会委員、深川純一、宮崎茂和、岡本徳彌各パスト・ガバナー)、「ロータリーの活力回復―前進(ブラウリオ・ザバラ・ナバレッテ国際研究会委員、カルロ・モンテイチェリ百周年記念運営委員、キヤロル・ワイリー年次プログラム基金推進顧問)、「会員増強退会防止グループ―成功活動例」(ミルトン・L・アイオシー国際研究会委員、F・ロナルド・デナムR I会員組織コーディネーター、G・ケネス・モーガンR I理事エレクト)、「ロータリー・クラブの新モデル試験的プロジェクト/サイバークラブ―その進捗状況」(板橋敏雄R I元理事、エディー・ブレンダー新モデル参加国代表者、

クリス・ジョセリ・ロータリー・E・クラブ・オンライン会長エレクト、アレキサンダー・マック・ガバナー・エレクト)、「職業における倫理」(アートウロ・ガルザ・ウリベ国際研究会委員、ウイリアム・B・ボイド二〇〇四年国際研究会モデレーター、フランク・ゴールドバーグRI理事ノミニ)、ロータリーの精神及びロータリー世界平和奨学生(日本語による) (渡辺好政国際研究会委員、岩井敏、成川守彦各パスト・ガバナー)であった(一番目はディスカッション・リーダー、他はリソース・パネリスト)。なお、住友信託銀行社長高橋温氏は、「アジアの経済と日本の経済―日本における職業倫理」との日本語による講演を行われた。

一五、総括

一一二か国から四五、五九五人の参加が、大会の規模が過去最大であったことを誇示しただけではない。大会は、単なる日本の文化と社会を強調したものであっただけでなく、その基礎に、多様多彩でありながら一貫した深い本格的な文化

的訓練の、いわば真の意味におけるグローバルな多年にわたる実績がしつかりと積み重ねられていたことを証明したのである。このことは、大会自体のみならず、青少年関係諸行事、国際研究会、各ワークショップ、公式非公式の関連諸行事、各種エンターテインメント、友愛の家のステージ、ホスト・ホスピタリテイの諸行事、各種観光ツアーを通じて、十二分に実証された。参加した多くの外国のロータリアンたちが、「感動した。これからは、もつと日本のロータリアンの発言に注意深く耳を傾けなければならない。」と率直に語っていた事実は、大会の質的成功を物語って余りあるものである。さらに、大会の成功は、今後の国際ロータリーに、幾多の重要で基本的な情報を発信したことを確信して、大会の総括とする。

(二〇〇四年六月)

二〇〇三～〇四年度RI現況報告

会長ジョナサン・B・マジニア氏は、ナイジェリアの弁護士である。会長エレクト・グレン・E・エステス氏は、米国アラバマ州の販売コンサルタント会社の経営者である。会長ノミニ・ステンハマー氏は、スウェーデンの国際的な食品ブローカーである。直前会長ビチャイ・ラタクル氏と現会長のマジニア氏によって、ロータリーがサービスの原点に立ち戻ったとされていることは、よくご承知のとおりである。この路線は、エステス会長エレクトによって確実に踏襲されると思われる。

理事の数は、合計一七人である。米国から六人、日本から田中作次氏と小生の二人、英国、イタリア、カナダ、オランダ、ガーナ、インド、ブラジル、アイスランド、オーストラリアから各一人で、そのうち副会長が米国のフランク・C・

コリンズ氏、財務長がイタリアのジェンナーロ・M・カルディナーレ氏である。この一七人の理事に、会長と会長エレクトが加わった合計一九人で、理事会が構成されている。事務総長は、米国のエドウィン・フタ氏である。

二〇〇三年六月末現在、全世界のロータリアンの総数は一二二万七、五四五人、クラブ数は三万一、五六一、地区数は五二九、加盟国数は一六六と四〇の地理的地域である。前年度に比して、クラブ数は三〇五増加し、会員数は九、八八六人減少した。なお、女性会員数は全世界で一三万人、女性のクラブ会長は二、〇〇〇人である。わが国では、二〇〇三年八月末現在で、クラブ数は二、三三三、会員数は一〇万七、一七九人となっている。二〇〇二年六月末に比して、クラブ数で八、会員数で四、四六〇人それぞれ減少した。

エバンストンの世界本部には、ロータリー財団を含め約四〇〇人の職員が勤務している。ブラジル、スイス（ヨーロッパとアフリカ）、日本、韓国、インド（南アジア）、アルゼンチン（南アメリカ）、オーストラリア（南西太平洋）の七か所に事務局が置かれ、合計約一〇〇人の職員が勤務している。最近の財政事情

から合理化のため、若干人数が減っている。また、アフリカの事務局の新設が、検討されている。

二〇〇二～〇三年度の R I の財政状況は、総収入が六、〇四六万ドル、総支出が六、二二〇万ドルであった。総資産は一億一、三三〇万ドルだが、総負債二、六七〇万ドルを差し引いた純資産は八、六五〇万ドルである。前年度に比して、収入は四一〇万ドル上回り、支出は一一〇万ドル下回り、総資産は四六〇万ドル減少した。

ご承知のとおり、マジイアベ会長の本年度は、R I のテーマ「手を貸そう」と、ロータリー家族、貧困の軽減、保健、識字と教育の四つの会長の強調事項を中心に運営された。さらに、ロータリー百年祭に向けての取り組みのほか、ポリオ撲滅活動、国際問題研究のためのロータリー・センター、サービスと職業奉仕への原点回帰、R I 長期計画の策定、双子クラブと世界社会奉仕、人口問題、青少年問題などが、当面の課題として論議の対象に取り上げられた。

会長主催会議は、R I 会長が自分の構想を世界中のロータリアンに伝達するた

めの総合的なプログラムの一部であるが、マジイアベ会長は、R I及び地元の負担の軽減と、的確な効果の実現を意図され、本年度は、テーマを定めて一日で終了する祝賀会議の形式を取られた。総数は一五で、カナダ、メキシコ、南アフリカ、ナイジェリア、スウェーデン、韓国、フランス、英国、インド、オーストラリア、フィリピン、ブラジル、ロシアの各一と米国の二であった。取り上げられたテーマは、職業奉仕、双子クラブと世界社会奉仕、保健問題、人口問題、平和と寛容、ロータリー財団、国内委員会、ロータリー・センター、水問題、R Y L A、貧困の緩和、ロータリーアクトと青少年交換、識字率と教育、ロータリー家族など、当面のロータリーの課題を網羅している。

本年度に実施されたロータリー・ゾーン研究会は一八で、そのうち米国の六、ブラジル、カナダ、メキシコ、韓国、ペルー、シンガポール、ガーナ、オーストラリア、スイス、ニュージーランド、日本、インドの各一であった。そのうち、わが国の一、二、三、四(A)ゾーンの第三二回ロータリー・ゾーン研究会は、二〇〇三年一月二七日から同月三〇日の間に、新高輪プリンスホテル国際館パ

ミールで開催された。現時の R I が当面する右の重要課題の殆どを、報告と分科討論の形式で取り上げたことは、ご承知のとおりである。

R I では、各地域のロータリー人口の変動に対応するため、特別委員会を設けてゾーンの変更を検討中である。米国の内部でも増減があり、インド、韓国、ヨーロッパ、わが国などが検討の対象となっている。ただ、財政上の債務不履行クラブが多いために、慎重な検討が必要であろうとされている。一ゾーン三五、〇〇人が目処であるから、わが国は近い将来三・五ゾーンから三ゾーンに改編される可能性が高いと思う。

二〇〇二年一月の理事会で決定された会員退会防止パイロット・プロジェクトは、いよいよ本年度から開始されている。一ゾーンから三クラブずつ合計一〇二クラブを選び、各クラブが R I が決定する実行計画に従い三年の期間内に退会防止に必要な事項を実行してその効果を確認するというものである。わが国からは、盛岡（二五二〇）、福島南（二五三〇）、鈴鹿西（二六三〇）、津山（二六九〇）、広島南東（二七一〇）、名古屋大須（二七六〇）、浦和東（二七七〇）、横須

賀（二七八〇）、土浦（二八二〇）の九クラブが選ばれている。

わが国では、このR Iのパイロット・プロジェクトとは別に、会員増強モデルクラブの計画を本年度から実施している。わが国の会員数減少は、サービスの理念や地域社会との関連が希薄であること、若い会員や女性会員の入会が困難であるなどの諸点につき、沿革的、社会的、構造的に特異な原因があると考えられるので、わが国独自の計画的努力が必要であると考えられるからである。各地区ごとに一つずつのクラブを選定し、ガバナー、ガバナー補佐、会員増強コーディネーターの皆様との密接な連絡をもとに、一年間これらの問題を解決する努力を払い、次にまた新しいクラブを選定してこれを三年間繰り返し返すというものである。既に初年度のクラブの選定も終了し、計画を実行中である。

二〇〇三年九月二五、二六日の両日、千葉の東京ベイホテル東急で、第七回日韓親善会議が開催された。前回の会議ののち九年の空白を経て開催されたが、一、二〇〇人に及ぶ両国の会員と家族が参集する盛況で、マジリアベ会長の提唱されたロータリー家族が、東アジアで実現する会議となった。会議は、初めて日韓両

国語を用いて進行し、過去を厳しく見つめることが必要とする意見から、韓国における歴史教育に拘わらず現実の日本社会の温かい公正な現状を指摘して、将来に向けて新たな協調の必要を強調する意見に至るまで、色々な意見が隔意なく論ぜられ、収穫の多い会合であった。

二〇〇四年国際協議会は、全世界から五二九地区のガバナー・エレクトと多数のシニア・リーダーおよび配偶者参加のもとに、二〇〇四年二月一九日から同月二二日までの間、アナハイム・ヒルトンホテルにおいて開催された。現時の R I が直面する右の重要問題に関する数多くの基調講演、講演、パネル討論などを含む一一回にわたる本会議と一六回にわたるグループ討論のほか、配偶者のプログラムとして、三回にわたる本会議と円卓討論が実施された。

国際研究会は、関西国際大会直前の五月二〇日から五月二二日までの間、大阪国際会議場において、小谷隆一国際研究会委員長長の企画運営のもとに実施された。各種講演と出席者との公開討論フォーラムを含む前後六回にわたる本会議と、八つの重要課題を巡るグループ討論、二つの日本語によるグループ討論などが実施

された。

関西国際大会は、五月二三日から五月二六日までの間、大阪ドーム、大阪国際会議場及びリーガロイヤルホテルにおいて開催された。千玄室国際大会委員長ご統括のもと、近藤雅臣委員長、吉川謹司事務総長、井上暎夫財務長はじめ、ホスト組織実行委員会の皆様のご尽力により、四万六千名に及ぶ全世界のロータリアンの参加を得て実施された。質量ともに正に空前の国際大会となったことは、ご承知のとおりである。この大会を機に、RIをはじめ世界中のロータリアンの、日本のロータリーとその背景である日本の文化や社会を眺める目がはつきりと変わったことが実感される。なお、今後の国際大会は、二〇〇五年が米国のシカゴ、二〇〇六年がスウェーデンのマルモとデンマークのコペンハーゲン、二〇〇七年が米国のニューオーリンズ、二〇〇八年が米国のロサンゼルス、二〇〇九年が韓国のソウル、二〇一〇年がカナダのモントリオールで、二〇一一年がアフリカのカイロまたは米国内の都市で開催される予定である。

二〇〇四年規定審議会は、引き続き六月一三日から一八日の間、シカゴ・マリ

オットホテルにおいて開催された。四七六の立法案が提出され、制定案二五〇のうち五〇と、決議案二二六のうち五〇が採択された。採択された制定案には、▽RIの目的を改正してRIがクラブと地区を支援することを追加する▽人頭分担金を三年間に四ドルずつ合計一二ドル増額する▽ロータリー財団管理委員の数を一三から一五に増やす▽会長及び会長エレクトトに対する謝意の表明の条項を削除して事務総長を報酬を受ける唯一の役員とする▽一定の条件をもとにクラブの合併を認める▽PETS（会長エレクトト研修セミナー）と地区協議会を欠席した会長エレクトトから会長になる資格を剥奪する、などがある。また、採択された決議案には、▽長期計画の目標及び項目として、ポリオ撲滅、各種プログラムの重点の所在の明確化、新しいRIプログラムの選定、管理と指導の組織の再構築、すべてのレベルにおける訓練と教育の強化、会員組織の拡大と均質化、公共イメージの高揚の七項目を提示する▽RIの第二標語から性別限定用語を削除してHeをTheyとする▽ロータリー世界平和奨学生を開発途上国から多く採用するように努める▽地区大会の会長代理は地区要請があった場合に限り地区の費用で

派遣するように方針を改正する▽マンダリン語（標準中国語）を公式言語に含めるように要請する▽職業の倫理的規範の高揚を促す▽歴史的に重要な声明や文書の原文の用語を保存することを考慮する▽八歳から一四歳までの子供のための青少年クラブを作る▽ロータリー・リーダーシップ研究会を試験的プログラムに採択するように要請する、などがある。RIの標語は第一標語のみであるとして第二標語の廃止を求める制定案は、日本の代表議員の皆様の断固とした反対意見により、七〇%に近い多数で否決された。全般的に日本語による発言が増加し、注目された。小生もRI理事会の提案を一つ担当したが、これも日本語で提案し、九五%の賛成を得た。数多くのわが国の代表議員が日本語で堂々と意見を發表され、他国の代表議員全員が同時通訳で一生懸命にその発言を聞いておられた。マダリン語採択決議案は、台湾の代表議員がしっかりした日本語で提案され、日本の代表議員から日本語で支持が表明され、七六%を超える多数で採択されたのが印象的であった。これも、関西国際大会成功の成果の一つであろうと思われる。

二〇〇四年五月末日現在、すなわち本年度の一一か月間の R I の財務状況は、収入が七、六五〇万ドル、支出は五、六八〇万ドルであった。収入は昨年比べ三〇%、一、七六〇万ドル、予算より一一%、七〇〇万ドル多く、支出は昨年比べ五%、二九〇万ドル多く、予算より一七%、一、一四〇万ドル少なく、六月の年度末も黒字決算の予測で、予備金に手をつける必要はない模様である。

二〇〇四～〇五年度はロータリー百年の年である。この特別な年度については特別委員会が設けられ、数々の記念の行事や企画がされている。先ず、二〇〇五年の二月二三日は、ロータリー百周年の誕生日自体にあたる。地元における盛大な祝賀行事をはじめ、世界中で特別のクラブ会合や都市間の会合が開催されるように推奨されている。また、シカゴ国際大会は、二〇〇五年六月一八日から二二日までの間、シカゴ市のマコーミック・プレイスで開催されるが、この大会は、百周年記念の国際大会である。そこで、特別晩餐会、百周年パレード、ホーム懇親会、ロータリーの過去、現在、未来をテーマとした会議などが企画されている。さらに、百周年を祝賀する計画として、色々な行事や企画がされている。その主

なものを挙げると、ツイン・クラブ、百周年の鐘、百年史、ポスター・コンテスト、ブース、記念切手、「超我の奉仕」ボランティア月間、子供たちの公園と遊び場の設置、ロータリー・フェローシップの参加、第一回ロータリー会合のレプリカの制作頒布、ロータリー百周年のドキュメンタリー番組の制作、ワン・ロータリー・センターにおける歴史の展示、百周年ソングの作曲、平和シンポジウムの開催、世界中のクラブの百周年地域社会プロジェクトなどである。

二〇〇三～〇四年度のR I理事会は、二〇〇三年六月五日オーストラリアのブリスベーンで、九月二九日から一〇月三日まで、二〇〇四年二月二三日から二八日まで、六月五日から一〇日まで、それぞれエバンストンで開催された。取り上げられた主な議題を挙げると、▽R Iの目的の改正▽ビジネスと専門職の倫理の高揚▽長期計画の目標と目的▽R Iビジョン声明の改訂▽二〇〇四～〇五年度会長強調事項と会長祝賀会議及びロータリー・ゾーン研究会の論題▽会員増強と退会防止▽R I名誉賞▽世界理解と平和賞▽ロータリー百周年をめぐる諸問題▽二〇〇一～二〇〇二年度の国際大会開催地と今後の国際大会準備の進行状況

▽国際大会及び国際協議会のマニユアルの改訂▽投資の方針と投資の現状▽財務
五か年の予測▽ローターアクト・クラブ▽ロータリー地域共同体▽世界社会奉仕
資源ネットワークをめぐる問題▽世界理解及び平和のためのロータリー奨学生選
択の手続▽新モデルクラブとサイバークラブの試験的プロジェクトの現状▽親睦
活動と他の組織との関係▽青少年交換プログラムにおける児童保護と虐待予防並
びに旅行保険問題▽地区の合併と再編成▽アフリカの R I 国際事務局の設立問題
▽マルチ地区 P E T S ▽規定審議会の立法案への対応と理事会提案の作成▽ロー
タリー地域雑誌のためのガイドライン▽提携カードプログラムの拡大▽世界問題
委員会と国家間委員会の報告事項▽非ロータリー諸国へのロータリーの拡大▽ヨ
ーロピアン・ロシアにおける試験的地区▽キプロスにおけるロータリーの開発▽
コーカサスと中央アジアでのクラブのグループ作り▽二〇〇四～〇五年度理事指
名委員会の招集者と開催地の指定、などであった。小生は英語が不得手なので、
終始日本語で発言した。却ってこれが幸いして、十分に意のあるところを表現す
ることができ、他の理事たちも同時通訳で真剣に小生の発言を聞き、理解してく

れ、相応の成果があったと思う。外国の理事たちは皆さん大変親切で、小生に深い信頼を示してくれたことを、心から嬉しく思っている。

(二〇〇四年七月)



ロータリーを祝おう

「ロータリーを祝おう」"Celebrate Rotary"が、グレン・E・エステス・シニア国際ロータリー会長が提唱された二〇〇四～〇五年度のRIテーマであることは、いうまでもない。このテーマは二語からなる簡単明快なテーマである。

周知のとおり、RIのテーマには、一九四九～五〇年のパーシー・ホジソンRI会長以来五〇年を超える歴史があり、最も簡単なテーマは、一九六八～六九年度の東ヶ崎潔会長の「参加し敢行しよべー」"Participate"の一語のテーマである。二語のテーマは、一九六四～六五年度チャールズ・W・ペテンギル会長の「ロータリーに生きよう」"Live Rotary!"、一九七八～七九年度のクレム・レヌフ会長の「手を差し伸べよべ」"Reach Out"、一九八九～九〇年度のヒュー・アーチャー会長の「ロータリーを楽しめべー」"Enjoy Rotary!"であり、エステス会長のテーマ

は四人目である。

「ロータリーを祝おう」というテーマは、ごく単純に考えると、ロータリーが百周年を迎えたのは大変おめでたいことであるので、皆でお祝いをしようという意味に理解される。しかし、エステス会長は、次のような趣旨を述べられて、このテーマがもつと深い意味を持っていると話されている。

「百年に及ぶロータリーの親睦と奉仕には、祝うに足る十分な理由があり、百周年に当たる私たちの二〇〇四〜〇五年度に全ロータリアンに向かってご一緒にロータリーを祝おうとお願いしたい。私たちは、世界の子供たちや今後生まれてくるすべての子供たちへの贈り物として、ポリオのない世界を実現するという大きな成功を祝うことになる。世界一六六か国で一二〇万人の会員が奉仕するという一世紀にわたる成長と拡大を祝い、私たちを奉仕に奮い立たせるロータリアンの心温まる親睦を祝うのである。……百年は重要な礎石であり、そこに到達した団体はほとんどない。このことは、ロータリーが正しい行いをしていくこと、ロータリーの奉仕に対する需要が大きいことを示している。私たちの成功には、数

多くの秘密がある。それは、週例会に由来する親睦と共通の大義、それに世界中に向けて扉と心を開く国際性であり、私たちの誰もが自分ひとりで行うよりはるかに多くの事柄を達成させてくれる構造である。さらに最大の強みは、ロータリーアンが新しい挑戦事項に取り組むに当たって抱き、最後に問題が解決されるまで持続する熱意である。シカゴの鉱山技師の事務所で一九〇五年に始まったロータリーであるが、初期の頃には将来の見通しは殆ど立っていないかった。凍てついた二月の夜に集まった四人の男性のうち誰一人として百年後に三一、〇〇〇ものクラブが会合を開くとはもちろんのこと、その会合が定期的に行われることになるとは、予想だにしていなかった。ポール・ハリス、シルベスター・シール、ガスターバス・ローア、ハイラム・ショレーは、自分たちが最初の奉仕クラブを形成し、二〇世紀を通してこれほど多くの人々の心と魂を掴むことになる運動に着手しているとは思ってもいかなかった。ロータリアンは、自分たちの行動がどれほど建設的な影響を与えるのか、いつも辨わかまえているわけではなかった。しかし、百年にわたる奉仕は、私たちが世界で善行をする計り知れない可能性を明確に示

してきた。今日、国際ロータリーは、世界で最も影響力と行動力を有する非政府団体の一つとして、奉仕の第二世紀に入る用意が整っている。私たちのポリオ・プラス・プログラム、平和および紛争解決の分野における国際問題研究のためのロータリー・センター、国際人道的活動、そして世界中で数え切れないほどの卓越したクラブと地区のプロジェクトは、より良いより平和な世界を達成するためのロータリーの貢献を示している。ロータリーの可能性に対する認識を高め、新しい挑戦事項に取り組み、これらが達成されるまでやりぬく心構えをして、奉仕の第二世紀に入ろうではないか。私たちのクラブで、職業で、地域社会で、そして私たちの世界で、新たに奉仕に献身し、ロータリーを祝おうではないか。……

次年度は、ロータリー家族、保健、水管理、識字率向上を強調してほしい。……

私たちのクラブでは、思いやりと気配りの精神を奨励し、ロータリー家族委員会を活性化して会員の退会防止と熱意に溢れた新会員を入会させ、前途の挑戦事項を克服する新たなエネルギーをクラブに吹き込もう。私たちの職場では、職業の立派な行いの誓いを新たに、職場関係者の手本として振る舞おう。私たちの地域

社会では、草の根レベルでの奉仕活動や百周年記念社会奉仕プロジェクトや祝賀行事に取り組んで広報に努め、野心的な計画に着手しよう。私たちの世界では、ロータリーの国際性を発揮し、文化交流や双子クラブ・プログラム、研究グループ交換、ロータリーボランティア、青少年交換などに取り組み、シカゴ国際大会に出席しよう、そして、ロータリーを祝おう。」と。

エステス会長が指摘されるように、行政組織でもなくまた営利団体でもない善意の奉仕団体が百年間存続すること自体稀有のことであり、況んや四人からなる一つのクラブが一二〇万人からなる三万余のクラブに発展し、さらに次の百年でさらなる飛躍と充実を窺うという事態は、歴史的にも奇跡に近いといえる。私どもは、我々のロータリーが何が故にこのような発展と充実を持続することができたかについて、その原因を一段と掘り下げてみなければならぬ。そして、その原因の的確な認識と行動の正当性の確信を自覚することが、そのままロータリーを祝うことに連なるものであると思うのである。

しからば、その原因とは何であろうか。ロータリーが百年間にわたり発展と充

実を持続してきた原因は数多くあると思われるが、私は次に掲げるところが、その主要なものであると思う。

(1)他人のことを真剣に考え、他人のために誠実に尽くすところに自らの幸せがあると信じて生きるというサービスの理念を、精神的な核心としていることである。何故ならば、この考え方は、人間社会の底流である不変の基本的真理であるからである。

(2)人間は物心ともにニーズの固まりであり、社会はニーズの海であり、このニーズを充たす職業こそが社会の重要な要素であり、社会は職業の集積である。このような見地に立って、職業の持つ意味を正しく認識し、その倫理基準を高め、自己の職業行為を良質化する職業活動を、サービスの理念を実践する基本的な行動としている。

(3)地域社会や国際社会において、価値ある奉仕の目標を選択して確立するとともに、独自の手法を考案して、幾多の有意義な奉仕活動の実績を集積している。

(4)会員の親睦と奉仕を一体として把握して活性化することにより、独特の効率的

な行動原理を確立している。

(5) クラブを原点とし、さらに地区と国際ロータリーの組織を積み重ねて、全体として合理的かつ効率的な人の組織を構成している。

(6) ロータリー財団を構築し、会費とは別に奉仕活動資金を確保するための合理的かつ効率的な資金の組織を確立している。

(7) 組織の全般にわたり、指導者の順次交代を継続するシステムを構築し、さらに指導者の資質の向上をはかる教育システムを確立し、着実に実践している。

私どもは、百周年に当たりロータリーを祝うとは、右に述べたような発展と充実の要因を着実に把握してこれを実行し得た成果を祝うとともに、次に来るべき百年間において、これらの要因に対する認識をさらに明確にし、その実現に向けての行動の強化に着手することを祝うものであり、本年度の「ロータリーを祝おう」のテーマは、まさに私どものこのような認識と行動を自ら祝おうとするものであると信じるのである。

会議前の祈りの言葉

ご出席のロータリアンの皆様、配偶者の皆様

自分のことだけでなく、人様のことを真剣に考え、人様のために誠実に尽くすように努めましょう。そのことによって、初めて自分の幸せを手に入れることができます。人は人様のおかげで生きることができ、社会の中でしか生きられない存在で、しかも心を持った存在だからです。ロータリーは、このことが生きていく基本であると、私たちに教えてくれました。

まず、日常の生活の中で、家族を始め周囲の人たちや地域の人たちに手を貸して、一生懸命に、粘り強く、このことを訴えて行きましょう。そして、このような考えで生きる人を一人でも多く増やし、そのような沢山の人たちと共に生活できるよい社会を築いて行きましょう。

さらに、世界のいろいろな地域の恵まれない人たちに手を貸して、貧困や病気に苦しむ人たちや、教育がないために逆境から抜け出せないでいる人々が自立できるように、救いの手を差し伸べましょう。

そして、争いごとや絶望から人々を救い出し、世界の平和とすべての人たちの幸せが実現するように、勇気を出して、努力をして参りましょう。

これから行われるこの会議が、皆様のご努力によりまして、稔り豊かなものとなりますことを、お祈りいたします。

(二〇〇四年二月)

国際ロータリー理事会における理事退任の挨拶

私が理事として過ごした年月は、まさに夢のような二年間でありました。その任を終えるにあたり、三つのことに感謝をいたしたいと思います。

まず第一に、ラタクルとマジリアベの二人の会長に、心から感謝を申し上げます。ラタクル会長は、サービスの心を日常確固として持ち続けることを教えられました。マジリアベ会長は、サービスの心を人間存在の底からしっかりと見つめるように教えられました。私と私の妻は、これらの素晴らしい二人の会長のご指導のもとに、一年ずつ充実した時間を過ごせましたことを、心から感謝申し上げます。

第二に、私は、二年間を過ごした七人の友人の理事の皆様とのご夫人方、ならびに一年間を共に過ごした九人宛二組の友人の理事の皆様とご夫人方に、妻と

共に感謝いたします。日本語は比較的上手ですが英語は全然駄目な私と私の妻を、皆様方は、温かい友情で、辛抱強くお導き下さいました。まさに、最も質の高いロータリーの友情と寛容の成果を、私どもに惜しみなく与えて下さったのであります。私は、皆様が私どもに賜りましたこの素晴らしい贈り物に対し、心から感謝いたします。

最後に、私は、この二年間の仕事によりまして、国際ロータリーのハードとソフトを、マクロとミクロの見地から、十分に観察し理解をすることができました。私がこの仕事の機会を活用することを可能とさせていただいたスタッフの皆様のご厚意とご配慮に、心から感謝をいたしたいと存じます。

私は、皆様のご尽力によりまして、大阪の国際大会が無事成功裡に終了することができましたことを感謝いたしますとともに、今後とも生涯を終えるまで、妻と共に、皆様との友情を大切に、一人のよきロータリアンとして、しっかりと生きていくことをお誓いいたします。そして、ロータリーが人間社会を一步一步着実によくして行くことを信じかつ祈りつつ、お別れに当たったの感謝の言葉とい

たします。

(二〇〇四年六月)

〈著者略歴〉

菅生浩三 (すごう こうぞう)

1926年10月9日生

1952年3月

東京大学法学部卒業

1954年4月～1956年3月

神戸地方裁判所、同家庭裁判所裁判官

1956年4月～

弁護士として弁護士会の役職ならびに数多くの企業と公私の団体の法律顧問を務める

1969年2月

大阪北ロータリー・クラブ入会

1987年～1988年

同クラブ会長

1991年～1992年

国際ロータリー第2660地区（大阪府大和川以北）地区ガバナー

2002～2004年

国際ロータリー理事

現在

菅生綜合法律事務所主宰

元・朝日カルチャーセンター講師

著書に『ロータリー随想—その周辺とともに—』『続・ロータリー随想—その周辺とともに—』『新・ロータリー随想—その周辺とともに—』『建設工事判例提要く上・下』『請負契約の基本問題』『不動産判例集成く1～5』巻』他がある。

再・ロータリー随想—その周辺とともに—

平成16年10月22日 初版発行

著 者 菅生浩三

発 行 所 株式会社出版文化社 (ISO14001認証取得: JQA-EM2120)

〒540-0003 大阪市中央区森ノ宮中央1丁目14-2

TEL06-6941-1321(代) FAX06-6941-1671

E-mail osaka@shuppanbunka.com

〒111-0053 東京都台東区浅草橋1丁目9-16

TEL03-5821-5300(代) FAX03-5820-9543

E-mail tokyo@shuppanbunka.com

受注センター TEL03-5821-5300(代) FAX03-5820-9543

E-mail book@shuppanbunka.com

発 行 人 浅田厚志

協 力 朝日カルチャーセンター

印刷・製本 株式会社シナノ

当社の会社概要および出版目録はホームページで公開しております。
また書籍の注文も承っております。→<http://www.shuppanbunka.com/>
郵便振替番号 00910-1-32891

再・ロータリー随想 - その周辺とともに -
菅生浩三

2004年10月初版発行

電子文庫発行 2008年11月